

# 読売教育賞

最優秀受賞者 実践報告書集

「実践活動の概要」

2016年(平成28年) **読売新聞社** 



第65回最優秀賞受賞者、関係者 (2016年11月11日、読売新聞東京本社よみうり大手町小ホールで)

読売教育賞は、読売新聞社が教育の発展の一助にと創設し、 1952年に第1回募集が行われました。

対象は教育の現場で意欲的な研究や創意あふれる指導を行い、 優れた成果をあげている教育者や団体です。

各部門最優秀賞受賞者に賞状、盾と副賞(1件50万円)を、 優秀賞受賞者には盾、選外の方には記念品を贈ります。



第65回 読売教育賞は以下の12部門の募集を行いました。

- ①国語教育、②算数·数学教育、③理科教育、④社会科教育、⑤生活科·総合学習、
- ⑥健康・体力づくり、⑦外国語・異文化理解、⑧児童生徒指導、
- ⑨カリキュラム・学校づくり、⑩地域社会教育活動、⑪特別支援教育、⑫音楽教育

第 65 回	読売教育賞選考委員			
	①国語教育	明治大学教授	斎藤	孝
	②算数・数学教育	東京理科大学教授	秋山	仁
	③理科教育	東海大学特任教授	滝川	洋二
	④社会科教育	筑波大学名誉教授	谷川	彰英
	⑤生活科・総合学習	横浜国立大学名誉教授	市川	博
	⑥健康・体力づくり	筑波大学教授	田中喜	<b>喜代次</b>
	⑦外国語・異文化理解	津田塾大学教授	田近	裕子
	⑧児童生徒指導	東京学芸大学名誉教授	河野	義章
	⑨カリキュラム・学校づくり	学習院大学教授	佐藤	学
	⑩地域社会教育活動	東京大学名誉教授	佐藤	一子
	<b>①特別支援教育</b>	九州保健福祉大学教授	藤田	和弘
	⑫音楽教育	東京芸術大学教授	山下	薫子
	読売新	聞東京本社編集局教育部長	古沢自	

\*うち、健康・体力づくり、外国語・異文化理解、カリキュラム・学校づくり、音楽教育の4部門を除く、8部門で最優秀賞授賞。

## 目 次

国語教育]  実践報告「エッセイと小説の書き方を教える意義」
【算数・数学教育】
生徒の活動を重視した数学 I 「データの分析」の授業実践
【理科教育】
化石の魅力を多くの子供達に伝える 相場 博明
【社会科教育】
本当の主権者教育を求めて
【生活科・総合学習】
ふるさと学習を通して、地域を愛し、
地域の課題解決に取り組む児童の育成
【児童生徒指導】
不登校対策「みんいく(睡眠教育)」を通じた学校づくり
【地域社会教育活動】
子ども・若者の地域社会への参画意識の涵養に関する一考察
NPO高知市民会議(団体)
【特別支援教育】
社会自立を支援する学校設定教科
「キャリア・チャレンジ」の挑戦

# 実践報告「エッセイと小説の書き方を教える意義」

ー 授業「創作と鑑賞」を通して ー





兵庫県立神戸甲北高等学校 教諭

あらかわ みのる

# 荒川 稔

1962年生まれ。1984年佛教大学国文科卒業。2003年京都造形芸術大学・通信課程 芸術学部 洋画コース卒業。2007年慶應義塾大学文学部・通信課程卒業。2010年放送大学大学院・文化科学研究科修了。2012年京都造形芸術大学・通信課程 芸術学部 文芸コース卒業。2016年東洋大学・通信課程 文学部日本文学文化学科卒業。1984年より兵庫県立高等学校に勤務。2013年兵庫県立神戸甲北高等学校に赴任。現在に至る。2016年11月、共著「高等学校国語科 授業実践報告集 アクティブ・ラーニング編」(明治書院)刊行。

#### 第65回 読売教育賞から

#### 【国語教育】



生徒たちと短歌の分析結果 を議論する荒川教諭(右)

常の国語授業にも取り入れたい 伝える力は社会で必要。今後は诵

J荒川教諭は話す。

(安田弘司

短歌賞」入賞作を題材に分析した。 も身につかないのではないか。創 れ?居らんがな」消せずに五年〉 んな発想で始まった。 に行う授業「創作と鑑賞」は、 作活動と小説や詩歌の読解を交互 力は、ただ作文を繰り返し書いて 2年生6人が10月、 小説が書けるような高度な文音 〈留守電に元気な頃の母の声「あ 「元気な頃」の部分に着目した 「河野裕子 そ

兵庫県立神戸甲北高校 荒川稔教諭 54

表現の一つ一つを意識するように

同じ小説でも読み方が変わった。

なった」と話す。

「作家にならなくても、文章で

の力を培い、そこから発展させて小 ィーが感じられた。表現力だけでな 説を書くという発想にオリジナリテ 育として質の高さも示されていた く、読解力の向上も見られ、国語教 斎藤孝・明治大学教授「エッセー

う生きていない、と感じさせてい る」と指摘。別の生徒は「『消せ で読み解いてゆく。 込められた多様な思いや工夫を皆 寂しさが伝わる」。三十一文字に ず』という言葉だけで懐かしさや 生徒は「この一言でお母さんはも

表現と読解

力

同

効果もある。小南朝陽さん(16)は説を書く」こと。読解力を深める の目標は「原稿用紙15枚以上の小 や短歌を作る。最終的な生徒たち で試しながら、まず短いエッセー 授業では、発見したことを自身

#### 【最優秀賞選評】

#### 斎藤 孝 明治大学教授

「エッセーの力を培い、そこから発展させて 小説を書くという発想にオリジナリティーが 感じられた。表現力だけでなく、読解力の 向上も見られ、国語教育として質の高さも 示されていた」

### 1 はじめに

今回、勤務校である神戸甲北高校で私が行っている『創作と鑑賞』の授業での、小説創作の授業の実践とその授業による生徒たちの読解力の向上について報告したい。本授業は、総合学科である神戸甲北高校の学校設定科目として設けられたものであり、対象生徒として、第2年次生の自由な選択科目として設定されたものである。ご存じの方も多いと思われるが、総合学科では各学校独自で従来の教科の枠にとらわれない授業が開講可能であり、そこでは市販の教科書に基づかない自由なカリキュラムで開講することができる。本『創作と鑑賞』の授業も本校が平成9年にそれまでの普通科から総合学科に転科された際に初めて設けられたものである。

実は私自身はその平成9年の転科当時に本校 に勤務して、その創設初期からこの授業を担当し たことが幾度かあった。しかし、当時は従来の国 語科授業の延長線上のもの、例えば、短歌創作 や短編小説の鑑賞といった国語の表現領域など で行う学習活動を行っていたに過ぎなかった。生 徒たちが熱心に創作して書いた原稿用紙何十枚 もの小説作品を、一方的に助言・講評するだけ といった情けないほどの助力しかできなかったも のである。試行錯誤だったからといえば、それま でだが、今現在、本授業で行っているような、 段階を経てエッセイから小説へとステップアップ して文学的文章を書かせるものだったら、どれだ け彼女たちの才能を伸ばせたろうかと思うと慚 愧に堪えない。正直、当時の在籍した生徒たち には申し訳ない気持ちで今もいっぱいである。

また、私個人について本論考に関連したことを 述べれば、平成14年に美術科の高校免許を取 得しており、京都造形芸術大学の通信教育課程

の洋面コースを卒業している。さらに同大学の文 芸コースで平成22年から24年までの小説の書 き方等を勉強して、その課程も別途卒業してい る。そのほか、大阪芸術大学の通信課程など複 数大学の芸術系・文芸系の学部に籍を置いたこ ともある。現在の本授業の実施において国語教 師として文章を連ねるというよりは、美術・芸術 活動として絵画制作で油彩作品などを完成させ た体験、エスキースに始まり習作を重ねて絵画を 完成させる自らの体験や、テーマを表現すること への洞察が非常に大きなアシストになっているこ とは否めない。また、芸術分野の一つとして文芸 分野に関する今回の実践でも特にその京都造形 芸術大学文芸コース関係で自分が受けた講義 やワークショップを参考にしたものが出発点であ ったことを断っておきたい。

この実践報告は私自身が担当した平成25年度から28年度の連続する3年4か月間を主に対象としたものである。授業内容に関して言えば、その前半のエッセイを書かせる箇所は平成24年度以前に私が前任校で『国語表現』の授業として行ったものと内容面で共通する部分が多く、一部その際のものも言及している。いわば、科目『国語表現』の発展型としての要素も含んでおり、総合学科のように独自のカリキュラムで実施できない普通科高校でも言語活動や、表現分野の授業にも生かせる点も多いと思われる。

## 2 授業『創作と鑑賞』の概要と 全体計画

#### エッセイをスタートにした文学的な 文章の書き方

新学習指導要領で科目『国語総合』において は内容の「B書くこと」の(2)アに「情景や心情の 描写を取り入れて」随筆などを書くことを求める 記述がある。同様に『国語表現』でも言語活動と して「小説などを書いたり、鑑賞したことをまとめ たりすること」、また『現代文B』では「創作的な 活動を行ったりすること」とある。しかし現状、果 たしてそれらの教育活動が適切かつスムーズに 行われているのだろうか。無論、従来からでも夏 季休業中での読書感想文や、授業中での短歌や 俳句創作、進路を踏まえた小論文のように論理 的な文章を書くことなどが適宜行われて来たも のと思われる。ただ、エッセイと小説創作は、今 までの日本の国語教育の中ではふさわしい指導 方法が見つからなかったのが実際ではないだろ うか。私自身は、この数年間の様々な実践活動 によってエッセイや小説といった文学的な文章 は、その描写文の書き方や発想法がリポートなど 論理的な説明文とは書き方も指導法も全く違う ものだとの認識を持っている。

それはエッセイからスタートさせて、延長線上に小説創作をさせると、非常に効果的であったという実践結果から生まれた実感である。実際に前任の普通科高校でエッセイを書かせた際に、ある3年の女生徒は「こんな文なら、いくらでも書けるよ。だって、ふだんブログに書いてる文章と全く同じでいいんだもの」と目をキラキラさせながら得意げに語ったものだ。彼女、曰く、進路で書かされた小論文の場合にはいろいろと「勉強」して他からの考えや情報を探し出す必要がある。ところが、エッセイの場合は自分の中に深く降りていけばいいだけで簡単なのだそうだ。しかも、自分がふだん気にも留めなかった気持ちや事柄を「再発見」するから、とても楽しいというのである。

実際、指導している教師側も書いている生徒 たち自身に想像力や過去の記憶を喚起する様々 なサジェスチョンや疑問を投げ掛けはするもの の、基本的に何を書くかは彼女たちの主体的活

動に任せっきりとなり、「断片メモ」の作成中やシ チュエーションの想起中は10分、15分とひたす ら待つだけで、「楽」なものである。個々の漢字間 違いや言い回しの間違いは作品完成後、指摘す ることはあるが、創作中は彼女たち自身で勝手に 辞書を引くし、該当語句を平仮名にするか漢字 にするかは全くの自由である。何よりも完成作品 は驚くほどバラエティーに富んでいるし、また、 ふだんの現代文の成績とは必ずしもリンクしてい ない。「面白く独自性あふれる作品」を書く生徒 が、どちらかといえば、国語の成績が悪かったり するケースも多い。何より、受講した生徒全員が 前述の女生徒のように、それぞれが毎回、自分 の作品はもちろん他の生徒作品からも様々な 「発見」を自主的にして、創作意欲を喚起し続け ているようだ。

# 2. 授業『創作と鑑賞』について、その概要と全体計画

『創作と鑑賞』は総合学科である神戸甲北高校の学校設定科目として週1回、金曜の午後2時間連続の授業で2単位ものとして設置されている。受講生徒は平成25年度が10名で、同26年度が12名、同27年度が5名である。創作に関する意欲の高い生徒が集まっており、25年度で言えば10名中・7名が何らかの形で過去に自分流で小説を書いた経験がある。ただし、それは国語的な視点からみれば、ライトノベル的な作品で、きっちりとした描写表現ができているものではなかったようだ。26年度は12名中・3名、27年度が5名中・1名、28年度は6名中・2名である。

現在の『創作と鑑賞』は私が本校に再赴任した平成25年度から資料1にあるような年間計画のもとに行っている。また、本授業では、一応、

#### ■ 資料1 平成27年度 実践計画

【テーマ】・単元	目的・内容	学習活動
A.【水の入ったコップ】	感覚をことばに変換。写生力の発見	エッセイ創作
B.【最初の記憶】	時間の発見。虚構と文学の発生	エッセイ創作
C.「物語キャッチボール」 ワークショップ	二人の間で紙面上の対話 (シナリオ形式) で行う物語創作。 他者性の発見	作品鑑賞
D.小説分析	全国高校文芸コンクール過去作品の分析。「羅生門」の再分析	ワークショップ創作
E.【もう一つの自分】	自身の客体化、身体化	エッセイ創作
F.30枚作品の創作	夏季休業中に自宅で15枚以上を書き、残りは2学期始めに 学校で	小説創作
G.短歌分析と創作	短歌の鑑賞とコンクール応募用の創作	鑑賞と創作
H.「物語バスケットボール」 ワークショップ	3~5人のグループで一つの物語の展開・状況を語り継ぎ、 物語の成長力を体験する	物語創作
I.短編小説創作	各自、応募したいコンクールの作品を創る	小説創作

最大の目標は全国高等学校文芸コンクール(主催:全国高等学校文化連盟・読売新聞社、応募締め切りは平成27年度のものが9月16日)の小説部門(400字詰め原稿用紙30枚以内)に応募することを努力目標として義務づけることを受講生徒にも伝えてある。そのために夏休み中に最低でも15枚以上の枚数を仕上げてくるように指示している。しかし、夏休み前にガイダンスを行っても、結果的に書けなかった者も当然、出てくる。そうした者は二学期の評価成績として低くなるものの、その後の他のコンクールへの応募作品の執筆代用で点数は与えるようにしている。

25年度と26年度について言えば、大部分の 者が15枚以上書いてくるが、5枚程度しか書け なかった者も26年度は3名いたのが実情であ る。逆に非常に意欲的でその能力も高かった27 年度で5名中4名が書けないという事態も起きて いる。本授業の年間の評価としてはこの夏季の 15枚小説創作が最大のものとなるが、日々の評価は後で紹介する600字のエッセイ作品と、その事前に作らせる〈断片メモ〉、事後にまとめさせる〈授業記録シート〉といった一群のセット提出物や、その他の提出された創作作品で行っている。通常の『国語総合』などといった座学の授業で行われるペーパーによる定期試験は一切実施していない。

#### 3. エッセイを書くことを通して培われる ものとは(『文章表現 四〇〇字からのレッスン』から)

さて、本授業でその文学的な文章を書かせる際に、資料1で云えば、単元A、B、Eで行った600字エッセイ創作が重要な基礎となっている。これはテキストとして購入させている『文章表

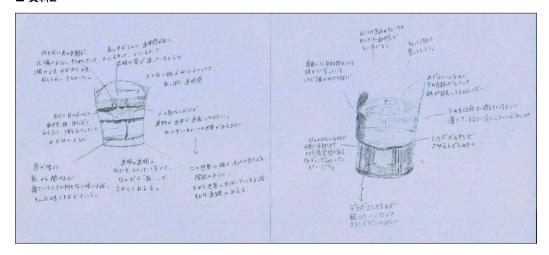
現 四〇〇字からのレッスン』(ちくま学芸文庫) の実践や考え方が非常に大きな参考となってお り、例えば、その著者、梅田卓夫氏が強調され ていたエッセイを書く際の注意点2点はそのまま 転用している。1つは自分にしか書けないオリジ ナルな文章であること、もう1つは誰にでも分か るものでなくてはならないことである。これはオリ ジナリティーとは決して独りよがりではないこと や、どこかで見た文章やコピー&ペーストとは対 極なものであることを生徒たちに認識してもらう ためでもある。また、この2つの注意点を「こと ば」が持つ曖昧さや不完全性とともに、感じたこ とを言語化することの難しさや、一度表現された 「ことば」の解釈者による多元性など、さまざまな 性質や表現活動の奥深さと合わせて、私はエッ セイ以外の創作活動で1年間通して問い掛ける ことにしている。それは他のプロの小説家の小説 作品の鑑賞の際にも折りに触れて繰り返し、教 授するこちら側も生徒と共に常に再考を迫られる ものでもあった。

単元A「水の入ったコップ」をテキストと違い、 生徒が最初に作業する課題に私は設定した。そ こではまず水の入ったコップを実際に机上に置

き、鉛筆で「絵」として「描く」ことから始められる。 ここで多くの生徒は国語の授業で絵を描くことに カルチャーショックを受ける。もちろん、これは今 までの作文教育的な説明文を「書く」という無意 識の固定観念を排除する意図的な狙いを込めて 私は最初に設定している。ただし、「描く」といって も通常のイラストを描くものと違って、その絵の横 に感じたものを単語や語句で書き殴ること (断片 メモ)を義務づけている(資料2を参考)。前書 で、梅田氏はこの課題を「ふだん見慣れているも のを題材に」することで、概念ではなく目の前にあ る現実としての対象としてコップを「細部・断片」 で見ることの大切さを83-86頁で説く。そこで、 「目」と「ことば」をリンクさせる狙いがあるというの である。実際、この授業を実施すると、生徒たち は事物をありのままに感じる観察力を目覚めさせ ずにはいられないし、そこで感じたものを「ことば」 にする回路を目覚めさせずにはいられない。私自 身はこれを子規の唱えた「写生」の体現として描 写文になっていると考えている。

そして、コップの描写後10分も経たないうち に、見て感じた「ことば」を絵の横に書き添えさせ る。その作業も開始後、数分すると、私はそれま

#### ■ 資料2



で一切の沈黙を破って、「何が見える? 冷た い? どれくらい? 感触はザラザラ、ツルツル? それって何時のこと? 去年? 子どもの頃? 誰がいた、誰といた? その時の日差しは? 何 か音がした? それは誰の声?」というようなさま ざまなサジェスチョンをたたみかけ、次々と語りか ける。梅田氏は教師側からのこうした示唆を提案 されていないが、私は毎回積極的に行うことにし ている。それは何も言わなくても「ことば」を書け る生徒もいるが、数語で全く手が止まってしまう 者がいるからだ。私は「ことば」との回路を、視 覚だけでなく聴覚や触覚、記憶を含む時間感覚 をも目覚めさせるきっかけとしようと意図してい る。感覚とことばのリンクの強化だけでなく、各 人にそれらを「発見」させるプロセスを体感しても らうことを何よりも重視するからである。そして次 に、こうして得た〈断片メモ〉の「ことば」の中か ら、エッセイのもととなるストーリーを生徒各人が 個々に発見して「物語化」してエッセイ作品にま とめていくのである。

以後、単元B以降の2回目のエッセイ創作はも ちろん、絵こそ描かないものの、他の小説創作 においても事前に白紙を配り、そこへ〈断片メモ〉 を必ず書かせることを義務づけている。というの も、こうした〈断片メモ〉なしに「物語」を始めか ら書かせると、妙に作文的にオチのついた説明 文化したり、どこかで聞いたことのある既知のス トーリーに酷似したりするからである。自身の感 性で「感じたもの」を、オリジナルな表現に変換 するには何よりも「不完全なことばたち」との真剣 な対峙が必要であるからだと考えている。当然、 〈メモ〉された「ことばたち」の大部分は実際の文 章には使用されず、「描写文」として結実していく 際に使用されるのはほんの一部に過ぎない。確 認すると、時にはほんの2・3語しか使用されな いで書かれる場合も少なくない。〈断片メモ〉はあ

くまできっかけに過ぎず、生徒たちが本当に書き たいものは書かれながら発見していく場合が多 く、それがまた文章を書く喜びや面白さになって いるとどの生徒も報告してくれている。また、梅 田氏がいうこの〈断片メモ〉は通例、マインドマ ップと呼ばれる連想方法であり、氏の全くのオリ ジナルではないと私は理解している。

こうして書かせるエッセイのテーマは単元B 「最初の記憶」、E「もう一人の自分」と続く。

単元B「最初の記憶」は、自身の最も古い記憶 を想い出して書くというもので、梅田氏はそこに 事実と違う虚構が入り込み、文字通り「文学の創 成」が起こると評している。私も同様の現象を認 知しているが、さらにそこへわれわれ人間が生き てきた過去を認識し、今、生きている現在からふ りかえる点で「時間の発見」を生徒たちには強く 訴えている。何時何分という時計で示される客観 的な時間とは別物の流れる時間、幼児のころか ら現在まで続く記憶の中の人物や事物との再会 が起きるのである。例えば、資料3を見てほし い。実際に28年度生徒が書いた単元Bの「最初 の記憶」エッセイであるが、通常、こうした清書 用紙に書いて作品を提出させる。1行目の「廊下 に怪物が出ると思っていた頃だった」とあり、ここ には今は思っていないと現在時点での視点が明 らかに言外にある。「父はいつもより強引に私を 布団から」という2行目の記述にも「いつも」とい う時間表現(これを授業では〈過去積み〉と呼ん で、書かれていない出来事・ストーリーを想起さ せる点でバック・ストーリー表現と説明してある) が含まれている。全生徒の創作作品を提出後、 無記名でまとめた原稿を印刷配布して合評会に おいて、こちらの分析講評でこうした指摘をする のが通例の作業である。

同様に単元Eでも「もう一人の自分」というテーマでエッセイを書かせる。そこでは、例えば、

#### ■ 資料3

今日			は認めない。) は認めない。)	在認しておくこと。 大○○字以内のこと。 下書きの原稿用紙で 下書きの原稿用紙で	清書作品	元の断片メモの例示 (多ければ、一部でよい)	せて作ったか。)
をがりの影が半聞きにしたままま、てい。た部屋のドアは、思ってはかけれていた人とひどく似ていて、つい目ををらした。「はかけていた人とひどく似ていて、つい目ををらした。」のでは、もののはいなるトイしから出ると 母とは、女り目がそこだ。 あんトイしゅ 一般でにあるトイしから出ると 母とは、女り目がそこだ。 あんトイしゅ	は に に な に に な に に た が に に に に に に に に に に に に に	「お前のせいだ」と言われた、あからかいけど、ごめんかさい」と言った。 「お前のせいだ」と言われた、あからかいけど、ごめんかさい」と言った。 だいが出をうか夜が嫌いで仕方なくて、早く布団にするすりたい。	界では、頭を抱えるように座っていることしが解らない。「はかけた。現がはるわが止す、たと思えば、目の前に人が座っていた。ぼかけた視していることしか解らない。早く、まの温かい布団に帰りたが、た	歩き出した。寝ばり眼には、オレンジ色の既明が謝屋をい。ばいに布団から引き離し、芝生だりきる前に引きするようにして早時せで目をう。すらと関けるのを確認すると、父はいうもより強引に私を廊下には怪胸が出ると思。ていた頃だ。た。	題「半間き」 ベンネーム(3分n2 )	がでに物 麻魚 一点	◇ ワークショップ・テーマ【最初のご記憶】 について、母の顔にキズをつけ、 解き を思い出していくと、ゲームの中のも、ラクターを大げさに添が。ていたのを思い出していくと、ゲームの中のも、ラクターが出まな人のゲーム 解き を思い出していくと、ゲームの中のも、ラクターが出まな人のが、人格さ

自分の「手」や「足」を全く別の生き物として見る ような自己の再発見・客体化および自らの身体性 への認識を生徒に体得してほしい意図として例 示している。つまり、単元ABEの三つで、自己 以外のまわりの事物・空間の認知による他者感 覚、自分の生きた時間・歴史を遡及することで 現在もやがて過去になる時間感覚、自分自身を も客体化することによる客観感覚を育成しようと 私は意図して構成しているのである。無論、それ ぞれの感覚は独立して育つというよりは混在・融 合して、生徒たちの中に自然と培われていくもの であったが。

その結果、生徒たちは発表された互いの作品 を鑑賞したり、こちらの分析を確認したりしつつ、 回を重ねるごとに自らの感性やまわりの事物に目 を開き、書くことでのさまざまな「発見」を繰り広 げていったのである。その際、特に描写と説明の 違いを徹底して告知して、描写することの大切 さ、そのために「感じる」ことの重要性をこちら側 としては口を酸っぱくして説いたつもりである。ま た、オチを無理矢理つけずに読み手の追体験を 重視させている。すると、いいエッセイを書く生 徒が毎回、何人か現れ、それが刺激となり、ま た次回は別の生徒がいいものを書くという相乗 効果が表れている。

# 小説とは何か。

#### 1. 小説をいかに読み、いかに書くべきか。

さて、前記のエッセイの実習に入る前から、本

授業では、エッセイや小説など文学的文章を鑑 賞・読解する際に以下の観点での鑑賞、分析作 業を行っている。詳しくは資料4を見てほしいが、 項目だけを抜粋すれば以下のようになる。

①変化・発見、②ズレ対比、③吟味・評価、 ④過去積み、⑤未来予測、⑥世界観、⑦謎。 これらは私自身が小説作品を読解する際はもち ろん、自ら小説を書く際に気をつけている点を自 分なりにまとめたものである。これらを創る際に、 多くのプロの小説家の『文章読本』系の創作方 法を書いた本を始め、さまざまなクリエーター、 脚本家やマンガ家の創作術を参考にしたもの の、全くのオリジナルなものである。ことに実際 に文章を読解する際の運用時には多くの場合、 ①変化・発見と②ズレ対比の二つの観点だけで 十分に文章の「物語化」もしくは「小説化」は可能 であることが多かった。そして、実際に生徒作品 で優れているとこちらが感じた箇所は概ね、この ①から⑦の観点で解説することが可能であった し、生徒たちにもその分析を納得してもらえたよ うである。例えば、資料5は残念ながら落選して しまったが、とあるコンクールに応募した27年度

■ 資料4

#### \* 小説の文章とは

·会話文

... これのみではライトノベル

・地の文 A説明文 ... (小論文) ... 要所では小説でも必要

B描写文 ... (エッセイ) ... これをいかに書くかが難しい

#### \*小説を書く意義とは

つまるところ、小説作品中に、疑似世界、疑似現実を展開させるというのは、現 実世界をどう見て、どう捉えるのかという生徒自らの「世界観」を問う形にならざる を得ない。

- \* それは普段、自分が何を感じ、何を考えているかを各々が客観的に捉え直すこと。
- \* さらに言えば、日々の生活の中から「変化」や「発見」を見つけ出すということ、自分 の過去の行動から今が立脚していることに気づく「過去積み」。
- \* その反対に今の行動が未来へどのような影響を与えるかを因果関係も含めて「予 測」する作業。
- \* 自分がいかに他者とは違う存在であるかを考える「ズレ」および「対比」。
- \* それら、過去、現在、未来における自分や他者の行動さらには社会・国家の有様 を「評価・吟味」すること。
- \* 読者とともに挑む「謎」の提示と、その回答方法。
- \* これらを考えて行くと、小説創作を行うということは、感性、知性、知識さらには道 徳観から世界観といったレベルまでを総動員して対応をせざるを得ないではないか。 それは読書が全人格的な教養を養うのと類似した広さを持っている。
- \* また「よく書く」ためには、当然「よく読む」ことが出来なくてはならない。 生徒たち自身の提出原稿を始め、高校生のコンクール入選作から現役のプロ作家ま で前記の観点群での「読解」が、その成長に寄与した大きな要因であった。

の生徒作品の冒頭である。分 析してみれば、原稿用紙2枚 目の4行目「いつのまにか静 かになっていた教室には、た くさんの夢が浮かんでいた。」 という記述は実に巧く秀逸な 表現である。それまでの教室 の雰囲気をまとめつつ、その 「変化」を「発見」していて、 読む側の読者に的確に感情 移入しやすい。さらに、終わ り5行の「消えた夢の欠片た ちを追うように海の底に沈ん でしまいそうになる。」から「あ あ、溺れる。」と繋がる箇所を 私は初めて読んだとき、見事 な展開に絶賛するほかなか ったが、ここにはまわりの状 況を比喩的に文章化する感 性と明確な認知力は観点③ 吟味・評価によるまとめと同 時に、自己以外の他者の世界 をどう捉えるかという観点⑥ の世界観への萌芽が存在 し、そこに読み手を煮きつけ

魅了する心地よさが存在し ているように私は感じ、生 徒たちにも説明している。 ちなみに、この生徒作品は 一切こちらが手を入れた 部分はない。書く作業中 に、テーマに沿ったいつも の想像を喚起することばや 疑問は投げ掛けたものの、 彼女が一人で書き出し、書 き終えたものである。27年 度生徒にはこのほかにも優 れた短編小説作品を書く ものが多かったが、残念な がら各種公募賞で賞を取 るまでには至っていない。 もちろん、1年間週2時間と いう限られた指導で、そう した小説を完成させるのは 無理があるのは分かってい るし、別段、こちらも入賞 するために書かせている訳 ではない。あくまでも主眼 は生徒たち個人の感性や 読解力、文章力の向上にあ るのだから。まして、試行

錯誤しながら実際に生徒たちが自由に小説を書けるようになるのは、半年ほど経った10月ぐらいからであるから、なお難しい。ただし、単元Gの短歌創作で書いた作品を各種公募コンクールに応募させているが、毎年、数名が入選・入賞している。平成26年度斎藤茂吉ジュニア短歌コンクール優秀賞や平成27年度前田純孝賞学生コンクール入賞などといったものである。つまり、変化や発見といった観点を学ぶことは、小説だけに留まらずあらゆる文学作品へ繋がるものだと

#### ■ 資料5

	112		#-   I.	1 11	le II	141		/	ints I		i eb	1				
「「こうこと、」、加こ子でごし、下るりも行っている。」、加えるのでは、「下でラエなん	まあ気にしない、気にしない。	いよね。年が玉れる。てよく聞くリン・・・	花に囲きかて仕事する。ていうのもなんかいとか。私け、こう花とか好きだし、いろんな	と小じ、あ次の想像2。可愛いお花屋さん	れるし ho こここ。 最高 U ** か を 持 ち にも な	きて、歌もうたらる。いりウッド映画なんか	もがびっくりするような美しさで、環枝もで	倒えば想得その一。世界的な大物女優。誰と	寄というのを想像してみた。	展内と続きを話し出す先生を横目に利は、	ft U # 1	だ。将来の夢というのも明確に出てきたんじ	「まあ、お前たちも高校二年生になったん	高校二年生の夏、 先生が黒板に書きだした。		「包含」
実へ展された。は、これには、これには、これには、これには、これには、これには、これには、これに	認   h   3   1 。	沈んでしまい そうになる。	消えた夢の欠片たちを追うように海の匠に近がり、十のように。遙が笑、た。	ように。真夏に咲くひまわりのように。パリ	レッドカしペットに立っにりう。上艾優の一切をはいか、幼稚園の先生になりたいのし		ちはまるで、角のように泳いで消んていって	出せなか、たのだ。相優してきた夢の欠片た	「私は・・・」言葉が出なかった。いか	が期待をこめた目でふいに聞いてきた。	「なんが将来の夢とかあるの?」と隣の盗	たくさんの夢が浮かんでいた。	いつのまにか解かになっていた数室には、	そういれば、私は何を考れていたんだりけ。	かしたいよね。あ、なんかいいかも。	きだら。心りの釘角なんかにお店出したりと

私は考えている。

#### 2. ワークショップ(「物語キャッチボール」と 「物語バスケットボール」) を通して

次に、単元C・Hで行っているワークショップを紹介したい。これらはどちらも前記した京都造形芸術大学の文芸コース関連で私が受講したものを私流にアレンジして再定義したもので、ネーミングも私が勝手に名付けたものである。

まず「物語キャッチボール」とは、基本、二人の対戦方式で行い、それぞれが自分の想定したある特定のキャラクターになり切って、白紙の紙面上で会話をシナリオ形式で語り合うといったものである。資料6に実際に生徒たちが書いた作品がある。そこでは蟻と救世主が語り合っている。具体的なやり方としては最初7分ほどでお互いがなり切るキャラクターと、今、起きている「大事件」が何かを考える。やり取りは一切紙面上で行い、「口頭で話すことは不可」が絶対的ルール

である。であるから、この「大事件」の内容や自分が何者であるかも詳細は最初、相手側にはまるで分からない。ただ2・3 語、自分のキャラクター名を自己紹介的に名乗るのが唯一の音声であり、以後残り40分近く一切が沈黙の中、自分の番が来たら相手の会話への対応を会話形式の文字で書き込み、互いに対話し続けるのである。また、もう一つの重要な約束として、一度書かれた相手の文章を否定しなければ、それは事実として認定され、不可逆的に戻ることはできないと

#### ■ 資料6

アリ「うちあああし」	
未開の地から突即規がれた牧世主「と"うした人た"い子猫ないか」	
A「僕を踏みつぶしたない絶対許ないい!」	
M 野りつかごかても生まているないででは生命力の高い雑草のようだわり	
A「馬鹿にしてるのか」慰めてるのかでっちなのそれ。	_
ああ、ててツ絶対許さない、おえ、居場でありませんか了」	u
M 電場所が知りたいのならまでの別使いになってくれないか」	
A「31に良いけた、アリなトかる召し使いたしてたうするの?」	
M「アリット係が者,で聞くからね。、チュと食事に困ることはなくなるよ」	
A「待って、それもしかして僕を食べる人Cドないよね。	
お注意うよもいろ」	
MTP1を食がたは腹吸しにならないさ。」	
A「…良かったあ。あれ、でも僕/人じゃもなたの食事全て己選べ	
19 C. P. S. T	
M でんかことはどうでも良い。とりあれずでし使いが、気しいた。」	
A「えー…。まあいいや。とりあえず約末は字でた。」	
Mでもちのろれて、子猫ちゃん。」	
A「キャララゼネ!」	
M「怒らないで"。笑ってる顔が一番可愛いよ。」	
A 「待てそれ言う相手間違ってる。僕でりだよ!?」	
M.「そうだったね」ああれりは誰にでも優しくしてしまう罪な男生」	
A「とうしょう、コイツを主トに選したことを早ま後悔いてる自分かいる。」	
MT後悔かんかさせないよ。ちゃんと紀人を探してあげるのらねら	
A「ありかとうへでもそのもりうはなんとかしてほしいな…。	
あ、その死人が甲北高校の生徒だってことは分かって3人だ、	
それだけだけとっ」	
M「キャラはどウレドウもできないさ、制服を書でいたということかい?」	
A「そうだね。あなたのせいで僕のキャラは迷走してるけらねる」	
兵 庫 県	

いうルールがある。例えば、 資料6の3行目で「蟻が踏 みつぶされた」という事実 を、4行目で救世主が認め てしまっているので、これは 実際にあったことになって しまう。

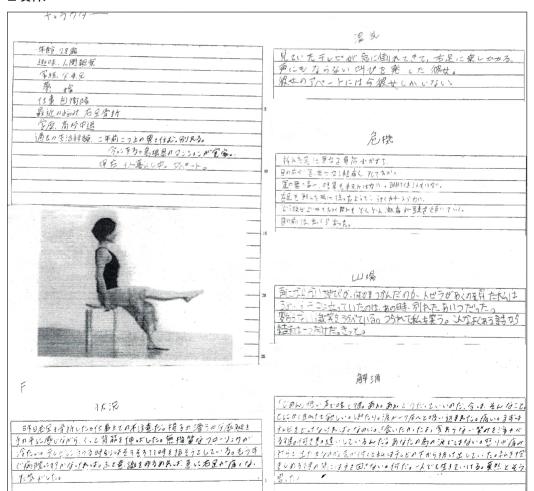
つまり、このワークショッ プでは一人で物語を書い ているときには絶対にあり えない、想定外で展開する ストーリーへの対応力が磨 かれることになる。そうして 生まれる物語の強さはある 意味、神話など口承文学な どプリミティブな物語の発 生過程を疑似体験するこ とだと私は生徒たちに語っ ている。意外性の無い話の 無意味さを自覚できると同 時に、文字化され時間的に **積算されることで具現化し** ていく物語の作品世界の 持つ不可逆性や構成力の 必要性など小説を書く際 のルールを体感できるので はないかと思っている。また、この沈黙の対話中に、唯一、私は「事件はどうなった? どんな風なものなの? 地球が滅亡する? その時、他の人は、日本社会はどうなってる?」とサジェスチョンを時々入れて、彼女たちのイマジネーションを喚起し続ける。このワークショップは1時間で終了して、次回の授業で紙原稿を配布した後で、それぞれキャラクターになりきりながら戯曲形式で発表してもらう(写真)。毎回、生徒たちは爆笑しながら鑑賞し大受けする。

同じく資料7の「物語バスケットボール」は5人

#### ■ 写真



#### ■ 資料7



4.今回の再読分析で気づいた点や、やってよかったと思った点を自由に挙げて下さい

以下のグループ形式で行うものである。 まず各人が人物の写った写直を家で 雑誌などから何枚か切り抜いて持って 来させる。それを教卓に提出させて集 めたものの中から1枚、自分が直感で 各自選ぶ。そして、各グループで机を 合わせて円になるように座らせる。そし て、各自が選んだ人物がいったい如何 なる人物なのか、年齢・趣味・家族・ 仕事・最近の悩み・学歴・過去の生 活体験(住まい・環境)についてキャラ クターを設定する。さらに、今、置か れている何か困った状況についても設 定する。時間は合計15分ほどで。次 に、合わせて合体したテーブル・グル ープごとに、こちらの合図に合わせて、 自分が書いた人物設定・状況を、どん どん右隣の人にパスしていく。パスされ た人はその紙の設定を読み、その困っ た状況の続きとしてふさわしい「混乱/ 危機/山場/解消」の該当項目を書い ていく。持ち時間は各7分前後。書き 方は説明的な描写文でも会話文でも 両者の混在でも構わない。とにかく、ち

ょうどバスケットボールでパスされたボールをま た他のプレーヤーにパスするように渡していくの である。

資料7の場合のように、生徒たちは意外に不幸な人間や大人を設定するのが上手く、またその設定も実に細かな人間観察があって、人生のほろ苦さやエスプリが利いたものが多い。そこでも、なぜ仕事が「自衛隊」で、学歴が「高校中退」なのか、そのイマジネーションの豊かさに毎回、舌を巻かざるを得ない場合が多く考えさせられる。これも実施すると、これほど短時間で、成長していく物語の面白さはもちろん、自分一人では

■ 資料8

要 輧 (= 創 45 9 1/5 益 見いいろる T-傾 理 60 稻 65 辑 颖 書きたちを 自分けの 稻 ab) 版 気付 は出来ならし La 1 38 T-0 调 気かっ 骐 61 J, 様 TEY (= 5,50 1/F 若 ろうとめべっ B 2 描 文 514 在

1 ·żn 再 読 3 何 意識 こけすす 読 もう 処が 7 6 ネア た 出 四維 d 3 旺 7 7 らだ 生門 17 文与 授 0 業 17 をうい 一つる 7 読 かん 中 t 3 該 7 こと た 無 ところ H = 15" 力 # 77 7 F L かっ た 物 Y 考えて 思いう t= 語 7 F E た 3 楽 この いか で、良い U 再 fi' ましてや文レ 談 1= 栈 7" 1) 17 1

考えもつかない他者の感性の違いの面白さや多様性を発見したと異口同音の感想を持つ。この場合も最後にグループごとに全体の場で感想を発表しあい、また授業記録シートにそれをまとめさせる。

#### 3. 「羅生門」再分析と、小説を書く 「意義」とは何か。

こうして幾つものエッセイを書かせたり、ワーク ショップを重ねたりする中で、生徒たちの国語科 的な意味での読解力は飛躍的に増加する。それ は「書くこと」は「考えること」であり、「考えること」とは常に複合的であり、矛盾した複線的な方向性を夢んでいるからだろうと思われる。前述した7つの観点も、実際にプロの小説家の文章を読むと、一つの文章に幾つもの多元的な観点評価できるものが多い。各単元の中やその合間の授業でもプロ作家の文章を観点評価し何十回と分析して見せているのだが、単元Dのように、生徒自身にそれをやってもらい提出させもしている。資料8はその一部で28年度の生徒たちのものである。他のアンケートに答えた箇所でも、どの生徒も1年前に授業でやった芥川の文章が主体的に読むと全く違うものに感じられることや、自らの読みの深さの変化を自覚している。

では、そもそも「小説」とは何なのだろうか。また「小説を書く意義」とは何だというのか。

この授業をする度に私は毎回、生徒たちに問い掛け、私自身も自問自答する。答えは毎年、微妙に変化し続けている。創作する側から行う最もシンプルな「小説」の定義は、焦点化された人物(主人公)を元に、読み手が人物の内面の変化と発見を追体験するものと仮に言えなくもない。であるならば、敢えてその小説を書く作業を高校授業の中で行う必要性は何か。今のところ、資料4の末尾に書いたことばが統一見解として、提示したものを補足してこういう趣旨のことを述べている。

小説創作とは、感性・知性・知識教養、さらには道徳観から果ては世界をどう捉えるかという世界観、それらを総動員して対応しなければ、一つの作品として一定のレベルには達し得ない。それは読書が全人格的な教養を養うとされているのに似た深さと広さを持っているのだ、と。

すなわち、よい小説を書こうとすれば、日々の 生活を、人生をより生きること、より深く生きるこ とに他ならない。そこで自らも含めて、人の痛み、 哀しみに触れつつ、発見したものをコトバにする。 コトバには、人の痛みとはズレがあって、どこま で行っても不完全なものだ。しかし、それ故にこ そ他者に共有される部分もあるのではないか、と。

また、当然ながら、その評価も難しい。究極、 提出点以外に与えられる優秀作と見なす加点で は採点者である私自身の感性が問われることに なる。一応、ここ数年の中でここまで書ければ優 秀だという基準はできているが、本当に優れた作 品ばかりになったときはその優劣の判断はつけ 難いと予想している。

# 4

#### おわりに

以上のように、『創作と鑑賞』の小説創作授業はまだ数年の実践でしかないが、従来の論理的な説明文を書かせる授業では表れない成果や効果が出ているのではないかと思っている。それは前述したように単に小説を書けばいいのではなく、自らの感性や言語感覚の先鋭化、社会的事象や世界をどう捉えるかという世界観の育成などさまざまなものが必要とされたからである。

そして、この平成27年度からはこの『創作と鑑賞』の授業での創作者から見た文章読解の方法を、自分の担当学年である3年次生の通常の現代文や古典の授業においても出来るだけ当てはめて、一般生徒たちにも取り組ませるように試みている。短歌創作の表現領域授業として実際にこれらの観点を利用したものも行っている。また、平成28年度においても自分の担当学年である1年次生において、同様の文章読解方法を一般科目である「国語総合」の読解授業において少しではあるが例示しレクチャーするなどをしている。前記した芥川の「羅生門」も試験用の読解作業とは別に、「今から言うことは決して試験には出

ないけれど、聴いてほしい。例えば、下人と老婆のことばには『ズレ』があるよね」とか、「もしこの下人の正義から悪への『変化』が無かったら、この小説はどうなる」とかいった形で分析してみせることで、「羅生門」に限らず、小説一般の読解方法としてもその観点を利用している。さらに宇治拾遺物語など古典作品においても同様の問い掛けを行っている。これらはまだ端緒についたばかりであるが、生徒たちの文学を通して「考える」ことの手助けには大いに効果があると私自身は感じている。

#### 参考文献

●『文章表現 四○○字からのレッスン』(梅田 卓夫著 ちくま学芸文庫 2001年2月7日刊 行)

# 生徒の活動を重視した数学 I 「データの分析」の授業実践





広島大学附属中・高等学校 教諭 はしもと み つぐ

橋本三嗣

1974年生まれ。2002年広島大学大学院教育学研究科教科教育科学(数学科教育)専攻博士課程後期単位修得退学。2002年広島県立尾道北高等学校勤務。2006年広島県立大和高等学校勤務。2008年より広島大学附属中・高等学校赴任。現在に至る。連絡は広島県広島市南区翠一丁目1-1の同校まで。

第65回 読売教育賞から

#### 【算数・数学教育】

教壇に立つ橋本三嗣教諭



て関わっていくのかが課題」と意 な生徒の活動を教員がどう支援し を簡単に超えた。今後は、主体的

欲に燃えている。

(山田絵里子)

年度から、高校の「数学―」にコ かを考えさせる。テーマを自ら設 を集め、どのような関係があるの な事柄について生徒自身がデータ を整理し説明する「データの分析 定することで、データの集め方や、 ンピューターなどを使ってデータ 点から考える工夫も生まれた。 仮説通りにいかない場合に別の視 学習指導要領の改定で2012

<u>\*</u> 戸院教諭 橋本 広島大学付属中·高 42 算数·数学教育

しかできないかなという私の予想

う習慣が身につく良い実践例だ 計)を使って科学的推論や分析を行 察をさせている。自発的に数学(統 から、相関予想や検証など発展的考 ケートという生徒が関心のある題材 秋山仁・東京理科大学教授「アン

# 主体的にデータ分析

タインデーにもらったチョコの数

- 1日のメールの件数とバレン

って関係あったりして」「握力と

体重に相関はある?」-

あり、手応えを感じている。 いうことだったのか」「何となく らは「式で計算していたのはこう 分析結果になったという。生徒か ープごとに発表させている。 授業に取り入れ、4、5人のグル が加えられた。 試行的に10年から 具体的に分かった」という反応が 関係があると思っていたことが、 力と体重には、関係があるという メールの件数とチョコの数、握 「生徒は考えを深め、ここまで

#### 【最優秀賞選評】

秋山 仁 東京理科大学教授

「アンケートという生徒が関心のある 題材から、相関予想や検証など発展 的考察をさせている。自発的に数学 (統計)を使って科学的推論や分析 を行う習慣が身につく良い実践例だ」

#### 1 はじめに

現行の高等学校学習指導要領で新しく、数学 Iで「データの分析」を扱うことになった。ここでは、小学校算数、中学校数学における「資料」を「データ」に広げ、1つの変量の散らばりとしては、範囲と四分位範囲、分散と標準偏差を扱い、2つの変量の関係としては、相関を扱う。特にデータの相関は、2つの変量の線形的な関係を知るという重要な意味をもつ。

この新しい単元の指導に向けて、2010年より 試行的な指導として、データの散らばり、データ の相関を扱う授業展開を構想した。さまざまな情 報の中から、数値情報をうまく取り出したり、あ るいは数値化したりして、それらを整理すること、 そして発表することなど、生徒の活動を中心にし ながら統計的な見方や考え方の素地を身につけ させるように工夫して授業を実施した。その際に、 それぞれの活動の目的が明確化されているの か、生徒にとって達成感のあるものであるのか、 次の学習への意欲につながるものなのかなどに 留意した。

2012年から、全国的に「データの分析」の指導が行われるようになり、教科書や指導書に指導内容が示され、学会や研究会等で様々な実践報告がなされるようになった。そこでは、限られた授業時数の中で指導するために、どのような内容で、どのような活動をすればよいのかということが中心に議論されている。

本稿は、2010年より継続的に行っている「データの分析」の授業実践の中から、データの相関の内容を中心に、工夫したこと、生徒の反応等について報告する。

## 2 授業実践1(2010年)

#### 1. 授業の内容

2010年10~11月に高校1年生(43名)に 指導した。内容は次の通りである。

#### (1) データの散らばり ......6時間

第1時 資料(図表)の読み取り

第2時 度数分布表とヒストグラム

第3時 ヒストグラムの形状と意味

第4時 代表值(平均值、中央值、最頻值)

第5時 範囲と四分位範囲、箱ひげ図の形 状と意味

第6時 分散と標準偏差

#### (2)データの相関………5時間

第7時 散布図と相関係数

第9時 アンケート調査結果の発表①

第10時 アンケート調査結果の発表②

第11時 アンケート調査結果の発表・総括

#### 2. 授業の形態

クラス43名を1~10の班に分け、話しあいなどの活動をさせるときに班を活用した。第2時から第6時までは生徒一人ひとりにグラフ関数電卓を貸与し、第7時から第11時までは班に1台のノートパソコンを貸与して使用させた。グラフ関数電卓やノートパソコンの機能の説明は、必要最低限にし、生徒同士で教えあえる環境にした。

#### 3. 相関の指導

第7時にグラフ(散布図)と数値(相関係数)の 両面から相関を判断する方法を指導した。2つ のデータの相関の把握に、散布図を用いての視 覚的理解と相関係数の値をみる数量的理解を 行うことをねらいとした。 具体的には、クラス43 名の身長と靴のサイズを調べて、データを平面 上の点として表して散布図をつくり、正の相関が あることを確認させた。その後に、相関の度合い を数値で表す方法として、共分散を標準偏差の 積で割る相関係数を指導した。相関係数と散布 図については、一般に次のことがいえる。

- 相関係数が1に近いとき、強い正の相関があ る。このとき散布図の点は、右上がりの直線 に沿って分布する傾向が強くなる。
- 相関係数が-1に近いとき、強い負の相関が ある。このとき散布図の点は、右下がりの直 線に沿って分布する傾向が強くなる。
- 相関係数がOに近いとき、相関は弱い。

#### (相関係数の読み方の目安)

|r| ≤0.2 ほとんど相関がない

0.2<|r| ≤0.4 やや相関がある

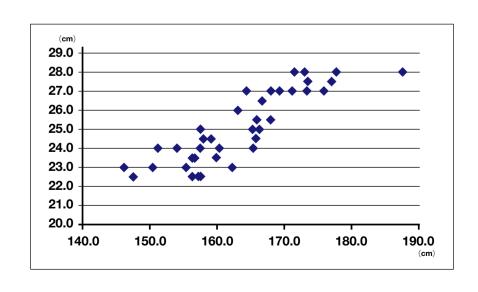
0.4< r ≤ 0.7 かなり相関がある

0.7<|r| 高い相関がある

(景山、2007、P89)

計算で求めた相関係数の値(r)をどう解釈す るかは難しく、どの程度の値で相関があるかは一 概にはいえないが、一応の目安がある(景山、 2007、p.89)。これを授業で提示して利用し、 無相関検定については扱わなかった。

その後、コンピュータ(エクセル)を用いて相関 係数を求め、散布図をかいた。エクセルの分析 ツールは用いず、偏差平方、偏差積の値を求 め、そして相関係数を計算した。次のグラフは散 布図、表は、相関係数を求める手順である。(身 長と靴のサイズのデータ)



	<u> </u>	y: 靴のサ	ο /= ±	σ./= ±	×の偏差	vの偏差	×とvの偏
	x:身長cm	イズcm	×の偏差	yの偏差	平方	平方	差積
1	163.1	26.0	-0.5	0.9	0.272433	0.728733	-0.44557
2	169.4	27.0	5.8	1.9	33.38585	3.43605	10.71053
3	165.2	25.0	1.6	-0.1	2.490238	0.021416	-0.23093
4	187.5	28.0	23.9	2.9	570.1612	8.143367	68.1398
5	177.7	28.0	14.1	2.9	198.1915	8.143367	40.17394
8	173.4	27.5	9.8	2.4	95.61024	5.539709	23.01419
9	177.1	27.5	13.5	2.4	181.6578	5.539709	31.72272
10	169.2	27.0	5.6	1.9	31.11463	3.43605	10.3398
11	173.3	27.0	9.7	1.9	93.66463	3.43605	17.9398
12	165.9	25.5	2.3	0.4	5.189506	0.125074	0.805651
13	166.3	25.0	2.7	-0.1	7.171945	0.021416	-0.39191
14	164.4	27.0	0.8	1.9	0.60536	3.43605	1.442237
15	171.5	28.0	7.9	2.9	62.06365	8.143367	22.48126
16	168.0	27.0	4.4	1.9	19.16731	3.43605	8.115407
17	168.0	27.0	4.4	1.9	19.16731	3.43605	8.115407
18	167.9	25.5	4.3	0.4	18.3017	0.125074	1.512968
19	171.1	27.0	7.5	1.9	55.92121	3.43605	13.86175
20	166.7	26.5	3.1	1.4	9.474384	1.832391	4.166627
21	175.9	27.0	12.3	1.9	150.7505	3.43605	22.75931
22	173.0	28.0	9.4	2.9	87.9478	8.143367	26.76175
23	157.2	22.5	-6.4	-2.6	41.24146	7.003123	16.99468
24	157.4	24.0	-6.2	-1.1	38.71268	1.314099	7.132481
25	156.3	23.5	-7.3	-1.6	53.61097	2.71044	12.05443
26	157.6	25.0	-6.0	-0.1	36.2639	0.021416	0.881261
27	151.2	24.0	-12.4	-1.1	154.3049	1.314099	14.2398
28	154.0	24.0	-9.6	-1.1	92.58195	1.314099	11.03004
29	150.4	23.0	-13.2	-2.1	174.82	4.606782	28.37882
30	162.2	23.0	-1.4	-2.1	2.021945	4.606782	3.051993
31	156.3	22.5	-7.3	-2.6	53.61097	7.003123	19.37638
32	165.8	24.5	2.2	-0.6	4.743896	0.417757	-1.40776
33	160.2	24.0	-3.4	-1.1	11.70975	1.314099	3.922725
34	146.1	23.0	-17.5	-2.1	307.0188	4.606782	37.60809
35	157.9	24.5	-5.7	-0.6	32.74073	0.417757	3.698334
36	156.7	23.5	-6.9	-1.6	47.91341	2.71044	11.3959
37	157.6	22.5	-6.0	-2.6	36.2639	7.003123	15.93614
38	159.1	24.5	-4.5	-0.6	20.44804	0.417757	2.922725
39	159.9	23.5	-3.7	-1.6	13.85292	2.71044	6.127603
40	147.5	22.5	-16.1	-2.6	259.9173	7.003123	42.66419
41	165.4	24.0	1.8	-1.1	3.161457	1.314099	-2.03825
42	159.7	23.5	-3.9	-1.6	15.3817	2.71044	6.456871
43	155.4	23.0	-8.2	-2.1	67.60048	4.606782	17.64711
平均	163.6	25.1	0.0	0.0	75.9	3.4	13.9
					×の分散	yの分散	×とyの共分散

第8時に『「I年4組生徒の生活実態」につい てアンケート調査で収集したデータの中から、相 関があるものを見つけ、なぜそのような関係があ るのか考えよう』という課題を設定し、クラス内で のデータ収集を行った。データ収集の際には、 どの班が何のデータを必要としているのかを黒 板に書き、付箋を利用して収集した。個人が特 定されないこと、聞かれたくないと思う項目は避 けることなどを注意し、明確な時間設定をして活 動を行った。

×の標準偏差 8.709722972 yの標準偏差 1.842069033 r 0.86510792

#### (データを収集して入力する様子)



第9時の授業の実際は次の通りである。

学習内容	指導過程•学習活動	指導上の留意点・評価
(導 入) ●課題の確認	○前時の課題を確認する。  課題:「I年4組生徒の生活実態」ついて、アンケート調査で収集したデータの中から、相関があるものを見つけ、なぜそのような関係があるのか考えよう。	●3~5人程度のグループ で、作業する。
(展 開)  ●発表にあたっての確認	<ul><li>○発表する際の留意点を確認する。</li><li>① 作成した表やグラフなどを表示すること。</li><li>② 説明には基本的な統計量を入れること。</li><li>③ 説明には自分たちの主張も入れること。</li><li>④ これまでの作業の感想も入れてもよい。</li></ul>	
●発表の準備	<ul><li>グループごとに前時に整理したことがらを振り返り、発表できるように準備する。</li></ul>	
•発表	○各グループが集めてきたいろいろなデータの相関について、整理したことがらを発表する。	<ul><li>表やグラフを有効に使用できるか。(数学的な技能)</li><li>根拠に基づいて筋道を立てて説明できるか。(数学的な技能)</li></ul>
●質疑応答	<ul><li>○発表に対して、質問や意見・感想を述べる。</li><li>●発表したグループの生徒は、出された質問や意見・感想に対して、グループの考えを述べる。</li></ul>	● 1 グループごとに発表→ 質疑応答→考察→評価 の順に進める。
●考察	○質問や意見・感想をもとに、さらに考えさせたい部分を整理し、クラス全体で共有するとともに考察する。	
●評価	• 発表の内容について、個々の評価と気づきを述べる。	
(まとめ) •本時のまとめ	○本時の発表を振り返り、統計や数学の内容が社会において活用できること、その際にデータに振り回されずに判断したり、伝えることの意義や重要性を確認する。	
備考 準備物:コンピュ	ータ(10台)	

#### 4. 指導を振り返って

生徒はユニークなテーマで課題に取り組んだ。 「サンタがいないと気付いた年齢と一人で寝られ るようになった時期」というテーマで取り組んだ 班は、サンタの存在を信じている人ほど、一人で 寝られるようになるのは遅いであろうという仮説 を立て、データの収集・分析を行った。現在も サンタはいると思っていると回答した1名を外れ 値として処理したことが生徒間で議論になった。

「握力と体重」の相関に興味を持った班は、そ のデータを男女別に分析し、男子は高い相関が あるのに対して、女子はほとんど相関がないこと を指摘した。その理由を高校1年生段階の男女 の握力の違いが利き腕の太さにあるのではない かと予想し、それから握力と利き腕の太さとの関 係を調べようと、利き腕の太さを巻尺で測定して それらの関連について考察しようという話が出 た。生徒が作成した発表用スライドの一部を次 に示す。

# 体力測定の相関係数

```
靴のサイズcm
          0.865108
息長cm
体重kg
          0.59657 0.645857
          0.783656 0.880796 0.660758
握力kg
          0.823571 0.793221 0.751063 0.835412
上体記[1.回 0.614608 0.462237 0.19703 0.41279 0.553744
長座体前屈cm -0.11331 0.01615 0.095843 0.184952 0.078395 -0.09749
反復横とび点 0.627879 0.520414 0.44084 0.550196 0.596063 0.508547 -0.15044
20mシャトルラン回 0.709979 0.567809 0.163834 0.557442 0.608975 0.772166 -0.08018 0.451245
50m走秒
            -0.7878 -0.7009 -0.31624 -0.69479 -0.73752 -0.71557 0.106772 -0.47341 -0.88899
立ち幅とびcm 0.79291 0.728085 0.405601 0.734423 0.82108 0.623812 -0.01778 0.536453 0.785425 -0.87022
ボール投げ 0.762391 0.704758 0.533365 0.700994 0.814789 0.653637 0.056617 0.58476 0.788663 -0.81461 0.776677
```

# 基本的な統計量・相関係数

平均 X(握力kg)=33.5 Y(**体重**kg)=55.3

男子平均 X=41.66667 Y=59.8

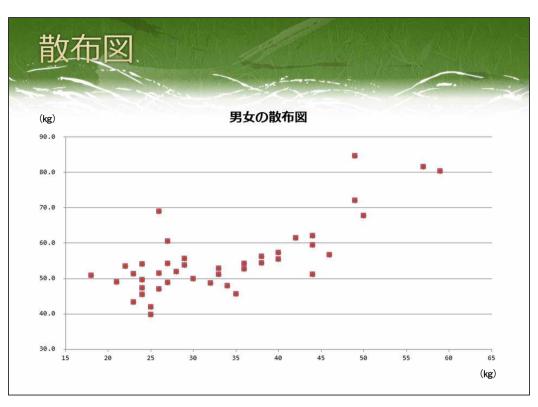
女子平均 X=25.33333 Y=50.8

分散 Sx<sup>2</sup>=99.5 Sy<sup>2</sup>=102.2

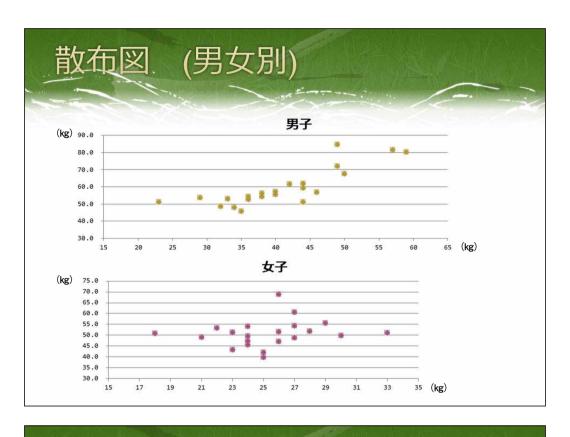
標準偏差 Sx=9.97 Sy=10.11

共分散 Sxy=75.7

相関係数 r=0.75



男女別の相関	関係数		
男子	握力kg	体重kg	
握力kg	1	*	
体重kg	0.862053	1	
女子	握力kg	体重kg	
握力kg	•		
体重kg	0.191007	1	



# 察・主張

- 体重が大きくなればなるほど握力は大 きくなる。体重が大きければ基本的に脂 肪より筋肉の方が重いから筋力のある<mark>体</mark> 重は多くなるだろう。
- 男女別にすると相関関数は男子は相関 関係にあり、女子は相関関係になかった。 これは男性ホルモンと女性ホルモンの特 徴の違いから生まれるものである。

これは体力測定の結果から、相関があるものを探し、男女に分けて分析したものであったが、発表を聞いた生徒からは、意外な結果だとの反応も出た。考察・主張にある男性ホルモンと女性ホルモンの特徴の違いとは何かという質問から、利き腕の太さを測定しようという話が出て、第10時に巻尺で利き腕の太さを測定する活動へと発展した(表1~3)。体重と握力の相関については、本や論文でも報告されている。また「科学の道具箱」に公開されている体力測定のデータからは、女子は体重と握力にやや相関があるという結果が出ている。

#### ■ 表1.男女(n=42)

男女	体重kg	握力kg	腕周りcm
体重kg	1		
握力kg	0.751063	1	
腕周りcm	0.831725	0.826552	1

#### ■ 表2. 男子のみ(n=21)

男子	体重kg	握力kg	腕周りcm
体重kg	1		
握力kg	0.862053	1	
腕周りcm	0.824192	0.845202	1

#### ■ 表3. 女子のみ(n=21)

女子	体重kg	握力kg	腕周りcm
体重kg	1		
握力kg	0.191007	1	
腕周りcm	0.760223	0.056323	1

握力は利き腕の太さに関係するであろうと予想してデータを取った結果、利き腕の太さは体重との相関があることがわかった。しかし男性ホルモンと女性ホルモンの特徴の違いかどうかはまだわからないという話になった。授業を終えて、散布図の縦軸と横軸に何をとるかなどの散布図に関する指導を行わなかったこと、事実と推測を分けて発表させなかったことが反省点である。また、「科学の道具箱」に公開されている体力測定

のデータなどと比べるという活動を行えば、この 結果が集団に固有な傾向か否かという考察にも 発展できたであろう。

授業後の生徒の感想の中には、データを収集 することの難しさを指摘したものが多かった。相 関係数を計算した後で、仮説が誤りなのか、そ れともデータの収集に問題があったのかで悩ん だようである。

第8時~11時の授業を振り返ると次のようなことがいえる。

- ●生徒発表をどのようにまとめ、データの外れ値、相関と因果関係などに関してどこまで扱うべきかが難しい。
- 生活実態の調査から相関があるものを見つけるよりも、日頃の問題意識から相関がありそうなものの中からデータを収集する方が自然である。
- ●連続量と連続量のときの相関と、連続量と離 散量のときの相関では意味が異なることを教 師がコメントすべきであった。
- プレゼンの際には、データの数を明記するよう に指導すべきであった。
- 高校1年生で相関を扱う際に、グラフ(散布図)と数値(相関係数)の両面から相関を判断することが重要である。
- 教師が知らない事柄に出会った場合には生徒 と一緒に考えるという姿勢が必要である。

授業を終えて、生徒の活動を中心に「データの 分析」の指導をする際には、教師の役割が重要 となることを実感した。教師が生徒の反応をある 程度予想し、生徒の発言に対して、「もっとたくさ んデータを取れば違ったものが出るかもしれない ね」などの統計的な考え方のヒントとなるような 適切なコメントをすることで、生徒はさらに探究心 をもって取り組んだであろう。また授業の最後に、「今日のこのデータで十分であっただろうか」など問うことで、使っているデータの客観性についても生徒に意識させることも大切だと感じた。

# 3

## 授業実践2 (2013年~2015年)

#### 1. 授業の概要

2013年~2015年の2月に高校1年生を対象にして、相関を指導した後の3時間で課題学習を実施した。授業実践1の振り返りをもとに授業を設計した。課題は授業実践1の高校生の生活実態から日ごろの問題意識に広げた。クラスを1~10の班に分けてグループ活動を行った。特に時間設定に留意して、生徒に活動を終了する時間を提示した。

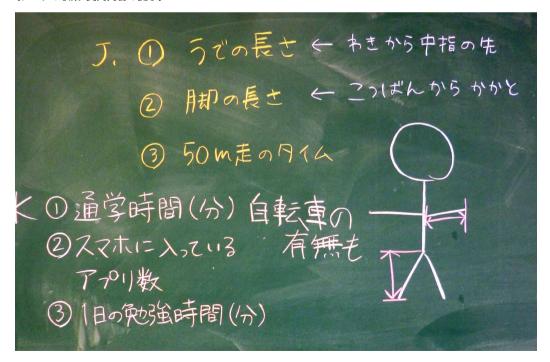
#### ① 第1時 課題の把握・データの収集

課題を「相関があると思われる2つの事柄に 着目してデータを収集し、それを分析して相関が あるかどうかを調べよう」とした。データの収集方 法として、クラスの生徒に調査するか、インター ネットからダウンロードするかはグループごとに 選択させた。

#### (データの収集:測定する様子)



#### (データの収集:質問内容の提示)



#### ② 第2時 発表資料の作成

発表資料の作成に向けて、活動に入る前に次 の3点を確認した。

#### ●何のデータに着目したのですか?

仮説とデータの収集方法を示しましょう。データの出典やデータの数を必ず明記してください。

#### ●結果を示してください。

散布図と相関係数を用いて示しましょう。必要があれば、層別に分けて分析 を行ってください。

#### ● 結果から何がいえるのですか?

結果から推測できることを書いてください。またその推測を検証するには、どのようなデータが必要かを示しましょう。

#### (データの収集:整理する様子)



発表は、パソコンを用いて行うことにした。パソコンの操作に慣れない生徒は、班の中で協力 して進めた。限られた時間の中で、伝えたいこと が表現できるように指導した。

#### (発表の準備をする様子)



2013年の各班の発表タイトルは次の通りである。

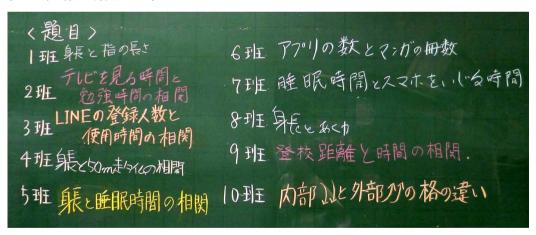
- 1班「反抗期の年齢と兄弟の数」
- 2班「1日のメールの件数とバレンタインに貰ったチョコの数」
- 3班「睡眠時間とか登校時間とか」
- 4班「名前の画数と睡眠時間の相関」
- 5班「スマートフォンに入っているアプリの数とリビングにいる時間」
- 6班「ゲームのカセットの数と視力の 相関」
- 7班「通学時間と初めての一人電車」
- 8班「人口密度と小学校数」
- 9班「ホームランと打点の相関」
- 10班「Pencil Boxのペンの本数とWa Iletのポイントカードの枚数の相 関」

2014年、2015年の各班の発表のタイトルも 2013年と似たものになった。

#### (2014年の各班の発表タイトル)

到王 であるは果たして目が良いのか? 2・足の大きさと身長 3部活時間と免疫時間 4服の枚数と厚う 6 智語の個数と年数 6 単語力と運動量の相関 7 反復横跳と質えけずりの才能 8 通学時間とおいるかについて 9 手の長さと足の長さ 10 スマホのアチリ数と独動時間

#### (2015年の各班の発表タイトル)



生徒の発想力は素晴らしいと感じた。各班とも 重複なくテーマ設定を行えた。

#### ③第3時 発表と相互評価

ワークシート(評価シート、振り返りシート)を 配り、発表をきいて、相関がある事柄について、 散布図や相関係数等の数学的表現を用いて、わかりやすく説明することができているか、改善すべき点は何かを評価シートに記入させた。また授業後に、発表資料を作成する過程と発表について、よかった点と、よくなかった点について振り返りシートに記入させた。

#### (評価シートへの記入)

評価シート 発表をさいて、相関がある事柄について、散布図や相関係数等の数学的表現を用いて、わかりやすく説明す とができているか、改善すべき点は何かを評価しましょう。	
	3カデータをとっているのど大変だっただろうと思いましたの
2111	それもたけならまがあるというのけかけの世界差とかあれたなって
	Birto
	れたちが気けらないることを調が2015の2"ととも男味深かた
3班	どもやっぱいう想に正確いなる!!
. Y #1 - 1 .	この27を関わらせて調がようと思ったのがすがいと思いました!!
4=1I	画義がありこつかよがたまろっていう楽想がすぎかってい

#### (振り返りシートへの記入)

#### 振り返りシート

発表資料を作成する過程と,発表についてよかった点と,よくなかった点について具体例を挙げて説明しよう。

統計の授業で一番おもしろか、たのは、デー9案のです。みんなの私生活から国見れた気がりで。また、デ・9案めのときは、個人のデータにかしている。 おおながりたで、数布図を作ったり、相関係数を出ったりして、クラス全体の傾向を知ることができて、選れたもしろこと感じするに、

松連が近にろってとがらの相関を調べてよめ、たなと思っています。もとも相関しありそうなろうを選んでデータをとってみたってですが、意外と相関がないものがあることもかかったし、ろっとじじべたことでそれをれの関係性が見えた気がします。

な連って、9は全て連続したものだったのも良いた点だと思いす。 結果から、「睡眠時間」を起床時間」に変い続計をとうと、さらに相関係数 が大さくなりとうな気がしました。

#### 2. 生徒の発言やつぶやき

机間指導で生徒の発言やつぶやきを授業者が拾い、適時クラスで共有するようにした。クラスで共有した生徒の発言やつぶやきは次の通りである。

- 散布図が右上がりになるようなデータを 集めたらうまくいくと思う。(第1時)
- 散らばりが大きくなりそうなものを考えた 方がよいと思う。(第1時)
- 散布図から2つの集団に分けられそう。 (第2時)
- あの推測は納得がいかない。もっと他の 可能性もあるでしょう。(第3時)

記録した映像をみると、グループ活動の中で、

生徒が自分の考えを説明し、それに対する意見が出て、修正したり変更したりする班もあれば、一人がリーダーシップを発揮して役割分担を行い、進める班もあった。普段の数学の授業では発言しない生徒が、グループの中で積極的に議論している姿が見られた。数学の得意、不得意によらず活動を進めることができた。発表の準備をする中で、「そこまで言い切って大丈夫?」、「この数値は異常なのかな」などの発言から、話し合いが進むグループもいくつかあった。

#### 3. 生徒は活動の意義をどう感じたか

振り返りシートにはいろいろなコメントがあった。 生徒の記述を一部引用する。

- 予想通りの結果が出ても、数値からどれ ぐらい関係が深いのかを考えることがで きて楽しかった。他にも関係ありそうなこ とがらについて調べてみたい。
- 予想と違う結果が出て、どう説明したらよいかを考えるのが大変だった。 データを 集めることや、結果から理由を考えること は難しいと思った。
- データを分析する中で、質問をもっと工 夫したらよかったと後悔した。欲しいデー タが手に入らなくて残念だった。
- 授業で散布図や相関係数を勉強したときは、正直面倒だと思ったが、パソコンを使ったら結構楽にできることがわかった。 結果から何がいえるのか、を考えるところが楽しかった。他の班が推測したことにソッコミを入れるのはもっと楽しかった。

授業の終了後に数人を呼んでインタビューを 行った。そこでは、次のような感想が出た。

- 仮説を検証しようというのは数学ではない感じがした。
- ●表や数値を示すと説得力が増す。
- ●限られた時間の中で、考えを発表するのは難しいと思った。
- 2つの項目間の相関を調べたが、2つに 強力に関連する何かがあるような気がする。
- ●今回は2つか3つのデータを集めたけれ ど、たくさんデータを集めてくれば、偶然 でも相関があるものがありそうだ。偶然か そうでないかを見分ける方法が気になっ た。
- 散布図の縦の伸縮で、相関があるようにも、ないようにもみせることができることに気がついた。図に騙されないようにするためにも数値から判断できるようになることが大切だと思った。

インタビューにおける生徒の感想から、確率を 利用した統計的判断の必要性に気づいた生徒 がいることに驚いた。統計的な判断における確率 の必要性は、活動を通して引き出すことができる ようである。記述統計から推測統計への橋渡し ができる活動であるといえる。

残念なことに、「またやりたい」という言葉は生徒から出てこなかったが、「楽しかった」という反応はたくさんあった。生徒たちは、この活動に価値を見出してくれたのではないかと考えている。

# **4** おわりに

継続的に指導を行うことで、事前の準備の手順や活動にかける時間の管理、話し合いを活発にさせる発間などの方法をある程度確立するこ

とができた。また授業実践を通して、次のことが 明らかになった。

- 実際にデータを収集することで、調べたい事柄に関するデータを集めることの難しさを実感させることができる。
- 予想と違う結果が出たときには、データの収集の方法に問題があったのではないかと考える生徒もいる。→データの観察に戻る
- ●活動を通して本質に迫る議論や思考の深 化につながる授業には、授業者がいかに 介入するかが鍵となる。

目的に応じてデータを収集するという活動を 授業に取り入れることで、授業者の予想を超える 創発が起こる場面に出会うことができた。それを 偶然に任せるのではなく、授業者の発問などの 働きかけにより引き出す方法を検討することが今 後の課題である。今後さらに工夫して授業実践 を行いたい。

#### 参考文献

- 文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領 解説 数学編』教育出版
- 景山三平(2007)「第6章 記述と推測の話」
   『教員のための数学Ⅱ 解析・統計・コンピューター』培風館 pp.80-113
- 竹村彰道(2013)「統計的な考え方と結果の 見方」数学セミナー vol.52 No.10 日本 評論社 pp.8-12
- 科学の道具箱(平成28年にシステム停止)
   (http://rikanet2.jst.go.jp/contents/cp0530/start.html)

# 化石の魅力を多くの 子供達に伝える

ー「教室で化石採集」の教材化とハチオウジゾウ発見物語 ー





慶應義塾幼稚舎 教諭

ぁぃ ば ひろぁき 相場博明

1958年生まれ。1983年東京学芸大学大学院教育学研究科理科教育専攻修了。2007年教育学博士。 1983年東京都八王子市立元八王子中学校勤務。1989年慶應義塾幼稚舎赴任。現在に至る。2009 年~2011年慶應義塾大学教職課程センター非常勤講師。2009年~2012年常磐大学人間科学部非 常勤講師。2010年~現在、玉川大学教育学部非常勤講師。2012年~現在、千葉大学教育学部非 常勤講師。連絡は東京都渋谷区恵比寿2-35-1の慶應義塾幼稚舎まで。

#### 【理科教育】

る相場教諭 (中央) 化石の魅力について語



に発掘に成功した児童は、図鑑と剣なまなざしで作業に没頭。見事と語りかけると、子どもたちは真

の種だよ」 「おお!これはすごい。ミズメ 「先生、これ何ですか?」

慶応義塾幼稚舎(東京都渋谷区) 慶応義塾幼稚舎(東京都渋谷区) を語りかけると、子どもたちは真 化石採集に挑戦。トンカチとドラ イバーを手に石を砕いていった。 イバーを手に石を砕いていった。 に石を発見した子がいたんだよ」 と語りかけると、子どもたちは真 と語りかけると、子どもたちは真

やすい「木の葉石」を取り寄せてそこで思いついたのが、化石が出

教室で行う採集だ。赴任後、続け

集などの「自然巡り」ができた。

目然豊かな土地を生かして化石採

同校に赴任する前の学校では、

だが、都会ではそうもいかない。

# 室内で「化」

理科教育 慶応義塾幼稚舎 相場博明教諭 58

する学校は全国で増えていった。

てきた活動は20年を数え、参考に

自身も研究者として新種のゾウ自身も研究者として新種の光見などで功績を残す相場に込めている。
に込めている。
に込めている。
に込めている。
(上田惇史)
に込めている。
(上田惇史)
に込めている。
(上田惇史)
に込めている。
(上田惇史)
に込めている。
(上田惇史)

そうな表情を浮かべていた。見比べながら種類を特定し、満足

#### 【最優秀賞選評】

育的な意味を持ち、評価に値する

#### 滝川 洋二 東海大学特任教授

「教室で化石採集ができる教材化を 行い、初心者でも実践できるガイドブックなどを作成し、科学の楽しさを伝 える前線を広げたことは、高い教育的 な意味を持ち、評価に値する」

# はじめに

私が生まれ育ったのは、栃木県足尾町(現在は日光市)である。足尾はかつて銅山では東洋一と言われたほど栄えた町であり、鉱毒事件、田中正造の話などでも有名な地である。私の叔父は、鉱山の中で鉱石を採掘する仕事をしていた。そして、採掘しているときに取れた水晶や黄鉄鉱、黄銅鉱などの美しい鉱物をおもちゃ代わりに私に与えてくれた。その影響もあり、私は鉱物や化石が大好きになった。

東京の大学に進学し、自分は化石を研究する 教授の研究室に入った。青春時代は古生物学と いう学問に夢中になった。気がつけば、奨学金 とアルバイト代のほとんどを化石の調査発掘費 用に費やし、大学院にまで進学していた。

大学が教育学部であったこともあり、大学院修了後は、東京都の公立中学校の教諭になった。最初に勤務したのは、東京都でも自然が豊かに残されている八王子市の中学校であった。近くに北浅川が流れており、そこでは、コハクや植物化石が採集できた。さっそく生徒と保護者達を連れていった。生徒と保護者達は時間を忘れるほど夢中で化石を採集した。採集した化石は理科の授業で教材として活用した。

6年を経て、現在の学校に転勤することになった。ここは都会にある学校で、近くには化石を探せる場所はなかった。自分の専門性を生かした化石の授業を何とかできないだろうか。そして、できれば子供達に化石採集をさせ、その楽しさを経験させたい。最初はあきらめかけていた化石採集の授業であったが、化石は何も野外に出かけて採集するのではなく「教室で化石採集」する方法もあるのではないかと考えた。そのきっかけとなったのが、「塩原木の葉石」である。この石は

栃木県にある小さな自然史博物館である「木の 葉化石園」の敷地から採集できる化石を含む原 石のことで、教育機関限定で安価で頒布してく れていた。さっそく、この原石を取り寄せて、教 室内で児童一人一人が化石を取り出す授業を 試みた。どの児童も初めての化石採集に夢中に なった。どんな化石が現れるかわからない。もし かしたら、まだ誰も発見していない新種の化石か もしれない。化石の持つ魅力と楽しさを体験させ ながら第6学年理科の単元である「大地のつく り」の授業を効果的に指導することができた。

この実習方法を思いついたのは、もう20年以上も前である。本校では毎年この実習を続けており、児童にとって理科の授業の中では一番人気の授業となっている。

この実習をぜひ、多くの教員にも知ってもらおうと思い、「塩原木の葉石」を取り入れた実習方法を開発した。そして、学会発表および公立学校や私立学校などの教員研修会などで公表し、また論文や書籍などでも公表した<sup>1)2)3)</sup>。その結果、20年前にはほとんど知られていなかったこの実習を、現在多くの学校や博物館などが取り入れるようになってきた。木の葉化石園の話では、現在は1000校以上の学校がこの実習を行うようになり、その数は毎年増加しているとのことである。

なお、私は小学校という職場にいながら、化石の専門的な研究もこつこつと続けてきた。そして、2001年に運良く、ステゴドンという古代ゾウの化石を発見することができた。発見した場所は私が教員生活をスタートさせ、子供達を化石採集によく連れて行っていた八王子の北浅川である。これも不思議な巡り合わせである。古代ゾウの化石は2本の完全な切歯と6本の臼歯、大腿骨などの骨格数十点からなり、発見当時は新聞、テレビなどで大きく報道された。そして、その後この化石の古生物学的研究を行い、発見から9

年もかかってしまったが、イギリスの学会誌に新 種として報告することができた。そして、和名は ハチオウジゾウとした。国内での新種のゾウの発 見は半世紀ぶりであり、再度マスコミに報道され

ゾウのような大型哺乳類化石の発見はだれも ができるものでない。確率的には宝くじで数億円 当たるよりも低いだろう。また、発見者がそのま ま研究者として新種として記載できることも稀で ある。この幸運に恵まれた私は、この話をできる だけ多くの子供達に伝えるようにした。そして、 校内にその展示スペースを作り展示した。また発 見地の八王子市では、コニカミノルタサイエンス ドーム (八王子市こども科学館) に展示された。 講師を依頼された教員研修会や博物館のイベン トなど、また非常勤講師を務める大学の授業など でもこの話をした。さらに、化石の一般啓蒙書4) で紹介し、八王子市の自然史を扱う書籍50の中 でも紹介し、ハチオウジゾウの発見の話を広く世 間に伝えるように努力した。

教員となり、36年が過ぎたが、自分の専門で ある化石の魅力を少しでも多くの子供達(大人も 含めて) に伝えたいと思い、開発してきた「教室 で化石採集」の教材化とその実践、そして新種 の古代ゾウのハチオウジゾウの発見物語、この2 つの内容は、私が教員となりずっと続けてきた教 育実践である。以下、その内容について具体的 に説明する。

# 「教室で化石採集」の 教材化とその実践

#### 1 塩原木の葉石とは

「塩原木の葉石」は、栃木県那須塩原市から 産出する岩石で、第四紀更新世中期のもので約

#### ■ 図1 教室内で夢中で化石を採集する児童



30万年前のものとされている。明治時代から知 られている日本の代表的な化石産地であり、多く の研究者により研究されている。多くの植物化石 を始め動物や昆虫化石も報告されている。この 岩石は、湖成堆積物で細かい葉理でできてい る。化石はその葉理に沿って含まれており、児 童の手でも簡単に割って取り出すことができる (図1)。しかも、たいへん保存が良く、あまりに 保存が良いので絵に書いたものではないかと疑 われることもあるという。化石の出る確率は、植 物化石なら7~8割である。

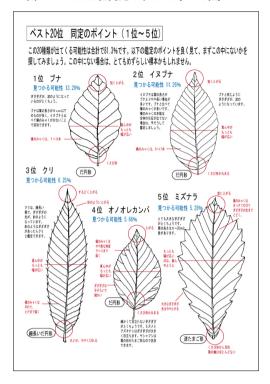
化石原石は地下140mほどまで広がってお り、掘り尽くす心配はなく、木の葉化石園では今 後もずっと教育機関には提供してくれるという。

#### 2. 開発した教材

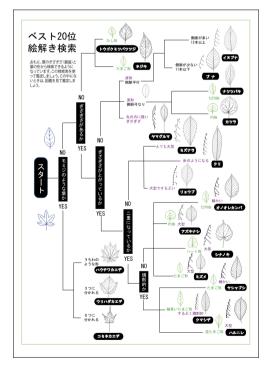
化石を自分の手で取り出すだけでも魅力的な 教材だが、化石の種類を同定し、その結果から どんなことがわかるかという授業を行えば、より 化石の魅力を伝えることができる。そこで、最初 に開発した教材は、化石を同定するための便利 な方法として、産出頻度の高い上位20位に着目 する方法である。これは、尾上(1989)<sup>6)</sup>が1万 点以上の化石を調査した結果を参考にしたもの で、産出頻度上位20位までに着目すれば、約 8割の可能性で同定できることになる。そのため に、上位20位に着目した化石の特徴をまとめた 資料を作成した(図2)。また、さらにそれらの絵 解き検索も開発した(図3)。それらを使うことで、 児童自身にも化石を同定させることが可能にな った。さらに、それに付け加えてカラーの化石図 鑑を手作りした。木の葉化石園に許可をいただ き、木の葉化石園に保管してある化石の写真を 撮影し、それを図鑑としてまとめた(図4)。図鑑 は一人ずつ、ファイルにして同定の時に利用でき るようにした。それらを使うことで児童の同定力 が一段と上昇した(図5)。

化石が同定できたら、クラスあるいは学年で同 定された化石をすべてまとめて、これらの植物は 現在のどのようなところに分布しているのかを比 べさせた。そして、30万年前のときと、現在とが あまり変わりがないという結論から、当時の気候 は現在とほぼ同じくらいだったという結論まで導 くことができた。この内容は小学校では発展的な 内容である。しかし、ここまで考えさせることで、 化石からはこんなことまでわかるのかという驚き の声が聞かれた。また、時には児童が珍しく、 貴重な化石を発見することがあった。とくになか なか産出しない昆虫化石(だいたい数十個の原 石から一つ程度、場合によっては数百個割って も出てこない) が発見されると児童から歓声の声 が上がる。本校では過去20年間で、69点の昆 虫化石が産出している。中には大型のセンノカミ キリに同定できたもの、おそらく世界的にも珍し いクロスズメバチの化石など学会誌に掲載でき るような貴重なものも授業中に児童自身が発見 している。最近、マスダヒラタドロムシという甲虫 のサナギが児童の手で発見された。この化石の 発見は日本最初の発見でもあり、研究協力者と 共に日本甲虫学会誌に投稿中である。それらの

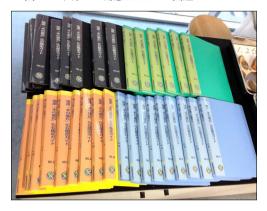
#### ■ 図2 ベスト20位同定のポイント(1~5位)



#### ■ 図3 ベスト20位絵解き検索



#### ■ 図4 一人ずつに用意したカラー図鑑



貴重な化石は発見者の名前とともに大切に保管 し、研究終了後は木の葉化石園に寄贈して保管 してもらう予定となっている。

#### 3. 塩原木の葉石ガイドブックの自費出版

この教材開発をし、1997年に学会誌に公表し てから、2001年、国立青少年オリンピックセン ター科学指導者養成講座講師、2004年サイエ ンスセミナー養成講座講師、2007~2008年、

#### ■ 図6 自費出版した本



#### ■ 図5 図鑑を使って同定する児童



多摩六都科学館講師、2012~2013年東京都 豊島区池袋公立小学校講師、2015年日本地学 教育学会発表、日本理科教育学会発表、日本 私立小学校全国研修会発表と多くの場でもこの 実習について紹介してきた。それらの影響もあっ てか、この実習は日本各地に広がっており、昨年 (2015年)の注文数は2万セットに及ぶという。 また学校だけではなく、博物館や公民館など地 域の教育施設でもこの実習をイベントとして行う ところが増えているという。例えば、千葉県立中 央博物館ではこの化石発掘体験イベントを年に 数同開催しているが募集と同時にすぐに満員に なり、いつも抽選になってしまうという。

しかし、この原石を取り寄せて授業で利用して いる教師から、子供は喜ぶのだけれど「割っただ けでおしまいになってしまう」とか「せっかく化石 が出ても何の化石だかわからないので指導でき ない」という声を時々聞く。確かに理科を専門と しない教師や一般の人々には学会誌や専門誌に 紹介しただけのものでは伝わりにくい。そこで、 より多くの一般の教師や指導者にもこの開発し た実習方法と作成した図鑑を知らせようと思い、 ガイドブックを自費出版した(図6)70。自費出版 であるので、できるだけ経費を節約するために、 表紙以外はすべて手作りの完全原稿で仕上げ

#### ■ 図7 実習の説明の一部



た。使用したソフトはAdobe社製のInDesign というソフトである。プロの印刷業者が使うような ソフトであるが、何とか使い方をマスターして作 成した。また、この実習は小学校だけのものでは なく、中学校、高校、大学まで利用できる。さら に一般の大人でも面白いであろう。そこで、実習 は小学校だけではなく、中学校、高等学校、一 般向けのものも含めて8つの実習(表1)とそれ ぞれのワークシートも掲載した(図7)。図鑑はカ ラーで植物化石118種類と昆虫化石89種類を 掲載した。なお、この本は丸善出版の協力も得 られ、一般書店やインターネット販売でも広く入 手できるようになっている。

#### 4. 塩原化石教育プロジェクト

この実習が広まるにあたり、図鑑を利用しても どうしても同定できず、困る人が出る可能性があ

#### ■ 表1 開発した8つの実習

実習名	対象	主なねらい
実習1 バームクーヘンのなぞ	小・申	木の葉石を含む試料を、ミニ地層モデルと考え、地層がなぜ しまもようになるのかを調べ、地層のでき方について考える。
実習2 化石を採集しよう	小・高・一般	木の葉石を含む試料を割り、化石を取りだす。 化石を採集し ながら化石の産状も観察する。
実習3 化石標本を作ろう	小・高・一般	採集した化石をきれいにクリーニングし、標本ラベルを作成 することで化石標本として価値が出ることを理解する。
実習4 化石の特徴を調べよう	高•一般	標本にした化石の特徴を調べて、それを正確に記録に残すことは、その後の同定につながることを理解する。
実習5 化石を同定しよう	高•一般	化石の特徴から、何という名前かを調べる。 化石は、記載して同定し標本ラベルと一緒に保管することで初めて標本としての価値が出ることを学習する。
実習6 古気候を推定しよう	中・高・一般	化石から、過去の気候を推定できることを学習する。
実習730万年前の塩原を考えよう	中・高・一般	化石から、過去の堆積環境を推定できることを学習する。
実習8 珪藻化石を探そう	中•一般	化石には、珪藻のような微化石が含まれていることを知り、 それらを使い過去の環境を推定できることを学習する。

る。また、学術的に貴重なものが産出しても、そ のまま埋もれてしまうこともある。そのようなこと に対応するために、「塩原化石教育プロジェクト」 というプロジェクトを立ち上げた。このプロジェク トは以下の3つの目的を持つ。

- ◆ より多くの人に化石採集の魅力を経験してほ しいこと。
- 2 指導者がお互いに情報を共有し、より効果 的な指導ができるようになること。
- 協原木の葉石の実習で採集された学術的価 値の高い化石を保存すること。

以上の目的を達成するために、ホームページ を立ち上げた(図8) 8)。ホームページはすべて 手作りであり、情報を共有できる掲示板を用意 し、化石の実習を行う教育機関の指導者が自由 に質問や発言ができるようにした。不明な化石が 産出した場合も、この掲示板で質問でき、それ に対して化石を専門とするプロジェクトチームが 回答するようなシステムを構築した。チームは植 物化石、昆虫化石の専門家などに趣旨を説明 し、協力をお願いした結果、現在12名の専門 家の協力が得られている。また、今まで産出して

#### ■ 図8 塩原化石教育プロジェクトのホームページ



いる化石をデータベース化し、それらの写真を、 自由に閲覧できるようにした。

ホームページはまだ立ち上げたばかりであり、 掲示版への書き込みはまだそれほど多くはない が、いくつかの質問がさっそく書き込まれ、また いくつかは同定にまでつながっている。毎年、 2万袋すなわち、10万個の岩石ブロックが割ら れているのである。今までなら貴重な化石が発掘 されてもそのまま埋もれてしまっていたかもしれ ない。このプロジェクトが、学問と教育との橋渡 しの役割を担うものとして今後多くの人に利用さ れていくことを願っている。

なお、これらの最新の教材開発とその実践に ついては、地学教育学会誌に論文として最近掲 載された<sup>9)</sup>。

# ハチオウジゾウの発見物語

#### 1. 発見の経緯

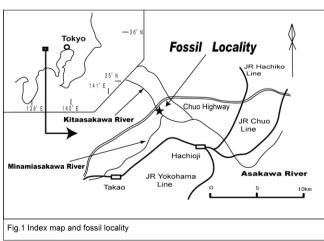
2001年12月9日(日)、私は久しぶりに訪れ た東京都八王子市北浅川より偶然に長鼻類化 石を発見した。この地は、メタセコイアの立ち木 化石が産出することで知られていた場所であり、 私が教員生活をスタートさせた八王子市の公立 中学校のすぐ近くの場所である(図9)。2002年 1月と7月に研究協力者と八王子市の協力を頂 き、本格的な発掘作業を行い、2本のほぼ完全 な切歯(図10)と6個の臼歯(図11)、大腿骨、 脛骨等四肢化石および肋骨他骨断片化石約30 点を得ることができた。そのニュースは新聞、テ レビ等のマスコミで一斉に報道された。7月の発 掘の際の現地見学会では1000名にもおよぶ一 般市民が訪れるほどの大きな社会的関心を得る ことができた。

#### 2. 新種の証明

大学で古生物学を研究してきたが、私の研究 してきたテーマは、中生代の植物化石であった。 また、教員となってからは、とくに昆虫化石に興 味を持ち研究を続けてきた。しかし、ゾウの化石 についての知識はまったくなかった。素晴らしい 宝物を発掘したのは良いのだが、研究をせずに そのままにしたり、専門家に研究を依頼すること は良くないと思った。せっかく運良く発見の機会 に恵まれたのだから、自分の手で研究し、その 成果を論文にして世に出さなければ意味がない と思った。

そこで、ゼロからのスタートであるが、世界中 のゾウの化石の論文を集めて勉強を始めること にした。論文を集めるだけでも大変であった。日 本からのゾウの化石の報告は実は戦前の古いも のばかりであり、入手するのに苦労した。また、 海外の論文も英語だけでなくいろいろな言語で 書かれており、それを読むだけでも相当に時間を 要した。この時期は、職場で管理職(副校長)を していた時でもあり、なかなか研究の時間を取る のが難しい時期でもあった。

#### ■ 図9 ハチオウジゾウ発見地(八王子市役所のすぐ近く)



#### ■ 図10 発掘中の2本の切歯(牙)



#### ■ 図11 産出した6個の臼歯



論文の勉強をしながら、まず、発掘した化石 を丁寧にクリーニングすることが必要であった。

> クリーニングはすべて自分一人で 行った。1つの臼歯を完全にきれい にするためには数十時間を要した。 よってクリーニングだけでも数ヶ月 かかった。その後は正確な記載を 行い、世界各地から産出している 古代ゾウとの比較を行った。

> ゾウの化石の同定の決め手とな るのは、臼歯の特徴である。幸い なことに今回産出した臼歯は6個と 数も多く、そのうち1つはほぼ完全 な形で保存されていた。比較に利 用したのは、臼歯の大きさ、臼歯に

あるぎざぎざであるその頻度とその特徴、エナメル質の厚さなどである。以上の特徴をまとめて比較したところ、今回の標本は、新種であることがわかった。そして八王子の市長の希望でもあり、ハチオウジゾウという和名(学名はStegodon protoaurorae)をつけることにした。

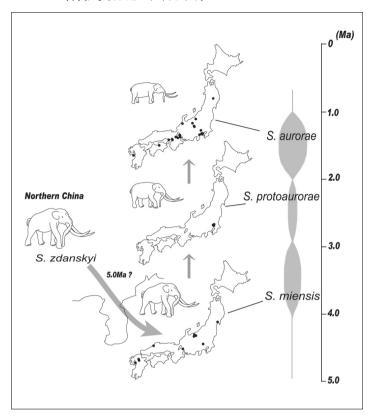
日本のこの時期である前 期更新統から産出している 長鼻類化石はアケボノゾウと 呼ばれているもので、肩高2 m程の小型のものである。そ れは、鮮新統の肩高4m近く にもなる大型のミエゾウから 日本で独自に進化したものと 推察されてきた。今回のもの は、その中間的な形質を示す もので、まざにそのミッシング

リングを埋めるものとして重要な発見になった。 このことからステゴドンの仲間が日本で独自に進 化したことが証明されることになり、新たに長鼻 類の進化過程の1ページを追加することができた (図12)。

新種とわかったあとは、いよいよこれを学術論文としてまとめて、学会誌に掲載させなければ意味がない。論文として世間に公表して初めて新種として認定されることになるからである。大学の古生物学専門の先生にも助言を頂きながら、論文を作成することにした。この論文を完成させるのにさらに多くの時間を要した。完成させるのに数年がかかり、論文の査読審査などにも時間がかかった。そして、とうとう世界的な権威のあるイギリスの古生物学雑誌である「Palaeontology」

#### ■ 図12 ハチオウジゾウは日本で独自に小型化して進化した

(中央に示したのがハチオウジゾウ)



に2010年に掲載された<sup>10)</sup>。この時は化石発見から9年という時間が過ぎていた。このことを八王子市に知らせると八王子市長を始め、多くの方がたいへん喜んで下さった。そして、報道機関でもまたニュースとして取り上げられた。

#### 3. ハチオウジゾウの教育的な意義

大型動物化石が発見されると、それだけでも 大きなニュースになる。場合によっては、それが 町おこしに使われたり、その地に博物館が建てら れてしまうこともある。例えば、恐竜の化石の発 見で、福井県勝山市には恐竜博物館ができた。 野尻湖にはナウマンゾウ博物館がある。滋賀県 多賀町にはアケボノゾウの博物館がある。それほ ど大型動物化石は人々にとり魅力的なものであり、その教育的な意義は大きいものと考える。

ただ、化石はただ発見しただけでは何の意味ももたない。古生物学的な研究を行い、その学問的な位置づけがしっかりとなされてこそ、化石の価値が出ることになる。有名なフタバスズキリュウは、1968年に当時高校生の鈴木直氏によって発見されたものであるが、これが新種として認められたのは、2006年であり、発見から実に38年も経っている。また、東京都の昭島市から1961年に見つかったアキシマクジラは、実はまだ正式に論文が出されていない。それほど、大型の動物化石を新種として報告することは難しいことでもある。今回の私の発見は、新種とするまでには9年の時間がかかったが、それらと比べたらまだ早い方かもしれない。

日本からの古代ゾウの化石は11種~14種が報告されている(ムカシマンモスの扱いが学者によって異なるため)。これらの新種としての報告は多くが大正時代から戦前の古いものであり、もっとも新しくても1959年のミヨコゾウのものである。よって、今回の新種としての発見は半世紀ぶりである。この発見により、200万年ほどの大昔の東京には、たくさんのゾウが群れをなして住んでおり、そこにはメタセコイアの森林が広がり温暖な気候であったというシナリオを描くことができる。まさに、ハチオウジゾウは魅力的な教材と言えるのではないか。

#### 4. ハチオウジゾウの教育実践

ハチオウジゾウを利用した教育実践は、何より 発見者であり、研究者であり、新種として証明し た自分自身ができるだけ多くの人達にこの「ハチ オウジゾウの発見物語」を伝えることであると考 える。そのために以下のようなことを現在まで続 けている。

#### ・レプリカ標本の作製と展示

本来、新種として報告された標本は博物館で保管され、またできるだけ多くの人に見てもらえるようにすべきである。しかし、残念ながら東京都には自然史博物館がなく、ハチオウジゾウを展示してもらえる場所がない。ぜひ将来的にはそのような施設ができることを望みたい。そこで、現在は私の勤務地の学校の中に、サイエンスミュージアムを作りそこに展示保管している。ただ、一般公開できないので、レプリカ標本を作製し、それを発見地のコニカミノルタサイエンスドーム(八王子市こども科学館)に展示してもらっている。また、新種の決め手となった標本(ホロタイプ標本)の臼歯は個人的に石膏レプリカを作製し、これも八王子市や他の学校に寄付している。

#### ・授業の中での利用

本校の6年生の理科「大地のつくり」の単元で、このハチオウジゾウの発見物語についての授業を続けてきた。発見した場所が、八王子市役所のすぐ近くの河原であり、多くの人達の散歩コースであることを知らせ、こんな身近な場所にでも貴重な化石が発見できることを知らせると多くの児童は驚きの声を上げる。また、発見からどのような手順で新種として証明するのかも児童にもわかりやすいように説明する。学習指導要領の枠を超えた発展的な内容かもしれないが、発見者でもあり研究者本人から聞かされる話は説得力があるようである。

また、私は大学の非常勤講師を長年務めており、その授業の中でも、このハチオウジゾウの発見物語についての講義をしている。講義を行ってきた大学は慶應義塾大学、常磐大学、玉川大学、千葉大学である。どの大学も教育学部や教

職関係の授業であるので、将来学生達が教師になったときに、ハチオウジゾウの話をまた子供達にしてくれるのではないかと期待している。

#### ・研修会や講演会、メディア出演など

公立学校の研修会や科学館の講演、テレビ、 雑誌、新聞などのメディアから依頼された場合は 可能な限り協力してきた。学校関係では、東京 都豊島区の池袋の公立小学校、館林市の公立 中学校、立川市の科学センターなどである。ま た多摩六都科学館では観察教室で講師を務め、 各新聞社や雑誌の取材にも応じてきた。このよう に多くの子供達や一般の大人にも、ハチオウジゾ ウの発見物語を知らせ、化石の魅力をできるだ け多くの人々に伝える実践を現在まで続けてい る。

なお、ハチオウジゾウの標本は、2年前の国立科学博物館の特別展である「太古の哺乳類展」から貸し出しの依頼を受け、展示されている。また、群馬県立自然史博物館の特別展にも協力して貸し出した。

# 4 おわりに

教員となり36年もの長い間、理科教育に関わってきた。そして、自分の専門でもある化石の研究も地道ながら続けてきた。理科教育も化石も新しい発見やアイデアの記録は、論文の形で残さなければ人に伝えることができずに記録に残すこともできない。そう思い、自分なりに多くの論文を書いてきた。それらの中でも、やはり自分が一番世の中に貢献できたと思える実践研究は、「化石を教室の中で採集させる」という指導法の開発ではないかと思う。栃木県の銅山町育ちで化石採集が大好きな自分ならではの教育実践と

思っている。

また、偶然に運良く発見できた新種のハチオウ ジゾウも化石の魅力を多くの人々に伝えるべく自 分に与えられた最高の教材であると思う。

長年理科教育に携わってきて、最近感じているのは、子供の頃に豊かな自然に触れて採集などに夢中になった子供達は将来、科学者や医師になっている確率が高いということである。私立小学校というある意味、特殊な職場に長年勤務しているので、子供達の将来の情報が聞こえてくる。それらの情報から得られた私なりの結論である。

今後も、自分に与えられた化石という魅力的な 教材を使った実践を引き続き行い、さらに多くの 自然大好きな子供達を育て、将来的には科学者 や医師の育成にまで寄与できたら幸いなことだ と思っている。

#### 註

- 1)相場博明(1997)「大型植物化石の教材化」 地学教育 50(3) 69-76p
- 2) 相場博明(1998) 「塩原の化石」 『地学教育 実践集』トータルメディア出版 28-35p
- 3)相場博明(1998)「教室内に野外を持ち込む 地学の指導」理科の教育 34-35p
- 4) 相場博明編著 (2013) 『化石ウォーキングガイド関東甲信越版』 丸善出版 196p
- 5)相場博明(2014)「八王子の古生物化石」 『新八王子市史 自然編』八王子市 94-1 06p
- 6)尾上亨(1989)「栃木県塩原産更新世植物 群による古環境解析」地質調査所報告269 号 1-207p
- 7) 相場博明(2015)「塩原木の葉石ガイドブックー実習・同定の手引きと植物・昆虫化石図鑑-」丸善プラネット 107p

- 8) http://science.yochisha.keio.ac.jp/shio bara/ (塩原化石教育プロジェクトホームページ)
- 9) 相場博明(2016)「塩原産『木の葉石』の教材 化と新たな工夫-20年間の実践を通して-」 地学教育 68(4) 1-11p
- 10) AIBA.H., BABA.K. and MATSUKAWA M.(2010): A NEW SPECIES OF *STEGO-DON* (MAMMALIA,PROBOSCIDEA) FROM THE KAZUSA GROUP (LOWER PLEISTOCENE), HACHIOJI CITY, TOK-YO, JAPAN AND ITS EVOLUTIONA-RY MORPHODYNAMICS. Palaeontology, Vol. 53, Part3, 471–490p.

# 本当の主権者教育を求めて

- 政策的思考と政治的関心 -





埼玉県立いずみ高等学校 教諭

はな い ひろたか 華井裕隆

1975年生まれ。2000年筑波大学大学院教育研究科修士課程修了。2003年埼玉県立小鹿野高等学校勤務。2007年埼玉県立浦和第一女子高等学校勤務。2015年埼玉県立いずみ高等学校赴任。 現在に至る。

#### 第65回 読売教育賞から

#### 【社会科教育】

生徒が市に提案して採用された。 和駅前のゴミ箱の分別化は、同校の 高で2009年から始めた。 JR浦 てほしい」と、前任の浦和第一女子 して1票を投じられる主権者になっ 考えるように展開していく。 例など、様々な観点から生徒たちが だかる障害やデメリット、他都市の 点の原因を複数挙げ、解決に立ちは と提案した。全4回の授業は、問題 ふれあい、会話する場所ができる」 した。「公園があれば、住民同士で 付き合いがほとんどない」と切り出 班では、水野芙美さん(18)が「近所 分かれ、その原因と解決策を考えた。 ま市が抱える問題ごとにグループに デザイン科の3年生たちは、さいた 社会の「政策づくり授業」で、環境 らすカラス」……。10月上旬、現代 この授業は、「政策を比較、検討 「地域の活性化」をテーマにした

社会科教育 埼玉県立いずみ高校 華井裕隆教諭 41

 い」と力を込める。 (小林岳人) い」と力を込める。 (小林岳人) はっと背中を押すと、生徒から驚くょっと背中を押すと、生徒から驚くよっと背中を押すと、生徒から驚くよっと背中を押すと、生徒から驚くよっと背中を押すと、生徒から驚くよっと背中を押すと、生徒から驚くなっと背かを込める。 (小林岳人)



生徒たちにアドバイスを する華井教諭(中央)

#### 【最優秀賞選評】

#### 谷川 彰英 筑波大学名誉教授

「社会的課題の改善策を考え、実際 に市に提案して政策として具体化さ れた意欲的な実践である。主権者教 育の理論を背景に実践をしている点 が優れており、高く評価できる」

# 街の課題分析し解決

「ゴミ集積場を荒

# はじめに

#### 1 問題の所在

若者の政治的無関心や低投票率が問題であ ると叫ばれて久しい。また、今年は18歳選挙権 の導入を前に、主権者教育が重要であるといわ れ、各地で模擬選挙(模擬投票)が盛んに行わ れている。しかし、本当の主権者教育とはどのよ うなものであろうか。例えば、投票の仕方や選挙 制度がわかればそれでよいのであろうか。筆者 は、単に投票率が高まればいいという考え方に は異を唱える。100%の投票率になっても、何も 考えずに投票する人が増えるだけでは、大衆社 会の欠陥がますます大きくなってしまう。筆者は、 授業実践を通じて、より成熟した民主社会の実 現を目指している。それは、市井の人々が、社 会の問題に目を向け、問題解決の意欲と技能を そなえ、政治に関心が高い状態の実現である。

本論では、社会の問題解決能力を備えた市民 の育成として「政策づくり授業」を、政策評価能 力を備えた質の高い有権者の育成として「政策 えらび授業」を紹介する。どちらの実践も、行政 側の視点を備えた政策立案能力・政策分析能力 の育成を図るものであり、社会的課題についてさ まざまな視点で考察し、実行可能な解決策を構 想する政策的思考を育成できるものである。政 策を多角的に立案・評価する能力を育成するこ とで、ポピュリズムに流されやすい有権者ではな く、政策を考えて行動し投票をする市民的資質 を備えた有権者の育成が可能になり、より成熟し た民主社会の形成に貢献できると考えている。 現在の日本では、高等学校就学率は9割を超 え、準義務教育化している。有権者になる直前 の貴重な時期に政策的思考を育成することで、

有為な社会の形成者を育成し、公論を盛んにす ることや、より豊かな社会を実現することに寄与 できると考える。

また、本論では最後に、さまざまな選挙学習 も紹介する。模擬選挙(模擬投票)などの体験型 学習からは、得られるものと、それのみでは足り ないものがあるであろう。主権者教育としてすべ ての要素を得られる、完璧な実践はない。この 点についても、本論で考えてみたい。

18歳に選挙権が引き下げられた今、高等学 校卒業後に2年の猶予を置いて「政治化」する時 代は終わった。筆者は、18歳選挙権により、小 中高の社会科教員の責任が非常に重くなったと 考えている。社会を見ると、イデオロギーを含む 問題になればなるほど、右は右で、左は左で主 張を述べ、互いに交わって議論する場が少ない ことに気付く。高等学校までに、多様な意見の 人と議論を交わし、意見が異なる他者の背景を よく知ることで、さまざまな視点を持って社会の 在り方を模索する資質を育成すべきである。さら に、主権者教育を通して、人権に配慮しながら、 よりよい社会づくりに携わろうとする資質を育成 すべきであると考えている。

#### 2. 実践校の紹介

筆者は、埼玉県立浦和第一女子高等学校に おいて、2009年度から、1学年必修科目「現代 社会」(2単位)を担当し、政治分野の単元にお いて「政策づくり授業」や「政策えらび授業」、そ の他の選挙学習を実践してきた。浦和第一女子 高等学校は、埼玉県さいたま市浦和区に所在 し、創立117年の歴史を持つ伝統校で、県内 有数の進学校である。なお、授業時間は65分 である。

その後、筆者は2015年度から埼玉県立いず

み高等学校に異動になり、3学年必修科目「現代 社会」(2単位)を担当し、政治分野の単元にお いて同様の実践をおこなっている。いずみ高等学 校は、さいたま市中央区に所在し、創立55年の 歴史がある旧与野農工高等学校で、現在は生物 系・環境系6つの学科が設置されている。なお、 授業時間は50分である。

なお、筆者は「埼玉ローカルマニフェスト/シ ティズンシップ教育研究会」に2009年から所属 し、埼玉大学の大友秀明教授、桐谷正信教授 や大久保正弘氏らとともに「政策づくり授業」を 開発し、その他の実践においても多くの指導・助 言をいただいた。

#### 「政策づくり授業」

#### 1.「政策づくり授業」とは

「政策づくり授業」は、6~7時間構成で、さ いたま市の問題(社会的課題)の改善策を考え て、可能であれば行政に提言する授業実践であ る。社会的課題を解決するスキルを身に付けるこ と、さらには政策立案過程や政治参加の知識を 得ることにより、社会的課題解決への意識・意 欲を高める学習を目指す実践である。

筆者は、埼玉県立浦和第一女子高等学校1 学年必修科目「現代社会」で、2009~14年度 の6年間、さまざまな形の「政策づくり授業」を実 践した。

授業でテーマに設定したさいたま市は、実践 校が所在する市であり、生徒の半数近くが居住 している。また、市外居住の生徒にとっても、浦 和駅や南浦和駅など、通学の際にさいたま市の 施設を利用することは多い。本実践では、生徒 が班に分かれて、さいたま市の生活者あるいは

利用者として、さいたま市の問題について調べ、 改善策を考える。市町村の問題は、路上駐輪や 分煙、ゴミ問題など、生徒にとって身近で改善 しやすく感じられるものが多い。しかも、改善策 を行政に提言する場合は、国よりも政治参加制 度が充実していて、提言を届けやすい。改善策 を行政に提言することにより、従来の政治学習と は違い「地方自治は民主主義の学校」という言葉 を体感できる学習となる。

#### 2.「政策づくり授業」の学習プロセス

さいたま市の問題(社会的課題)の改善策を 考案し、発表するまでには、おおむね①~①の ようなステップ (手順)を踏んでいる。

- ①問題の原因を探り、解決策をいくつか考える。
- ②さいたま市役所や市民がすでにおこなってい る対策を把握する。
- ③解決策には、市民ができることと行政がすべ きことの二通りがあることを認識する。
- ④問題の切実性を明確に把握する。
- ⑤さいたま市の特性を知り、改善策にさいたま 市の理想的将来像を反映させる。
- ⑥「政策」レベルを目指して、実施方法や期限、 数値目標、予算など具体的な改善策を考え る。
- ⑦改善策の効果、デメリット、実現に向けて困 難な点などを考慮して独善的でない改善策 を考える。
- ⑧他の自治体や他団体の事例を参考にして、よ りよい改善策を模索する。
- ⑨さいたま市の政策の方向性に合う改善策を 考える。
- ⑩改善策実現のために適切な提案方法を選択 する。

Ⅲ模造紙を使用したり寸劇をしたりして改善策 をわかりやすく相手に切実に的確に伝える。

以上の①~⑪の各ステップをクリアできれば、 効果的な、実現可能性のある改善策を作成でき る。逆に言えば、よい改善策が思いつかない場 合は、これらの段階のどこかでつまずいていると いえる。また、各ステップにおいて習熟度の評価 をすることもできる。

#### 3. 多岐にわたる問題解決の学習

「政策づくり授業」は、埼玉県立浦和第一女 子高等学校において、2009年度から6年間さま ざまな形で実践した。まず、実践1・2年目 (2009・2010年度)には、クラス内で4人程 度の班を設けて、各班が解決したいと望むさいた ま市の問題について改善策を作成した。作成後、 希望する者は「わたしの提案」という市長への提 案制度を利用して、さいたま市役所に提案をし た。なお、2年目の実践では、2学期に生徒が考 案した改善策に対して、筆者が4つの項目(問題 の切実性/実現可能性/問題への効果/実施 に値するか)で改善策を評価して、再考してほし い点をあげ、改善策をブラッシュアップするよう 依頼した。その結果、1度目の授業(9~10月) では、3クラス(24班)のうち6つの班(テーマは 駐輪場改善、自転車盗難、浦和駅前の景観美 化、河川敷のゴミ問題、ペットボトルキャップ回 収箱設置、家庭ゴミ収集場の整理)が市政に提 言を行ったが、再考後、2度目(3学期)には8 班が市政あるいは県政に提案を希望した(年間 を通じてのべ14班が提言を行った)。

こうして、1年目は2クラス17班のうち4班が、 2年目は3クラス24班のうち14班が、市長への 提案制度を利用して市役所へ提案をおこなっ た。その多くが「優れた提案である」など高評価 の回答を得た。中でも、浦和駅前広場のゴミ箱 を分別にする改善策(2年目)は、市の政策とし て採用された。また、さいたま市の様々な手当を くまなく利用してもらうために、別々の窓口ではな く、市民に一つの窓口で案内するという改善策 (1年目)については、さいたま市では2年前から 実施し始めたところであるが、他の市ではまだ実 施していないので非常に優れている改善策であ るという評価を得た。

さらに、路上駐輪を減らすために、駐輪場を ポイント制にして商店街などでポイントを使用で きるようにする改善策(1年目)については、提言 の後、実現可能性について市役所と生徒が意見 交換を行う場が持たれた。

そして、市役所に提言を行うことによって、行 政の仕組みについて理解が深まることもあった。 たとえば、CO。排出量削減と発展途上国への貢 献という一石二鳥の改善策として市役所内にペ ットボトルのキャップ収集箱を設置することを提 案した(2年目)が、市からの回答は以下のよう なものであった。

「廃棄物処理法では、一般廃棄物は、廃棄さ れた自治体で処理をおこなうという原則がありま す。一度確認したのですが、キャップは資源物 ではなく、廃棄物であるというのが国の意見で す。つまり、さいたま市で排出されるキャップは、 一般廃棄物に該当するため、これを関連団体へ 送ることは、違法状態を推進することになってし まいます。そこで市では、キャップなどはチップ 化してプラスチックの材料に活用してもらってい ます。現在市庁舎にキャップ回収箱があります が、あれは団体に420円を負担してもらって設 置しており、人道上有意義であるため、看過して いる状態です」

他にも、家庭ごみ収集場にゴミが散らからない

よう、カラスに突かれないように黄色で目の細か いネットでゴミをかぶせることなどを提言した班 (2010年度) については、以下のような回答を もらった。

「家庭ごみ収集所の管理は、市ではなく、地 域住民がおこなっています。カラス対策は、確か にネットの使用が有効なのですが、住民に強制 はできず、呼びかけをしています」

そして、実践3年目(2011年度)には、各班 がばらばらの問題に取り組むのではなく、クラス に1つの問題を設定し、各班が共通の問題に取 り組むようにした。1つの問題に対して、クラスで さまざまな改善策が提示されることにより、学習 効果が深まると考えたのである。

「放置自転車」問題を扱ったクラスでは、「地元 の子どもたちからデザインを募集して、放置自転 車が置かれるところに子どもの描いた絵や浦和 レッズのサインなどを地面に設置する」「路上駐 輪多発スポットに『この自転車は寄付したものと みなします』『自転車をご自由にお取りください』と いう張り紙を貼る」などの意見が出された。

「自殺者が多い」問題を扱ったクラスでは、「相 談所のポスターをいたるところに貼ったり、携帯 電話に相談所の番号を入れたり(購入時)して、 相談できる場所があることを知らせる」「義務教 育期間に、学校で自殺防止の講演会を開催する」 「引きこもりの人に対して、TVで放映するCMで うったえて、CMをはやらせる。例えば、アニメ で『死んじゃだメダカ!』『気軽に相談しよウナギ!』 『悩みを話そウツボ!』『一人じゃなイルカ!』『いつ でも君のみかタツノオトシゴ!』『君の相談で悩み が晴れるよ、電話しよう!』とよびかける」などの 意見が出された。

「投票率が低い」問題を扱ったクラスでは、「イ ンパクトのあるキャッチコピーを設定し、公共交 通機関を利用してはりだし、若者に投票に参加 しないことが自分たちの首を絞める結果になるこ とを伝える」「選挙の雰囲気をよくするために、投 票所に花を置いたり、音楽を流したり、みらいく ん (選挙啓発のキャラクター) が町中を歩き回っ たりする」などの意見が出された。

「生活保護世帯が増加し財政負担が増大して いる」問題を扱ったクラスでは、「生活保護受給 者の調査をする際に家庭訪問や書類審査を強 化して、本当に必要な人を絞り込む。そして、 一生のうちに生活保護をもらえる期間を3年間 など設定することにより、自立を促す「職業訓練 をイベント化して参加率を上げ、これに参加しな いと生活保護を減額するようにしたり、職業訓練 に参加したことを履歴書に反映させて、就職しや すくしたりする」などの意見が出された。

「災害対策」問題を扱ったクラスでは、「駅の出 口に、避難場所の地図を設置して、出先の人や 外国人でも避難場所がわかるようにする」「帰宅 困難の際に、障害者に対応できる人を呼びかけ る。障害者に状況を知らせたり、危険な場所か らの避難誘導をしたり、障害の種類にあわせた 対応をする」などの意見が出された。

以上5クラスにおいて、改善策が不十分で現 実的でない班も見受けられたが、外部講師の市 職員からは、「どの班も問題をよく分析しており、 実現可能で効果的な改善策もあるし、われわれ が気付かない独自の視点もあった」との感想をい ただいた。

#### 4. 公共施設の複合化案と、 女性政策を考える

実践4・5年目(2012・2013年度)には、 さいたま市の先進的な取り組みである「公共施 設マネジメント計画」を題材にして、財政面の負 担を考慮しながら、老朽化する公共施設をどうするのか、どのような複合施設が考えられるのかについて学習した。公共施設の複合化について、個別具体的な事例を使用して考えることは、政策立案の実務的な部分であり、今までの「政策づくり授業」よりも一歩踏み込んだものとして、実践する価値が高い授業であると考えた。ただ、事情により授業時間の確保が厳しく、4時間構成で実践をおこなった。

1・2時間目には、さいたま市行財政改革推進本部行政改革チームの職員を講師に招いて、さいたま市における公共施設の現状と課題、財政への影響、さらに「公共施設マネジメント計画」における複合化の考え方を紹介していただいた。そして少人数の班に分かれて、小学校と公民館や高齢者施設、児童館など公共施設を複合化することについて、メリット・デメリットをあげた。また、「あなたはどのような公共施設を利用したことがあり、公共施設のどのような活動を知っているか?」「将来どのような施設があったらよいか?」を話し合った。

3・4時間目には、「浦和南公民館が10年後に改築をすることになった。浦和区の高砂小学校にも空き教室ができた。住民からは老人福祉施設・乳幼児施設の要望もある。そこで、高砂小学校の空き教室、あるいは校舎を増設した場合に、他の機能を併設するとしたら、どのような機能を複合化するか?」というお題を出して、各班でベストと思える複合化案を話し合い、クラスで発表した。これにより生徒は、複合化で生じる課題に対して、ハード面、ソフト面でどのような工夫をするかが問われることとなる。

生徒はこの学習を通して、さまざまな市民の存在について学習することができたが、さまざまな市民の存在をもっとリアルにつかめるように、ロールプレイや合意形成の要素を授業に盛り込む

べきであったと反省している。

そして、実践6年目(2014年度)には、女子 高にとってもわが国にとっても切実な問題であ る、女性の生き方・働き方についてクラスで改善 策を考える実践をおこなった。

この結果、「育児のために退職した女性が再 就職しやすいように、そのような女性を会社が雇 用した場合、人数に応じて、会社に市から市報 などへの広告権を与える」「女性管理職が少ない ため、2050年までに女性管理職の割合を4割 以上にした会社に支援金を与える」「待機児童を ゼロにするために、就学前の児童に関する決まり をつくり、義務教育以前の幼児への権利を保護 する」などの提案が考案された。

2クラス22班のうち4班が市役所への提言を希望した。生徒は以下のように、提案理由や改善策の効果、デメリット、高校生にできることなどをコンパクトに書き入れている。

「さいたま市には学童保育が少ないという課題 があります。この課題を解決しなければならない 理由は、①女性が働きにくい。②働く女性が少 なくなる。③子供が少なくなる。④子供が安心し て生活できない。これら4つの弊害が起こってい るからです。この課題の改善策は空き地、空き 家を利用することです。土地を有効活用するた め、2020年までにさいたま市でボランティアを募 って達成できると考えています。現在、埼玉県内 に10.7%の空き家があるためそれを利用できる と思います。設備を整えるには1家600万円ほ どかかります。この課題を改善した場合、働く女 性が増える、子供が増える、女性が安心して仕 事をすることができるなどの効果が挙げられま す。デメリットとしては、ボランティアで学童保育 を作った場合、民間の学童保育となるため、料 金が高くなってしまうことがあります。また、費用 と人手が必要な困難もあります。私たちは子育てがしやすく、女性が安心して働くことができる社会を目指しています。そのことを実現するには学童保育が少ないという課題を解決しなければなりません。私たちにできることとして、ボランティア活動(募金集めなど)、問題の呼びかけを行っていきたいと思います」

この提案に対して、市役所も「ご提案いただきました空き家の活用につきましても、全庁的に検討を進めており、引き続き、子育て世代が安心して働き続けることができるよう、放課後児童クラブの拡充に努めてまいります」などと前向きな回答を寄せてくれた。

#### 5. 成果と課題

本実践の成果と課題を、授業前後のアンケー ト結果(実践2年目・2010年度) をもとに述べる。 まず、本実践の成果は4点挙げられる。第1 に、授業後には、社会的課題に対する関心が高 まり、解決・提言をする技能と意欲が高まった。 この結果からは、社会的課題の解決・提言の技 能を高める実践をおこなうと、解決・提言の意欲 も高まったということがいえる。また、アンケート によると、提言を希望した班だけでなく、提言を 希望しなかった班も、社会的課題解決・提言の 意欲と技能は高まっている。なお、授業前には、 提言班は非提言班よりも意欲や技能が低かった が、提言後の意欲と技能の高まりは、非提言班 以上であった。この結果は、意欲や技能の低い 生徒・学級・学校であっても、社会参加への意 欲や技能を高められる可能性を示唆している。そ して第2に、地方政治に対する知識・理解を深 め、関心を高めた。地方自治体の選挙への関心 も高まり、政治や社会の問題と聞いて地方の問 題を連想する生徒が増加した。また、行政機関

などが社会的課題に対してさまざまな対策をして おり、市民の声を活かす工夫を増やしていること を理解している生徒も増加した。第3に、社会的 課題の解決や、政治参加についての知識理解を 深めた。そして、行政や市民の解決策やさまざま な政治参加の形態を学習した。第4に、本実践 では、政策の優先順位など行政側の立場も学ぶ ことができるので、地方自治や政治参加だけでな く、社会保障や財政の分野でも学習に深みが増 した。

一方、課題も挙げられる。授業後アンケートでは「社会的課題について、解決策を見つけて提言することができない」と考える生徒も多く存在した。この中には、問題解決の技能が低い生徒と、技能が高くても、社会的課題の解決はそれほど簡単ではないと考える生徒が混じっていると思われる。いずれにせよ、問題解決の技能を伸ばすことは、今後の授業実践の課題である。問題の把握・分析が不十分なために、改善策の妥当性が低くならないよう、調査・分析段階の学習活動を充実させなければならない。また、構想力、提案力、プレゼン能力など総合的な能力の育成が必要である。

以上のように、さいたま市を教材とする「政策 づくり授業」の実践は、社会的課題に対して改善 策を考案することを学び、必要に応じて行政へ 提言のできる人材を育成する実践となった。有 為な社会の形成者の育成に貢献できる実践とし て、本実践を紹介したい。

# 3

## 「政策えらび授業」

#### 1.「政策えらび授業」とは

「政策えらび授業」とは、社会的課題に対し

て、様々な観点(メリット・デメリット、コストや 利害関係者、トレードオフ、社会全体の利益、 将来の利益、公平性など) から考慮して政策を 選択する学習である。社会全体の利益や将来の 利益、公平性などについても考察することで、ル ソーのいう「一般意思」的思考を育成することが 出来る。このような「政策えらび授業」によって、 ポピュリズムに流されやすい大衆的な有権者で はなく、政策を考えて行動し投票をする市民的 資質を備えた有権者を育成でき、より成熟した 民主社会の形成に貢献できると考えている。本 実践では、社会的課題に対する政策を生徒が理 解し、考えを深め、生徒がある政策を選択する 際に、その論拠を示しながら判断できる状態を目 指す。このねらいを達成するために、ユージン・ バーダック(2012)とウォルター・パーカー (2003) の政策分析の手法を参考にして、授 業計画を作成した。

筆者は、埼玉県立浦和第一女子高等学校1 学年必修科目「現代社会」で、2012~14年度 の3年間、エネルギー政策 (原発問題) をテーマ に実践した。また、埼玉県立いずみ高等学校3 学年必修科目「現代社会」で、2015・16年度の 2年間、安全保障政策(集団的自衛権と憲法改 正)をテーマに実践した。

#### 2. エネルギー政策編

本実践においては、4つの立場を設定した。 将来的に現状よりも原発の基数を増やす場合は 「拡大」派、変えない場合は「維持」派、減らす 場合は「縮小」派、すべて無くす場合は「廃止」 派と設定した。この4つの政策をめぐる対立軸 は、少資源国日本での「電力の安定供給」と「安 全」である。

「廃止」派は、3.11の事故があった以上、安

全な原発という幻想は捨てるべきであり、再生エ ネルギーなどで安全な電力の供給を目指すべき で、また、原発のコストが安いという情報も、事 故の補償額を含めれば疑わしいと考える立場で ある。「縮小」派は、たしかに事故はあったけれど も、安全に運転できる原発も存在するので使わな いともったいない、新エネルギーの開発には時間 と金額がかかるため、残せる原発を利用していこ うと考える立場である。「維持」派と「拡大」派は、 事故が起きた反省を生かせば、より安全な原発 を開発できるし、世界でもトップレベルの原発技 術を捨てるべきではなく、他国へも輸出すべき だ、核燃料リサイクルの完成も近い。一方、新 エネルギーは効率が悪く少量の電力しか得られ ず、安定供給ができないと考える立場である。

授業の流れとしては、まず現状理解として、原 発事故の内容と現状、政府や各政党のエネルギ - 政策を学習し(1時間目)、生徒が「原発拡大」 「原発維持」「原発縮小」「原発廃止」の各立場に 分かれて、各立場のメリットとデメリットについて 調べ(2・3時間目)、今後日本がとるべきエネル ギー政策について討論をする(4時間目)。そし て、討論で挙がった論点について再度調べなお し(5時間目)、その他の観点(利害関係者とトレ ード・オフ、社会全体の利益や将来的利益、政 策が実現する価値、公平性)から、各立場につ いて考察する(6時間目)。そして再度討論をおこ ない、最終的な自分の意見を書いてまとめる、 各政党の政策を理解する(7時間目)という実践 である。

通常のディベートや討論と異なる点は、メリッ トとデメリット以外に、以下4つの観点で、政策 分析を深めることを求めた点である(6時間目)。 第1に、もしこの政策を実施すれば、どのような 人が損害をこうむり、どのような人が利益を得る のか、政策の影響力を考察する。第2に、政策 により損害を受ける人に対してどのような補償をするのか(トレードオフ)を考察する。これらの考察により、この政策を実行するためにはどのような人を説得しなければならないのか、被災者への現在の補償は十分なのかについても考察できる。第3に、その政策が与える社会全体の利益、将来的利益や公平性について考察することで、社会を多面的に捉える思考の育成に役立つ。第4に、すべての政策には実現したい価値が盛り込まれているが、それは自分の立場にとってはどのような価値なのかを考察する。これにより、政策を見る視点を深めることができる。これら4点の考察を、ワークシートに記入し、班で話し合い、その内容をクラスで共有した。

また、政策を評価、分析するには多くの観点があるが、こと原発問題については、地方と都市の関係が背景にあり、政策の「公平性」について深く考えさせられる問題である。そこで、「公平性」について考察するために、一つの視点として以下のような講義をおこなった。

まず、マイケル・サンデルの『これからの「正義」の話をしよう』にも出てくる、「暴走する路面電車」の事例を紹介した。この事例は、路面電車により確実に誰かが犠牲になる場合、被害者を1人か5人か、どちらの選択肢を選ぶのがよいかという、功利主義的観点の入った事例である。その上で、都市部にも建設されている火力発電所と、都市部の近辺には決して建設されておらず、事故の被害が最小限ですむ人口の少ない土地に置かれている原子力発電所の場所を地図で紹介した。これらをふまえて公平とは何かについて考察し、それぞれの立場を支持する理由を公平性の観点から主張することを求めた。

原発拡大・維持派の生徒からは、多数の幸福 のためには少しの犠牲は仕方ない、しかし損害を 受ける人のために安全確保や補助金で少しでも 公平に近付けるべきだ、また、何かを犠牲にして 生きているという自覚が私達全員足らないので はないかと思う、などの意見が感想用紙に書か れた。一方、原発縮小・廃止派の生徒からは、 東京湾に建てられないならば原発は廃止にすべ きだ、少数の人を危険にさらしてまで豊かさを求 めるべきではない、しかし、周りのことを思って 多少の犠牲を受け入れることは尊いことだし公 平な世の中につながる、などの意見が書かれた。 マイノリティから見る公平性について学習したこ とで、公平とは何か、補償とはどのようなものか などについて考察を深めることができた。

なお、実践1年目(2012年度)には、授業後に、さいたま市のパブリックコメントに投稿をした。このパブコメは、「さいたま市新エネルギー政策(仮称)(素案)」についての意見を、2012年12月25日から1か月間募集するというものであった。2時間調べ学習をしたうえで、生徒からは、大宮駅や浦和駅など、市内32駅の駅に発電床を設置してはどうかという意見や、新しいマンションに太陽光パネル設置を義務付けるなど、エコシティ化を進めるためには、義務付けの政策も必要なのではないかという意見が出たため、パブコメへの投稿をおこなった。

#### 3. 安全保障政策編

本実践においては、4つの立場を設定した。 憲法を改正して国防軍を持てるようにすべき (A)、改憲せずに集団的自衛権を認めるべき (B)、改憲もせず個別的自衛権しか認めない (C)、改憲せず自衛隊も廃止すべき(D)という 4つの立場である。この4つの政策をめぐる対立 軸は、平和主義の憲法をもつ日本での「憲法解 釈」と「安全」である。

「自衛隊廃止」派 (D) は、完全に違憲状態を

なくして、外交努力や米軍により自国の安全を守ろうと考える立場である。「個別的自衛権」派(C) は、集団的自衛権の行使は違憲であり、自国に危険をもたらすと考える立場である。「集団的自衛権」派(B)は、現在の国際情勢から見て集団的自衛権を容認する方が安全であり、解釈改憲により海外でも自国民を守ることができて、国際貢献もできる、しかし改憲まではしない方がよいと考える立場である。そして「改憲」派(A)は、違憲状態をなくして、国際貢献や自国・自国民の安全確保のためにも国防軍をもって軍備を増強する方がよいと考える立場である。なお、授業において「改憲」派(A)の生徒はいずれも、専守防衛の立場は守りたいと考えていた。

授業の前半の流れとしては、まず現状理解として、戦後日本の平和主義、PKO、個別的自衛権と集団的自衛権、国連憲章第51条、憲法改正の要件、自民党の憲法改正案などを学習し(1・2時間目)、生徒がA~Dの各立場に分かれて話し合いをおこない、今後日本がとるべき安全保障政策について討論をする(3・4時間目)。そして、クラス全体で、A~Dの各立場について、将来の利益から考える理由、社会全体の利益から考える理由、利益を受ける者、損害を受ける者、損害者への補償、公平性から考える理由、効率性から考える理由を挙げてもらい、ワークシートに記入する(5・6時間目)というものである。

本実践の特徴としては、A~D4つの立場について、政策分析を深めた点である(5・6時間目)。授業時間にして2時間もかかったが、すべての意見について政策分析を行った理由は、2つある。1つは、ディベートのように自分と異なる意見をはねのけるのではなく、他者がどのように考えて自分と異なる意見を言うに至ったのかを理解することで、さまざまな意見に耳を傾けなが

ら自分の考えを構成していく能力を育成することを図ったためである。そして2つには、よく言われるように「民主主義は少数意見の尊重が大切である」ためその機会を設定したということである。実際には、自衛隊廃止派(D)がいないクラスもあったが、それでもクラス全員にDについて意見を求めて考えた。実社会でも、他者の意見をハナから否定する、少数意見には耳も貸さないという人がいて、その風潮は強まっているという嘆きも耳にするが、筆者自身が、この実践をおこなって、自分と違う意見に対して非常に理解が深まったと感じている。

そして、授業の後半の流れとしては、A~Dのうち現在の自分の立場について、その政策判断をするに至った状況理解と倫理的価値判断・政治信念についてワークシートに書いてまとめ(7時間目)、最後にクラスで合意形成を行い、各政党の政策を理解する(8・9時間目)という実践である。

伊藤恭彦(1997)は、自覚的かどうかは別と して、市民は通常の政治的判断において、「政治 的信念「政治的状況についての理解」「倫理的 原理」が潜在した熟慮の過程を経て、決断に至 っていると述べる。そこで今回、7時間目に「憲 法を変えると、国際的な信用がなくなる?」「今後 (五十年間くらいで)中国やロシア、北朝鮮が攻 めててくる危険性は高い?」「中国やロシア、イス ラム系の国にくらべて、アメリカの軍事力が落ち てきている?」「アメリカを助けないと、アメリカは 日本を守ってくれない?」「集団的自衛権を認め ると、日本が危ないことに巻き込まれやすい?」 「今まで日本が個別的自衛権しか認めず紛争に かかわらなかったために、国際的な信用を得てい た?」などの質問を用意し、さらに「日本国憲法を 変えないこと」「日本国民の生命を守ること」「経 済が好調なこと」「他国との協調関係をよくするこ

と」「自衛隊の被害を出さないこと」の5つについて優先順位を質問した。こうした学習によって、自分の意見や他者の意見の背景について、一歩踏み込んだ理解をすることができ、「私の政治的判断はこれでよいのか」と思考を深め、より広い視野にたって政治的判断をおこなう資質の育成を図った。

しかし、以上の実践をおこなっても、「相手の意見の背景は理解できたが、結局お互いに主張しあって、合意を形成することはできない」というあきらめを生んではいないか。ディベートでもディスカッションでも、「世の中話し合いで合意できることは少ない。結局は多数決で決まるんでしょ」という思いを抱かせて終わってはいないか。このように考えたため、8時間目に合意形成の授業を設定した。

まず、立場の人数確認を行う。例えば、ある クラスは、Aが6人、B15人、C12人、D1人 であった。そこで、現在クラスで多数決を取ると Bが採用されるであろうが、Bの立場には44% の人しか賛成しておらず、あとの56%の人は納 得できていない。そこでクラスで話し合って、A ~Dのどの立場でもよいので、その立場に条件を 付けて、クラスの大多数が納得できる案を話し合 って作成するという授業である。するとこのクラス では、「B(集団的自衛権を認める)の立場だが、 日本に被害が来そうな時だけ自衛隊を派遣する」 という意見を採用して、76% (26人) の人が賛 成をした。この意見は実は、2014年に政府が合 意した意見であった。当時、自民党と公明党が 話し合って、「わが国と密接な関係にある他国に 対する武力攻撃が発生し、これにより我が国の 存立が脅かされ、国民の生命、自由及び幸福追 求の権利が根底から覆される明白な危険がある 場合」など、集団的自衛権行使のための3要件 を閣議決定した。このことを他のクラスでも紹介 することにより、実社会での合意形成について学ぶだけではなく、政府や国会の活動についても深い学習をすることができた。その他のクラスでは、「B (集団的自衛権を認める)の立場だが、自衛隊は武力介入をせずに、物資の支援のみを行う」などの案も出たため、追加の補足説明として、補給部隊(兵たん)も敵として認識されるだけでなく、攻撃されやすいという意見を筆者が紹介した。

#### 4. 成果と課題

本実践の成果と課題を、安全保障政策とエネルギー政策の「政策えらび授業」を両方おこなった2016年度の、授業前後のアンケート結果(6クラス200人)をもとに述べる。

「私は、選挙の時に、候補者の政策のちがいを理解したうえで、投票できる」という設問に対して「そう思う」「ややそう思う」と答えた生徒は79人(41.6%)  $\rightarrow$ 90人(47.4%) に増加し、「ややそう思わない」と答えた生徒は55人(28.9%)  $\rightarrow$ 49人(25.8%) に減少した。そして、「有権者になったら、物理的に不可能な場合を除いて、国政選挙へ投票に行く(不在者投票も含める)」という質問に対しては、「そう思う」「ややそう思う」が96人(50.5%)  $\rightarrow$ 106人(55.8%) に増加、「ややそう思わない」「そう思わない」が52人(27.4%)  $\rightarrow$ 38人(20.0%) に減少した。(総務省の抽出調査によると、今回の参院選で18歳の投票率は51.17%であった)

また、「有権者になったら、物理的に不可能な場合を除いて、国政選挙へ投票に行く(不在者投票も含める)」に「そう思う」「ややそう思う」と答えた人の中で、「私は、選挙の時に、候補者の政策のちがいを理解したうえで、投票できる」に「そう思う」「ややそう思う」と答えた人は、55人

(57.2%)→71人(67.0%)に増加。「ややそう思わない」「そう思わない」と答えた人は、19人(19.8%)→14人(13.2%)に減少した。

そして、「国の政治や政策に関心がある」に「そう思う」「ややそう思う」と答えた人は、89人  $(47.1\%) \rightarrow 97人 (51.3\%)$  に増加した。

以上のことから、まずは、微増ではあっても、 選挙の際に政策の違いを考えて投票に行く人数 が増え、政治的関心も増えたといえる。

一方で、政治への関心や投票行動、政策理解については、「どちらでもない」も含めると約半数の人が肯定的な回答をしていない。今後の課題としては、政策評価の能力と、政治的関心をさらに引き上げることである。考えてみれば、これだけ投票率の低い昨今であるため、家族や知人が選挙に行かない、ニュースも見ない高校生も多いであろう。今後は、授業で常にニュースや新聞記事を取り上げたり、政治的な事柄について議論をおこなったり、模擬選挙(模擬投票)など体験型の実践をおこなったりして、サッカーや野球談議のように、生徒に政治を身近なものとして捉えてもらうことが必要である。

しかしながら、進学校以外でも、教科書に関連しながら複雑な政策についての学習が実践できたことは成果である。クラスで討論をする場合には、まずは個人の立場をワークシートに書いて、班に分かれて話し合い、そしてクラス討論を行うなど多少配慮はしたものの、政策分析や合意形成など、クラス全員で集中して話し合うことができたことも成果である。また、定期的に、生徒には自分が選ぶ立場の理由をワークシートに書いてもらっているが、その理由は日を追うごとに、深く、広く問題を捉えた文章となっている。

今後、「政策えらび授業」をおこなうとすれば、 授業の最後にエネルギー政策や安全保障政策 のマニフェストを作ることも盛り込んでもよいと考 えている。自分たちの考えでマニフェストをつくる ことで、より高度な政策分析能力や、どのような 障害をクリアして政策を実現するか考察する能 力も求めることができるためである。

以上のように、「政策えらび授業」の実践は、1 つの社会的課題に対して、さまざまな観点から 政策を分析することを学び、政策的思考の育成 に寄与できる実践となった。有為な社会の形成 者の育成に貢献できる実践として、本実践を紹 介したい。

# 4

#### さまざまな選挙学習

#### 1. 全校規模の模擬選挙と、 さまざまな選挙学習

筆者は、2003年ころから授業の中で模擬投票を実施している。当初は授業内で新聞記事やマニフェストを配布して投票するだけであったが、しだいに、義務的に全員投票をおこなうことに疑問を感じ、2012年衆院選、2013年参院選、2014年衆院選と、教室外に投票箱を設置して、全校規模の模擬投票を実施した。この際に、社会科系の部活動が選挙についての校内世論調査を実施したり、政党の獲得議席数予想を募集したりした。

また、選挙前の授業実践としては、国政選挙の際に、模擬公開討論会や「ボートマッチ」(自分の主張に合う政党を探すホームページ)の体験をおこなった。そして、市長選挙において、実際の公開討論会の資料を活用して政策を比較する授業実践や、市議会議員選挙において、各候補の応援演説を作成して、納得のいく候補者がいない場合には自分が立候補して政策を主張する授業実践をおこなったりもした。

#### 2. 模擬公開討論会

政策というものは、それを実施することによって必ず社会的影響が出る。政策を実行するということは、それにより利益を受ける者もいれば、被害をこうむる者もいる。ある政策を実行することで、他の政策の優先順位が下がることもある。

政党や候補者が描く社会像に1票をゆだねる、それが選挙である。投票をした後で、あるいは投票を棄権した後で「こんな政策が実行されてしまうなんて、こんな社会は私が望む社会ではない」と思ってもすでに遅いのである。私たちは、普通選挙制の時代に生きているのだから、有権者は自分の投票(あるいは棄権)によって引き起こされる事態には、責任を持つべき時代に生きているのである。しかし、現在の日本では、その意識が非常に希薄ではないだろうか。政策について深く考えて投票(棄権)をした有権者こそが「○○党の△△政策は、マニフェストに書いていなかった。なぜ選挙後にそんな政策を行うんだ!」と怒る権利がある。

このような問題意識に基づいて、2013年参院 選に先駆けて浦和第一女子高等学校で実践した 「模擬公開討論会」の実践を、選挙前の授業実 践として紹介したい。

本実践は、1学年必修科目「現代社会」の授業で、2時間(本校は65分授業)計画でおこなった。まず、1クラスを9つのグループに分けて、比例代表(北関東ブロック)に立候補している政党(自民・公明・民主・維新・みんな・社民・共産・生活・みどりの風)から、各班1政党を担当するよう決める。1時間目は、コンピュータ室で公約やマニフェストを見ながら、調べ学習をおこなう。各班で、ワークシートの空欄3つ(「この政党が主張したいことはこれです!!」「この政党の政策を実現すると、こんな社会になります」「この

政党の政策には、こんなデメリットもあります」)に記入して、2時間目にそれを全員分印刷して配る。2時間目は、9つの政党の代表者が前に出て、各班3分ずつワークシートの説明をする。その後、質疑応答と模擬投票をおこなった。

2時間目の質疑応答では、たくさんの質問が出た。

「物価上昇については、どう対処するのか?」という質問に対して、生活の党では「派遣社員を減らして、年金額を増やす」、自民党では「富裕税で、教育医療を免除する」、社民党では「富裕税と、農水産業を保護して食糧費を抑える」、みどりの風では「大企業増税と、女性や若者の雇用を充実させて、景気回復後に増税する」と答えるなど、政策理解を踏まえたうえでの応答が見られた。

また、国政選挙のニュースではあまり聞かれな い「共産党が政権をとったら、日本を社会主義に するのか?」「社民党の政策では、軍備を縮小す るのか?」という率直な意見や、「維新の会が言っ ている、憲法改正の国民会議というのは、関心 のある人しか参加しないだろうから、裁判員制度 みたいに抽選にする方が平等に意見を吸い上げ られるのではないか?」「みどりの風などは、TPP 関連で、ASEAN+6ということで、東南アジア と協力して経済をがんばるというが、アメリカと組 まないと大して力にならないのではないか?」とい う踏み込んだ質問も見られた。そして、「自民党 は、アベノミクスの第三の矢、民間投資はどうや ってやるのか?」「すべての政党に対する質問とし て、増税してどのように社会保障を充実させるの か?」という質問もあった。

うまく答えられない場合も多かったが、教員の 予想以上に、政党に対して質問を考えて発言す る力が育成され、何とか答えようとすることで、 政党や政策に関する興味が深まっていた。もう1 時間延長する余裕があれば、再度調べ学習をして質疑に応答することができ、より深い政策や政 党の理解につながったのではないかと考えてい る。

#### 3. 成果と課題

アンケート結果 (2013年度) によると、全校での模擬投票 (自由参加) に投票する割合は、事前学習を全くしていないクラスよりも、事前学習1時間 (インターネットのボートマッチを体験) を経験したクラスの方が投票率が高く、さらにそれよりも、事前学習2時間 (模擬公開討論会) を経験したクラスの方が投票率が高いことが判明した。当然ながら、選挙学習と模擬投票をセットでおこなう意義は高い。

以上のように、模擬選挙 (模擬投票) や模擬 公開討論会など、体験型の学習は生徒の心に長 く残るものであろうし、しかも、生徒は、筆者の 予想をこえる立派な発言や質疑応答を行う。政 治的関心を喚起する実践となった。有為な社会 の形成者の育成に貢献できる実践として、本実 践を紹介したい。

## 5 おわりに

はじめに述べたように、筆者は、授業実践を 通じて、より成熟した民主社会の実現を目指して いる。それは、市井の人々が、社会の問題に目 を向け、問題解決の意欲と技能をそなえ、政治 に関心が高い状態の実現である。

本論では、社会の問題解決能力を備えた市民 の育成として「政策づくり授業」を、政策評価能 力を備えた質の高い有権者の育成として「政策 えらび授業」を紹介した。また、模擬選挙(模擬 投票) や模擬公開討論会など、政治的関心を喚起する実践を紹介した。

これまでの実践では、いくつかの成果も得られたが、一方で、社会問題解決の能力、政策評価の能力、政治的関心をさらに引き上げることは今後も課題である。授業で常にニュースや新聞記事を取り上げたり、政治的な事柄について議論をおこなったり、模擬選挙(模擬投票)など体験型の実践をおこなったりして、サッカーや野球談議のように、生徒に政治を身近なものとして捉えてもらうことが必要である。そして、国政だけではなく、地方政治も含めて、常に選挙に対応できる学習を用意しておかなければならない。

また、注意しなければならない点は、本論の 実践では、問題が発生している現場に行って学 習しているわけではなく、問題のさまざまな利害 関係者に話を聞いたわけでもないことである。そ のため、教員・生徒によるあくなき情報収集が必 要であり、高い社会認識力の育成を求めて実践 することが重要である。さらに、本論の実践で は、問題の改善策を実行に移したわけではなく、 問題の解決に大きく寄与したわけではない。現実 の社会ではさまざまな政治参加があり、シティズ ンシップ教育でも「アクティブ・シティズン」の育 成が求められているが、行政への提言や選挙で の政策選択以外の、社会的課題の解決方法を 身に付けるには、今回とは別の実践を用意するし かない。

主権者教育としてすべての要素を得られる、 完璧な実践はない。今後も、いくつかの実践を 交えながら、より良い主権者教育を求めていきた い。

#### 参考文献

• 足立幸男『政策学的思考とは何か』勁草書房 2005年

- 華井裕隆、大久保正弘「高等学校公民科におけるシティズンシップ教育実践 —社会的課題解決の教育モデルに基づくさいたま市政策づくり授業—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』第115号 2012年 39-52頁
- 華井裕隆「原発問題を通じて社会的課題解決 意欲と政策的思考の育成をはかる授業一政 策えらび授業(エネルギー政策編)の実践一」 『中等社会科教育研究』第31号 2013年 35-48頁
- ユージン・バーダック著 白石賢司、鍋島学、 南津和広訳『政策立案の方法』東洋経済新報 社 2012年
- Parker, Walter. C., Teaching democracy unity and diversity in public life, Teach ers College Press, 2003
- 伊藤恭彦「政治的判断力批判序説」『静岡大学法政研究』1997年 347-350頁

# 「ふるさと学習を通して、 地域を愛し、地域の課題解決に 取り組む児童の育成」





栃木県小山市立福良小学校 代表 福良小学校 校長

おかじまとしお中島利雄

1957年生まれ。1982年3月日本大学法学専攻科(法学専攻)修了。同年4月栃木県公立小・中学校教諭。(この間)1995年4月~2004年3月及び2014年4月~2016年3月栃木県小山市教育委員会勤務。2016年4月栃木県小山市立福良小学校に赴任。現在に至る。連絡は、栃木県小山市大字福良2246番地の同校まで。メールアドレスfukura@oyama-tcg.ed.jp

#### 第65回 読売教育賞から

### 【生活科・総合学習】

けているのが特徴だ。低学年では

道徳や図工などの授業にも結びつ

さらに、体験だけにとどまらず、

は、地域住民らが一役買う。

2010年にユネスコ無形文化遺 きれいに織れるとうれしい」と話 落合萌百華さん(11)は「姿勢を正ースター」を織り上げるためだ。 た。卒業記念品の「結城紬のコ機と呼ばれる織機に交代で座っ 験する。道具の提供や技術指導で るさと学習」に取り組んでいる。 だ。12年度から、地域の人たちと 産に登録された結城紬が地場産業 して織り続けるのは大変だけど、 などの役割をそれぞれ与えられ、 ともに結城紬作りを実践する「ふ 連の作業工程を6年間かけて体 学校がある小山市福良地区は、 平日の昼休み、6年生5人が地 1年生から6年生までの各学年 養蚕や糸紡ぎ、染色、機織り

生活科・総合学習 栃木県小山市立福良小学校

紙やお茶作りで知恵を絞る。 学び、4~5年生は桑を使った和カイコの飼育を通じて命の尊さを

中島利雄校長は「子どもたちは

ようとしていることも評価できる」だ。統合予定の小中学校で継承された。統合予定の小中学校で継承された。統合予定の小中学校で継承された。統合予定の小中学校で継承された。統合予定の小中学校で継承された。

考えられる子に育ってほしい」と

る。6年間の経験をもとに、自ら地元への誇りや愛着を感じてい

話している。

(戸丸由紀子)



ースターを交代で織る6年生ボランティアの指導を受け、コ

#### 【最優秀賞選評】

#### 市川 博 横浜国立大学名誉教授

「重要無形文化財の手法にできるだけ従って学ぶ『ふるさと学習』を他教科とも連携させ、創造的に取り組んだ。統合予定の小中学校で継承されようとしていることも評価できる」

## | 学区の特色

本校は、栃木県南部にある小山市の東部に位 置し、鬼怒川を境に茨城県と接している。1873 年(明治6年)創立、今年で144年目を迎える、 全校児童62名の小さな小学校である。この地域 では、河川流域に広がる低地での水田耕作ととも に、かつて小山市に合併する以前は旧絹村・旧 桑絹町に属し、その名の通り、古くから養蚕業と 農家の副業・家内工業としての高級絹織物「結 城紬」の生産で生計を立てている家庭が多かっ たようである。「結城紬」が1956年(昭和31年) に国の重要無形文化財に指定された際には、そ の技術保持者として茨城・栃木両県から3名ず つ認定されたが、栃木県側3名の中で2名が本 校学区内の住民であった。また、「結城紬」は、 1977年(昭和52年)に伝統工芸品産業の振興 に関する法律(伝産法)にもとづく「国の伝統的工 芸品」の認定を受けるに至ったが、栃木県側の 伝統工芸士の多くが本校学区内の住民であった。

しかし、化学繊維の普及や安い外国産の絹製品の輸入により、地場産業としての「結城紬」の生産は徐々に衰退し、それに伴い養蚕や紬関連の仕事から手を引く家庭が多くなり、学区内の家庭でも次々と兼業農家やサラリーマン家庭に変わっていった。現在、わずかに残る紬関連の従事者も児童の祖父母の年代かその上の年代であり、高齢化が著しく、県や市など行政面が以前から支援にあたっているが、結城紬の産業振興と後継者の育成が大きな課題になっている。

## 2 取り組みの経緯とねらい

本校では、「心豊かで助け合う子ども」「よく考

え自ら学ぶ子ども」「健康でたくましい子ども」の 3つを学校教育目標として掲げ、学校経営方針 の1つとして、「地域に開かれた特色ある学校づ くり」を推進してきた。

2010年(平成22年)11月16日に、「結城 紬」が「ユネスコ無形文化遺産」に登録されたこ とを機に、地域が当面している課題について児童 に考えさせようと、それまで本校で実施してきた 生活科や総合的な学習の時間の授業を見直し、 6年間一貫した教材として結城紬を中心に据 え、児童に郷土の伝統や文化を大切にする心を 育むとともに、地域の物的・人的な教育力を生 かした「ふるさと学習」として再構成することにし た。

そこで、「結城紬」の生産工程が元々複数の分業で成り立っていることから、児童の発達段階を踏まえて、原材料から製品化していくまでの工程を学年ごとに区切って系統立て、生活科と総合的な学習の時間の年間指導計画に位置づけていくことにした。

すなわち、6年かけて原材料である繭をとるための養蚕から、糸つむぎ、絣くくり、染色、機織りなど一連の作業工程を、指導者としての地元ボランティアによる人的協力と家庭の納屋に眠っていた用具の提供など物的協力を得ながら、重

#### ■ 卒業記念制作



要無形文化財の手法にできるだけ忠実にしたが い、作業工程を一通り学習し、最後に卒業記念 制作として、結城紬のコースターを作成すること にした。また、生活科・総合的な学習の時間と しての「ふるさと学習」と道徳の時間や特別活 動、他教科の授業との関連を図ることにした。

約1年かけて準備を進め、2012年度(平成24 年度)から「ふるさと学習」に本格的に取り組み始 め、今年度(2016年度)には5年目を迎えた。

## 生活科での指導にあたって

3

本校の生活科では、「自分と身近な人々、社会 及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や 自分の生活について考えさせるとともに生活上 必要な習慣や技能を身につけ、自立への基礎を 養う」ことを目標に、「具体的な活動や体験を通し て、気づきの質を高める」ことと「身近な人々と伝 え合う活動を行い、進んで交流し、自分のよさや 可能性に気づくことができるようにする」ことの2 つを努力点にしている。

このための具体策として「動植物の飼育を継 続的に実施」していく中で、体験したことをふりか えり、言葉で伝え合う活動を取り入れていくこと や地域の人材を活用していくことを図ることがで きるようにしている。

そこで、1・2年生は、生活科の中での「ふる さと学習」として、絹織物の原材料となる繭を生 産するために『蚕の飼育』を扱う。

まず、蚕のエサとなる桑の葉は、校内2箇所で 桑苗を育てたものを利用している。児童たちは、 良質の繭を作るには良質の桑の葉を蚕に与え続 けることが大切であることを、元養蚕組合の指導 員や養蚕農家としての経験のある地元ボランテ ィアから教えられ、桑苗を育てるための前提とな

#### ■ 桑の葉についての説明



#### ■ 蚕のお迎え式



る土壌改良や校庭の落ち葉を活用した堆肥など 有機肥料を施す段階から取り組むことになる。

蚕は卵からの孵化がむずかしいので、養蚕農 家向けに稚蚕を供給している地元JAの稚蚕指 導所から、3令(約3cm)に育ったものを無償で 提供していただいている。(昨年度までは、白い 繭ができる「春嶺・鐘月」という品種を約600頭 いただいていたが、今年度は、黄色い繭ができる 「黄繭」という品種も新たに加え、合わせて約 2000頭ほどの稚蚕提供を受けた)

毎年、稚蚕提供を受ける時期に合わせて、J A職員や飼育にかかわる地元ボランティアの皆 様を招き、全校で「蚕のお迎え式」を実施してい る。この様子は、地元メディアに取り上げられる ことも多い。

3令の稚蚕は、温度と湿度の管理が大切なの で、脱皮して4令(約6cm)になるまでの約1週 間近くは細心の注意が必要なため校舎内に特設 した蚕室で飼育する。

#### ■ 特製の蚕室と内部



その後さらに約1週間経ち、蚕が4令から脱皮 して5令(約9cm)に成長する段階になると蚕室 内では狭くなるため、また、蚕自体が温度や湿度 の変化にも強くなるので、オコカゴと呼ばれる竹 で編んだ平らなカゴの上に移して飼育する。

この約2週間は、蚕が旺盛な食欲を示して桑 の葉を食べるため、児童たちは朝登校後、昼休 み、下校前の1日3回、定期的に継続して蚕に 桑の葉を与え続ける。蚕が食べ残した枝の部分 や蚕の糞は児童が片付けて、桑苗の肥料にす る。昼休みには、児童が毎日の蚕の成長記録を つけるため、その日の天候、温度や湿度、物差 しや秤を利用して大きさや重さを測定し、気づい たことを記録するようにしている。この記録は、 次年度の飼育の際に役立つものになる。

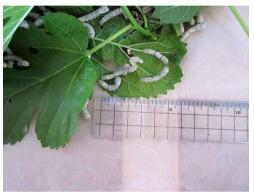
児童は蚕の飼育を通して、いろいろなことに気 づき、考えを深めていった。たとえば、耳を澄ま すと雨音のように聞こえてくるのは、たくさんの蚕 が桑の葉を一斉に元気よく食べているときである ことがわかった。ある程度食べ尽くすと、音が静 かになり蚕がお昼寝をすることもわかった。蚕に 対して、はじめは気持ち悪がっていた児童もいた が、次第に慣れ、やがて丁寧に世話をするよう になっていった。また、蚕のつかみ方も頭部のあ る上半身には呼吸をするための大切な気門があ るので、できるだけ下半身を持つことを学ぶよう になった。脱皮が上手にできない蚕は苦しんで 途中で死んでしまうので、そういう蚕を見つけて は、小さな指先で脱皮の手伝いをしてあげたり、 それでも死んでしまった場合は皆で悲しみ、校庭 の片隅にお墓をつくり葬るようになったりした。

5令に成長し、さらに1週間ほどすると、蚕は 繭づくりの準備に入り、桑の葉を食べなくなる。 繭づくりを促すために、「蔟」と呼ばれる四角い枠 を用意する。

蚕は蔟に這い上がり、気に入った枠の中に入 り、口から糸を吐き出しながら繭づくりをはじめ る、「上蔟」と呼ばれる行為に移る。ここまでの約 3週間、地元ボランティアが朝と夕方の1日2回 ほぼ毎日来校して児童の活動を支援してくださ っている。

児童は、毎日の観察から、蚕が繭になる前に 無臭のオシッコをすることも知った。十分に排尿 した蚕はきれいな純白の繭を作るが、そうでない 蚕の繭は薄汚れた繭になることも後でわかった。 今年度から新たに飼育し始めた「黄繭」という品 種の蚕は、蚕自体は他の品種と変わらずに白色













でありながら、上蔟になると黄色い糸を吐き出し、 その名の通り黄色の繭ができることもやってみて 初めてわかった。

上蔟をはじめて約1週間でほとんどの蚕が蔟 の中で繭を完成したのを見計らい、蔟から一つ 一つ丁寧に繭を取り出す「収繭」の作業を行う。 作業の指導助言には、JA職員と地元ボランティ アがあたり、児童の手によって取り出された繭 は、ブラシで毛羽を取り、重さを計り、色や形、 大きさによって、選別していく。毛羽は繭と同じ 成分なので再利用できるため、捨てないで別にと っておく。今年度は、2つの品種で合わせて 2000個余りの繭を収穫することができた。

なお、繭の一部は、そのまま放置して、蛾に 羽化していく様子を児童に観察させる。蚕の蛾 は、メスは羽が大きいのに対し、オスは羽が短 く、すぐに見分けがつくこと、羽があっても他の









蛾のように飛び回ることもなく、羽ばたきはする が、脚を使って動き回るだけであること、蚕と繭 との関係と同じく、「春嶺・鐘月」種と「黄繭」種 は、どちらも蛾の色は同じ白色だったが、交尾し て間もなく産みつけられた卵は、それぞれ白色と 黄色になることもわかった。

『蚕の飼育』については、1・2年生児童が毎 年2月に行われる学校開放日に「ふるさと学習」 の発表会の場で、保護者や協力していただいた 地元ボランティアを招き、その年度の取り組みの 様子を発表するようにしている。

# 総合的な学習の時間での 指導にあたって

本校の総合的な学習の時間「のびやかタイム」 では、「自分を取り巻くもの(人・自然・社会)に 自分から関わることのできる子ども」「自分なりの 方法で粘り強く追求する子ども」「自分の思いや 願いを実現しようとする子ども、「人や自然に感謝 と思いやりの心をもって接する子ども」の4つをめ ざす子ども像として位置づけ、育てたい資質・能 力として、「課題発見力」、「課題解決能力」、「コミ ュニケーション能力」、「自己表現力」、「自己評価 力」の5つを発達段階に応じて設定するとともに、 「のびやかタイム」としての3つの目標に対し、3 つの課題を努力点としている。そして、総合的な 学習の時間と各教科、道徳の時間、特別活動で の学習との関連を図るようにしている。

3年生から6年生の各学年の「ふるさと学習」 の中で、紬織物の制作の工程を位置づけていく。 各学年の作業工程については、1・2年生児童 とともに毎年2月に行われる「ふるさと学習」発表 会で、保護者や地元ボランティアを招き、その年 度の取り組みの様子を紬を着て、発表するように している。

#### ■ 総合的な学習の時間全体計画(抜粋)



3年生では、1・2年生が育てた繭から絹の 繊維を取り出すために『煮繭』と『真綿かけ』の工 程を地元ボランティアの指導の下で体験する。

『煮繭』は、1・2年生の生活科で「収繭」した繭を、さらしで作った布袋に入れ、水を張った寸胴や鍋の中に入れ重曹を加えて2時間ほど強火で茹で上げる作業で、熱の通りをよくするために児童は交代で布袋をかき回す。この作業で、児童は「春嶺・鐘月」品種の白い繭の煮汁はほぼ透明だが、「黄繭」品種の黄色い繭は煮汁も黄色くなることがわかった。

『真綿かけ』は、茹で上った繭を布袋から取り

出し、ぬるま湯の中に入れ、両手を使い少しずつ丁寧に広げて、中の蛹を取り除き、残った繭を袋状に延ばし(袋真錦)または四角形の木組みに延ばし(角真綿)、数枚ずつ重ねて乾燥させ、糸をつむぐもとになる真綿をつくる作業である。『煮繭』と『真綿かけ』の技術指導には、近接する県紬織物技術支援センターの指導員にボランティアとして協力していただいている。この作業で、児童は、繭を扱った手がスベスベになることから、調べてみると、繭には化粧品の原料となる成分も含まれていることがわかった。

4年生では、3年生のときに作った真綿から織

#### ■ 総合的な学習の時間 年間指導計画

		小山市	市立福良小学校						
学年・月	4月	5 月	6 月	7月	9月	10月	11月	12月	
3年	ガ 高荷神社に行こう【8時間】 イ ○高荷神社について調べる。(2) ダ ○高荷神社を訪問する。 (2) ン ○調べたことをまとめる。 (3) ス ○振り返りをする。 (1)				福良のまちじまん (2 6 時間) いちごについて調べよう 【8 時間】 ○いちごの種類や育で方の工夫について調べる。 ○いちごハウスを見学する。 (2) ○わかったことをまとめる。 (3)				
					煮繭・真綿掛けを ○煮繭について調	【 8 時間】 ベ、体験 1) て調べ、			
4年	イ 〇「き	)里をたずねて① をぬの里」の訪問計 子者の気持ちを決める くるテーマを決める	計画をたてる。(3 る。 (2	)	きぬの里をたずれ 〇「きぬの里」 7 〇「きぬの里」 7	でできる活動を考え (2)	. 5. )		
					\$3 E	さと学習(7時間)	イダン 一	こついて調べ、体	
5 年	イダンス (5)	軸の歴史について、 【1 城軸の起源につい 良地区と結城軸と で調べる 城軸の製品につい べたことをまとめ	5時間     ○	軸の生産工程につ の育実無掛けについ の簡真無掛けについ つむが、管巻きにつ つむ・単条、管巻きに 色や地糸管巻きに 機について調べる 機能についてま	いて調べよう 【30時間】 調べるべる。(4) 同間調である。(4) ついて調べる。 こついて。調(5) こついて(6)	<u>S レ学習(7 0 時間</u> 墨付け、繰しばり。 ○墨付け、繰しばり ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	の体験をしよう 【4時間】 の体験をする。 (4) う 3時間】	機織りの体験をしている。機織りの体験をしている。	2 時
6年	イ 〇見 ダ 〇修	旅行記をつくろう 学場所について高 学旅行記を作る。 学旅行記を発表す	べる。 (7)		12 ត់	<ul><li>○自分を見・</li><li>○自分の長</li></ul>		業を考える。(	(3) (3) 業に~

物に使う糸をとりだす『糸つむぎ』の工程を地元 ボランティアの指導の下で体験する。

『糸つむぎ』は、結城紬が重要無形文化財指 定の絹織物としての認定に必要な3要件の作業 工程の中の1つで、指先に唾液をつけ、真綿か ら少しずつ引き出すようにして糸をとり出し、撚り をかけずに一定の太さで糸をつむぐ作業である。 熟練を要するため、比較的高齢の女性による仕 事とされてきたことから、指導には、伝統工芸士 に認定されている学区内在住者にボランティアと して協力していただいている。

この作業で、児童は、糸を引き出すタイミング や指先への微妙な力のいれ具合がむずかしいこ とに気づき、指導者からアドバイスを得ながら、 コツをつかむと次第に上手に糸をつむぐことがで きるようになっていった。唾液を指先につけるこ とに抵抗のある児童には、容器に入れた水を用





意した。

5年生では、『絣くくり』と『染色』の工程を地元 ボランティアの指導の下で体験する。

『絣くくり』は、『糸つむぎ』とともに、結城紬が 重要無形文化財指定の絹織物としての認定に 必要な3要件の作業工程の中の1つで、織物に 絵柄や模様を出すため、つむいだ糸の染めない 部分に筆に含んだ墨で印をつけ、そこを糸で1筒 所ずつ強くしばりつけていく作業である。この作 業には力がいるので、男性による仕事とされてい たことから、指導には、伝統工芸士に認定され ている学区内在住者にボランティアとして協力し ていただいている。

この作業で、児童は、一定の長さに張った細 い糸に、できあがりの模様をイメージしながら墨 つけと、1箇所ごとに別の糸でしばりつけること が、気の遠くなるような根気のいる作業であるこ とがわかった。

『染色』は、糸を染料で染めあげる作業であ る。染料にはかつては天然の藍を使用していた が、現在は化学染料がほとんどを占めている。 指導には、学区内で昔から染色店を営んでいる 伝統工芸士にボランティアとして協力していただ いている。この作業で、児童は、染め終わり、 乾燥させてから、しばりつけた糸を1箇所ごとに 丁寧に解いていく仕事も根気のいる仕事である ことがわかった。

6年生では、紬織物としての最終段階である 『地機織り』の工程を地元ボランティアの指導の 下で体験する。

『地機織り』は、『糸つむぎ』『絣くくり』とともに、 結城紬が重要無形文化財指定の絹織物として の認定に必要な3要件の作業工程の中の1つ で、手と足、腰の力を必要とするため、比較的









若い女性の仕事とされてきた。

児童は、最も原始的な機織り機といわれる「地 機」に、自分が5年生の時に染色した糸を縦糸と 横糸に通し、足と手と腰の力を使って丁寧に織り 上げていく作業に取り組むが、小学生に幅の広 い反物を織るのには無理があるので、幅9cmほど の布地に織り上げるようにした。これだと、卒業 制作としてコースターに仕上がるようになる。糸 が細いので、わずか幅9cmでも1cmの長さを織る のに30分ほどかかる根気のいる作業である。指 導には、学区内在住者にボランティアとして協力 していただいている。

この作業で、児童は、手と腰と足を動かすタイ ミングがむずかしく、幅の短い織物でも両手に均 等に力を入れないと織目がきれいにならないこと や糸の太さが一定でないと途中で切れやすくな ることなどがわかるようになった。ボランティアの 指導により、何回も作業を繰り返すうちに、次第 にコツをつかみ、少しずつ上手に織れるようにな った。

# 各教科、道徳の時間、 5 特別活動との関連

~これまでの実践から~

生活科での蚕の飼育から総合的な学習の時 間での結城紬の数々の制作工程の学習を通し て、児童の考えや思いが深まったり、広がったり して、これまでに各教科等での指導といろいろな 関連づけを図ることができたが、その実践例の一 部を紹介する。

# (1) 5年生家庭科「桑の葉茶づくり」と「桑の 葉染め」

蚕が食する桑について、児童が調べていく中 で、桑の葉には数々の効用があることがわかり、







「お茶」として市販や飲用されていることを知り、 5年生の家庭科で「桑の葉茶づくり」に取り組 み、茶葉を来校者への飲用やお土産に提供した りしている。

また、桑の葉は緑色の色素を含み、草木染の 原料にもなることを知り、白地のTシャツを染色 し、各自で着用している。



# (2) 4年生図画工作科「桑を利用した和紙と絵 手紙づくり」

蚕が食する桑について、児童が調べていく中 で、桑の樹皮には、和紙の原料となるコウゾと同 じ性質があることがわかり、桑の樹皮を剥ぎ、煮 詰めてドロドロになった液体を細かい目の網で 漉して乾燥させ「桑の葉和紙」づくりを行い、さら にその和紙に絵の具で文字や絵を描いて「絵手 紙」づくりを行っている。



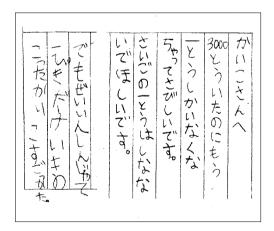
# (3) 各学年音楽科「紬のふるさと」歌唱指導

結城市出身の音楽家である宮本貴奈が、結城 紬の一つ一つの作業工程を歌詞にして作りあげた 「紬のふるさと」という曲の楽譜を、宮本の母校結 城東中学校から譲り受け、二部合唱にして、月1 回の全校音楽集会等で、歌えるようにしている。



# (4) 2年生道徳の時間「わたしのだいじなあげは」

自然や動植物を大事に育てようとする心情を 育てるため、教材となる資料(学研「みんなのどう とく2年生」所収)と蚕の飼育とを関連づけて児 童に考えさせる。児童にとって、繭から蛾が羽化 する際に、蛹からうまく抜け出せずに、脚を折る 蛾がいたり羽化からわずか1週間ほどで、交尾 を終えると何も食べずに死んでしまうことなど、 観察体験から学んだことで内面的自覚を図り、多 くの児童に価値の深まりが見られた。



(5) このほか、今年度は黄色い繭も生産できた ことから、児童の発案で、繭の殻を利用したアク セサリー作りにも取り組んでいる。

# 6 苦心談・エピソード

養蚕と結城紬を軸に、「小学校の6年間をか け、自分たちで蚕を飼育して繭をとり、その繭か ら自分で糸を紡ぎ、その糸に模様をつけるため染 色し、自分で作った糸と機織り機を使い、自分で 織って作品に仕上げる」という構想での「ふるさ と学習」として、本校ならではの地域の特色を生 かした教育活動を推進していく上で、当初は、 実物の収集と指導者探しに時間を費やした。や るからには、「できるだけ忠実に実物を使用して、 地元在住者をボランティアで指導者にしての体 験学習」が望ましいと考え、学校側から地域に文 書で依頼し、また、人づてに情報を募った。地 元で養蚕業を営む農家がなくなって久しいが、 幸いにも納屋の奥に使われなくなった用具が数 多く残っていて、複数の方々から子どもたちの教 材として、無償で提供していただくことができた。 70歳代以上の方々の中には、実際の養蚕に関 わっていた経験者もいて、指導者として協力して いただくことができるようになった。また、現在も 地元で結城紬に現役として従事している方々は 比較的高齢者が多いが、各工程の指導者を確 保し、協力していただくことができた。学校と地 元住民や関係機関との連絡調整には、栃木県教 委が推進している地域連携教員の制度によっ て、本校の担当教員が活躍している。

できれば、蚕の飼育に必要な稚蚕もJAからの 提供ではなく、自前で用意できると理想的と考え ている。このため、児童が育てた繭の一部は、 煮繭せずにそのまま放置して蛾に羽化させ、交尾 して卵を産みつけさせることには成功することが できた。しかしながら、卵から孵化させる技術は とてもむずかしく、自分たちの手で稚蚕を得るに は至っていない。

# 7 むすびに

2012年度から本格的に始まった本校の「ふるさと学習」の取り組みは、今年度で5年目を迎える。原材料となる養蚕から製品化までの結城紬の作業工程を体験を通して具体的に一通り学んできた児童が今年度6年生となった。各学年での「ふるさと学習」が終わるとふりかえりの時間をとっているが、学年が上がるにつれ、体験の積み重ねや周囲との関わりの中で、個々の児童の考えが深まってきたことがわかる。2月に行われている発表会でも年々内容が充実していくのが楽しみである。

本校ならではの特色ある教育活動として、ここまでできるようになったのは、県の紬織物技術支援センターが近くにあることや、かつて養蚕業に関わった方々や結城紬の作業工程の各部門の技術を保持している伝統工芸士の方々が学区内に多く居住していることにより、協力が得られることが大きい。これからも、地域との関係を大切にしていかなければならない。

本校は、児童数の減少により、周辺にある梁・延島の2つの小学校とともに、3つの小学校を学区に持つ絹中学校とともに、今年度末をもってそれぞれが閉校となり、平成29年度からは、1つの義務教育学校として再出発する予定である。このため、既に2年前から、他の2つの小学校でも生活科や総合的な学習の時間を使っての養蚕や結城紬の学習に取り組み始めている。さらに、中学校でも2年前から、市、地元商工会、着付けボランティアの協力を得て、総合的な学習の時間の学習の中で、生徒全員が結城紬の着付け体験を導入している。今後、義務教育学校化に伴い、小中一貫教育としての9か年を見通した学びの中で、結城紬を軸とした「ふるさと学習」はさら

に進化していくことであろう。

なお、この「ふるさと学習」の取り組みの様子については地元メディアによる紹介のほか、本校の「学校だより」や「ふるさと学習通信」での配付、および本校の「ホームページ」等で随時、情報発信するようにしている。

※福良小ホームページ http://www3.oyamatcg.ed.jp/~fukura/

# 参考文献

- ●「小山市史 民俗編」(1978年 小山市)
- 「桑摘み唄と小山の養蚕」(2010年 小山市 立博物館)
- ●「本場結城紬ユネスコ無形文化遺産登録1周 年記念誌」(2011年 小山市)
- ●「本場結城紬学習ブック」(2014年 小山市 教育委員会)

# 不登校対策 「みんいく(睡眠教育)」を 通じた学校づくり





大阪府堺市立三原台中学校 代表 三原台中学校 教諭

まだてつ お木田哲生

1983年生まれ。2006年大阪体育大学体育学部体育学科卒業。2006年大阪府堺市立三原台中学校勤務。2008年教職3年目の24歳で「日本一若い生徒指導主事」となる(市教委談)。その後7年間、同校の生徒指導主事を担当。2015年より大阪教育大学連合教職大学院(高度教職開発専攻)に内地留学。現在に至る。連絡は、大阪府堺市南区三原台1-12-1の同校まで。

# 第65回 読売教育賞から

# 【児童生徒指導】

# 生徒と面談する木田教諭



が、午前0時以降に就寝していた。30日以上欠席した生徒の8割以上約2倍に上った。調査すると、年間生徒の割合が5・3%と全国平均の生徒の割合が3014年度、不登校の同校では2014年度、不登校の

# 「眠育」で生活のリズム

10月中旬の生徒相談室。無料通話10月中旬の生徒相談室。無料通話で考えてみよう」と語りかけた。太で考えてみよう」と語りかけた。なで考えてみよう」と語りかけた。なで考えてみよう」と語りかけた。なで考えてみよう」と語りかけた。なで考えてみよう」と語りかけた。は原則、生徒全員と面談する。無料通話10月中旬の生徒相談室。無料通話

児童生徒指導 堺市立三原台中学校

てたい」と意気込む。

(児玉圭太)

の解消だけでなく、学力向上に役立り組む。木田教諭は「眠育を不登校も巻き込み、地域ぐるみで眠育に取

木田教諭が中心となり、睡眠と不を仰いだ。15年度から、睡眠不足が脳に与える影響や、朝食の重要性などを記した独自の教材を作り、総合学習の時間に指導を行った。生活記録をもとに面談などで個別に助言も録をもとに面談などで個別に助言もなどを記した。1年後には、不登校など出席日数の少ない生徒49人中、16人の欠席が減った。

活動の広がりも評価できる」
活動の広がりも評価できる」
見と情報を反映させ、実践の質の高見と情報を反映させ、実践の質の高見と情報を反映させ、実践の質の高見と情報を反映させ、実践の質の高りを指している。地区の学校への対象である。

# 【最優秀賞選評】

河野 義章 東京学芸大学名誉教授

「実態把握、教材作成、授業実践、 それぞれの段階でPTAや専門家の 意見と情報を反映させ、実践の質の 高さを担保している。地区の学校へ の活動の広がりも評価できる」

# はじめに

三原台中学校は、堺市の南区、泉北ニュータウンに位置し、緑豊かな環境である。駅付近に府営団地が密集する一方で、近年は新しいマンションが建設されてきている。さらに、旧来からの保護者や児童が生活する地域も存在し、様々な生活スタイルの子どもたちが通学している。また外国にルーツを持つ生徒は全体の5%を占める。生徒数は17学級550名、教職員数約40名の中規模校である。

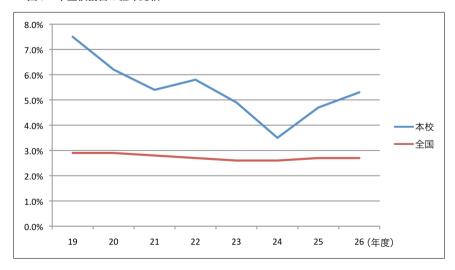
10年ほど前に大きな「荒れ」を経験した本校は、その後徐々に落ち着きを取り戻すが、近年、「頭痛」「腹痛」「なんか、しんどい」といった、いわゆる「体調不良」という理由で欠席する子どもたちが増加してきた(25年度、26年度)。本校の全校生徒に対する不登校生徒(年30日以上欠席)の割合は、26年度が全国平均2.76%なのに対し、本校は5.3%、

さらに25年度4.7%、24年度3.5%、23年度4.9%、22年度5.8%、と毎年高い水準にあ

った(図1)。本校では近年、「不登校生数減少」を生徒指導の重点目標に掲げ、毎日の家庭連絡、家庭訪問、スクールカウンセラーや諸機関との連携、保健室や相談室への別室登校、楽しい学校づくり、わかる授業づくり、など様々な取り組みを行ってきた。しかし、子どもや保護者との関係は良好になるものの、不登校改善への抜本的な成果が表れなかった。

そのような中、テレビ放送「NHKクローズアップ現代(平成27年1月8日放送)」で、「不登校と生体リズムの関係」に関する研究をしている三池輝久医師(熊本大学名誉教授)の存在を知った。内容は、近年のコンビニやメディアの普及、仕事体系の変化などにより日本全体の夜型化が進む中で、睡眠時間の減少、夜ふかしといった生活習慣の乱れが子どもにも及び、それらが脳機能低下を引き起こしその結果、不登校をはじめとする諸問題が起きているといったものだった。すぐに三池医師に会いに行き、直接指導を受ける中で、本校での取り組みへの協力を快諾いただいた。

### ■ 図1 不登校割合の経年比較



# 主題設定の理由

三池医師によれば、子どもたちの睡眠の乱れ は認知脳機能の低下をもたらし、不登校の多く は、そのような睡眠の乱れた生活を送ることで発 症する「小児慢性疲労症候群」であるという。 小児慢性疲労症候群とは、「通常の診察や検査 では明らかな原因が見いだせず、30日以上続く 持続性または反復性の慢性疲労である。この疲 労状態は休息により改善せず、以前までの学校 生活、社会生活が送れなくなる」とされている (三池輝久『子どもの夜ふかし脳への脅威』集 英社新書2014など)。具体的な症状としては、 「朝起きられない」「だるい」「低エネルギー」「昼 から元気になる」「勉強が手につかない」などで ある。これらの症状は本校の欠席がちな生徒を 中心とする多くの生徒たちに見られるものだった。

そこで、平成27年2月に本校における不登校 の生徒たちの睡眠状況を調査した。この調査に よると全校生徒の7割が深夜0時までに寝てい たのに対し、欠席の多い子どもに絞ると8割以 上が深夜 0 時以降に寝ていた(図 2)。また「毎 日、同じぐらいの時刻に寝ていますか」という質 間に対しては、全校生徒の約8割が肯定回答し ているのに対し、不登校生になると肯定回答は1 割となった(図3)。

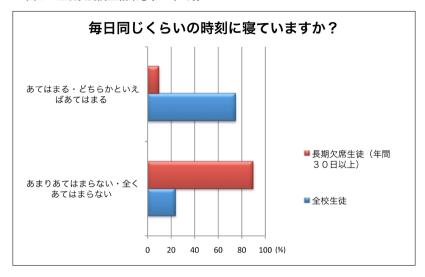
また、普段毎日登校している生徒の中にも、 朝から机に突っ伏している、イライラしていてよく トラブルになる、頻繁に保健室登校する、授業 中寝ている、登校の行き渋りがある、などの行動 が見られ、本校の調査によればこれらの生徒の 多くが夜更かしや短時間睡眠といった生活を送 っていた。

以上の実態を踏まえ、不登校をはじめとする 生徒たちの諸問題の主原因を「小児慢性疲労症 候群」を引き起こす「睡眠の乱れ」であると予 測し、子どもたちの睡眠への意識を高め生活習 慣を改善する「みんいく (睡眠教育)」に取り組 みはじめた。子どもたち一人ひとりが自分の睡眠 をはじめとする生活習慣を振り返り改善すること は、健康はもちろん学校や日常生活を充実させ





# ■ 図3 睡眠状況調査結果②(27年2月)



る術であり「自分を大切にすること」に他ならな い。そのため、めざす子どもの姿を「睡眠を通じ て自分を大切にするとともに、その後も継続的に 実践できる子ども」とした。難しいとされる中学 生の睡眠改善に向けて、専門医との連携(教医 連携)を軸に、みんいく授業、教材開発、個別 面談、家庭・地域・関係機関との連携などに重 点をおいて研究を推進することとした。

# 実践活動

# 1. 睡眠・朝食調査

校内の「みんいく」実践の中で、指導の起点を 「睡眠・朝食調査」とした。睡眠・朝食調査で 実際の睡眠状況を確認すること、言い換えれば、 自分の「現実」を捉えることが「みんいく」のスター トとしたのである。

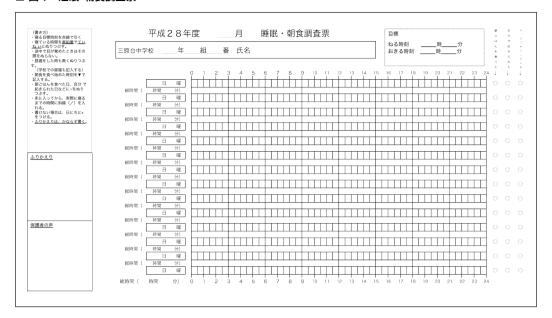
子どもたちの睡眠状況を確認するため、2週間 にわたって自分の睡眠および朝食の状況を睡眠・

朝食調査票(以下、睡眠票と略)に記入する(図 4)。平成27年度については、学期の始まりと 終わりの時期に睡眠調査を実施し、全学年にお いて年間で6回行った(写真1)。実際に寝てい る時間を黒くぬりつぶすだけの簡易なもので、慣 れれば1分ほどで書くことができる。学校での昼 寝もぬりつぶし、また夜中に起きたりした場合は 空白にしておく。この睡眠票により、普段意識す ることが少ない「自分の睡眠」を可視化すること ができる。

### ■ 写真 1 睡眠票を記入する



# ■ 図4 睡眠·朝食調査票



# ■ 図5 チェックポイントシート

# 睡眠・朝食調査票のチェックポイント

- 1. 寝る時刻は遅くないか?
  - ➡ 遅くとも0時までに寝る。
- 2. 睡眠時間は足りているか?
  - → 中学生が必要とされる時間は8~9時間。
- 3. 寝起きの時刻が同じであるか?
  - → 同じ時間での睡眠と、学力や不安感・集中力・やる気などが深く関わっています。
- 4. 休日、遅くまで寝ていないか?
  - → 平日よりも1時間半以上多くねる人は、平日の 睡眠不足と考えます。
- 5. 授業中や帰宅後寝ていないか?
  - → 「昼間に眠たくなる」ことは、寝不足のサインです。
- 6. 睡眠の分断や中途覚醒はないか?
  - → 不安などが睡眠の質を低下させます。
- 7. 朝食はとっているか?
  - ➡ 睡眠不足では食欲はわきません。
- 8. 自分で起きているか?
  - → 自立の第一歩です。睡眠をはじめとする生活 をコントロールする力が身につきます。

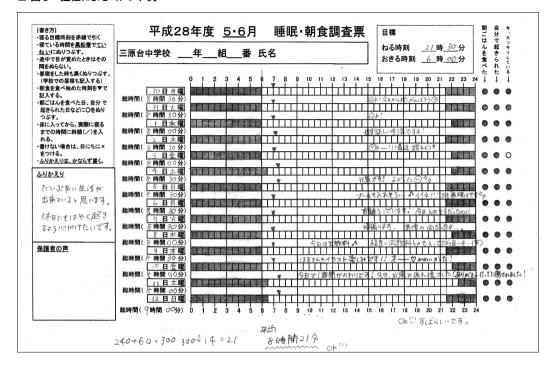
また睡眠票には、「睡眠の可視化」に加え、「朝ごはんを食べた」「自分で起きられた」「今、スッキリしている」の三項目の質問を設けている。どの項目とも睡眠と密接な関係にあり、睡眠とともに意識したい内容である。2週間後書きあがれば、まずは子どもたち自身が「チェックポイントシート(図5)」をもとに振り返り、自分の課題に「気づく」ことを促している。

一人ひとりの睡眠票は、「みんいくファイル」

## ■ 写真2 眠育ファイル



# ■ 図6 担任によるコメント例



(写真2)にファイリングし、これまでの自分の睡 眠履歴として確認できる。さらに家庭の協力が欠 かせないことから、睡眠票には保護者がコメント を記入する欄が設けられている。調査票は、教 員と保護者との普段の会話や懇談などの場にお いて、子どもの睡眠について話すツールにもなっ ている。

担任は、子どもたちの睡眠票を見ながら適宜 コメントを記入したり、声をかけていく。コメント は教師が「気にかけている」ということが伝わり、 子どもたちの励みとなる。コメントの例として、部 活動の運動部に入っている子どもに「筋肉が一 番成長するのは10時~深夜2時」と励ます教師 や、睡眠票を雑に塗っている子どもに「ていねい に塗ってね。心を落ち着かせて」と記入する教 師、朝起きるのが早い子どもに対して「起きるの が早いね。睡眠時間は足りてる?」などのコメン トを書いたりしている(図6)

睡眠朝食調査について、平成27年度末に子 どもたちへアンケート調査を実施したところ、「睡 眠・朝食調査は睡眠を改善するのに役立った」 の質問に対して68%の肯定回答があった。担 任からの報告では、「子どもたちは普段『時間』を 意識しながら生活しておらず、睡眠調査をするこ とで、『時間』を意識して生活するようになった」と いうことだった。調査票を「書く」という行動が子 どもたちの睡眠改善に一定の効果があることを 確認し、28年度からは月に1回実施する運びとな った。

# 2. みんいく教材「睡眠を考える本」の作成

平成27年度、「みんいく」を実践していく上で、 子どもたちに授業やその他の活動を通じて「何 を」伝えていくのか。教科と違い教材がない中で、 自分たちで「みんいく」の柱ともいえる教材の作成 に取り組んだ。作成にあたって、平成27年3月 に校内でみんいく実行委員会を設置した。みんい く実行委員会はPTA役員とも会議を重ね内容を 検討し、監修を三池輝久医師に依頼した。みん いく実行委員会のメンバーは、管理職、首席(主 幹教諭)、指導教諭、養護教諭、生徒指導主 事、保健主事、学年主任、研修担当である。

原稿作成にあたっては、三池医師をはじめとす る学者の著書や論文に合わせて、厚生労働省健 康局『健康づくりのための睡眠指針2014』を参 照にし、教材としてふさわしい知識や言葉の正確 性を確保した。最初に出来上がった原案から、 簡潔明瞭になるよう訂正を繰り返す中で、できる だけ文章量を減らせるように図表の工夫や、細 かいところは教師が言葉で伝えることとし、「教師 用」の教材も作成することとなった。

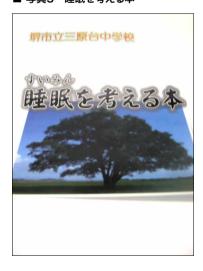
また、本校の「みんいく」はPTAと協同で進め ているため、原稿作成も共同で取り組んだ。PTA 役員の中には、身近に不登校で苦しむ家族がい る体験から、涙ながらに取り組みの必要性を語る 姿もあった。PTAとの会議の中で「写真を多くし 楽しい紙面になれば」という意見のほか、「スマホ への指導を強化してほしい」という意見が上が り、眠れない原因の一つとして、大きく取り上げ る運びとなった。約1か月半の作業を経て、「睡 眠を考える本」が完成した(写真3)。

5月20日のみんいく授業で全校生徒に配布し 授業を行った。終了後の教員へのアンケートでは 「ある生徒が冊子を読んで『寝るっていうのは結 構色々考えなアカンのやなぁ』と発言しました」 「教師も勉強になった」「途中から、自分のリラッ クス方法や、睡眠のことで悩んだ経験などを話し て、生徒が熱心に聞いてくれた」などの意見があ った。

平成28年度は、新たな教材として「新・睡眠 を考える本」を作成した(写真4)。27年度途中 から校区内の小学校でもみんいく授業を実施す ることとなり、小学校でも使用できる教材の開発 をする必要が出てきた。そこで、後述する「みん いく地域づくり推進委員会」で作成にとりかかっ た。

作成メンバーは校区内の幼保こども園、小学 校、中学校の教員に加え、PTA、保健センタ ー、医者、NPO、企業役員といった多様なメン

■ 写真3 睡眠を考える本



■ 写真4 新・睡眠を考える本



バーである。「新・睡眠を考える本」の最大の特 徴は、小学校1年生から中学校3年生までの9 年間で系統的に睡眠について学習できるよう内 容構成されている点である。

28年度は「新・睡眠を考える本」を使用し、 本校や校区内の小学校で授業をするとともに、 市内のいくつかの小学校でも授業が行われてい る(写真5)。また、テレビや新聞などで紹介され たこともあり、全国の学校や一般の方々から「ほ しい」という問い合わせが相次ぎ、3年分を見越 して作成した2500冊は、1学期が終了した時点 で在庫がなくなった。

# ■ 写真5 小学校でのみんいく授業



# 3. みんいく授業

平成27年度は学期に1度、年間で計3回、 担任による「みんいく授業」を行った。授業では 「睡眠を考える本」を使用しながら睡眠に関する 知識を学ぶとともに、一人ひとりの「睡眠・朝食 調査票」を振り返り、自分の課題や改善策を考え ることが基本である。睡眠の乱れを引き起こす 「夜のスマホやテレビ」、そして睡眠の乱れが心、 体、学習に大きく影響を与える事実などを確認す る中で、子どもたち自身が「気づく」ことを目標に 取り組んだ。子どもたち一人ひとりが自分なりの

### ■ 写真6 3年最後の授業



答えを持つことが、その後の人生においても継続 的に実践していくことにつながると考えた。

3学期の3年生の授業では、これまでの自分 の睡眠票を比べながら、自分の睡眠の変化を分 析するとともに、これからの睡眠について考えた。 一人ひとりが自分の睡眠の課題を発表するとと もに改善策についても語った(写真6)。子どもた ちの意見は「受験勉強でだんだんと寝る時間が 短くなっていった」「みんいくをやったおかげで、 寝る時間が長くなった」など様々だった。授業の 最後には、これからの長い人生において自分と家 族を大切にする睡眠に取り組んでほしいと伝え た。

平成28年7月、中学2年生の国語科ではプ レゼンテーションについて学習する際に、「地域 の人たちにみんいくの魅力を伝えよう」という設 定のもと、子どもたちがみんいくを題材としてプレ ゼンテーションに取り組んだ(写真7、8)。これ まで学んできた「みんいく」を教える立場に立つこ とで、より理解を深め、みんいく実践者として成 長している。以下、子どもたちの学習後の振り返 りを紹介する。

● 今回、改めて考え直したことは「早く寝る」と

# ■ 写真7 プレゼンの準備



かではなく、もちろん早く寝ることも大切です が、自分の体を大切にしようということです。 その方法の一つが「みんいく」なのです。自分 の母親がお腹を痛めて生んでくれた自分自身 を、大切にしたいと思いました。

- 自分は、これまでゲームをしてずっと起きるの が遅かったけど、最近は早く寝ることを心がけ 12時までに寝るようにしています。すると自 分で起きれるようになったので、効果を実感 しています。
- 単純計算で、人間の生涯を100年だとする と、36年ぐらい寝ていることになる。 もったい ないと感じる人もいるかもしれないけどやっ ぱり睡眠は大事なんだと実感できる。そんな 素晴らしい命の授業が眠育なんだと思う。

# ■ 写真9 参観者たち



### ■ 写真8 プレゼン本番



- 今、ぼくは「みんいく」が全国じゃなくて全世 界に広まってほしいと思います。
- 将来のオリンピックでも、みんいくのおかげで 今まで以上に元気が出て、日本人選手が活躍 する姿を見てみたいです。そしたら世界にもみ んいくが広まっていって、この地球全体が明る く元気な星になってほしいと願います。

7月11日のプレゼン本番では、保護者をはじ め、地域の方や教員など多くの参観者があり(写 真9)、子どもたちは緊張の中でも堂々と自分たち がやってきた「みんいく」を紹介した。

# 4. みんいく面談

平成27年5月から睡眠・朝食調査などで明 らかとなった睡眠が乱れている子どもなどに対し て個別の面談を行った(写真10)。子ども、保 護者、教員の三者面談を基本とし、可能な限り 事前に三池医師に睡眠票の診断を受ける。面談 は子どもの生活状況を広く聞き取り「安心感のあ る関係構築」を目標に行い、その関係の中で三 池医師の診断を提示しながら睡眠の改善に向け て話し合う。

面談をはじめた当初、睡眠の大切さや三池医

師の診断を伝えることを中心に行っていたが、ほ とんど改善が見られなかった。試行錯誤する中 で、安心感を醸成するカウンセリング理論をベー スとした面談に切り替えることで、改善が見られ はじめたのである。子どもたちの安心感を把握す るための「安心感測定シート」をスクールカウン セラーと共同開発し、「学校」「勉強」「友人関係」 「家族」など、子どもたちがどこに安心し、不安 を感じているのかを確認しながら面談を進めた。 その中で、睡眠の改善とともに登校改善や遅刻 改善、暴力などの行動が改善していく子どもたち が現れてきた。

# ①2年男子生徒A

2年男子生徒Aは、4月当初は登校渋りがあ り、ときに無断欠席があった。母親が無理やり 車で連れてくることが多く、その度にケンカとなり 母親に対する暴言や暴力が頻繁にある。生徒A は運動部に所属し、学校の勉強も熱心に取り組

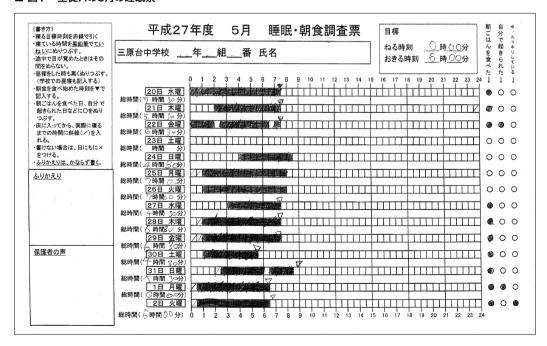
# ■ 写真10 面談風景



み、放課後は塾に通い、塾から帰ってきても塾 の宿題を深夜1時ごろまで行っている。5月の調 査では、平均深夜1時~朝7時半の睡眠で、日 によって寝る時間がバラバラだった(図7)。7月 上旬、母と本人に対して面談を行い、このとき本 人から「我を忘れるほど腹が立って暴力をふるう ことがある」「なんかしんどい」と語られた。三池 医師の診断を伝えながら、具体的に可能な睡眠 改善の方法を一緒に考えた。

その後、睡眠改善が進み、7月中旬には平均 0時の安定した入眠となり、その頃には、欠席が

# ■ 図7 生徒Aの5月の睡眠票



ほとんどなくなり、自ら登校するようになっている。 また、家での暴言暴力も見られなくなった。

# ②3年女子生徒B

3年女子生徒Bは1年次より、1月の半分を欠 席する状態が続いていた。登校しても遅刻が多 く、無気力、低エネルギー、毎日のように保健室 に訪れ休憩する。腹痛や頭痛を訴えることが多 く、過呼吸のような発作が出ることもあった。部 活動は運動部に所属し、見学をすることが多い。

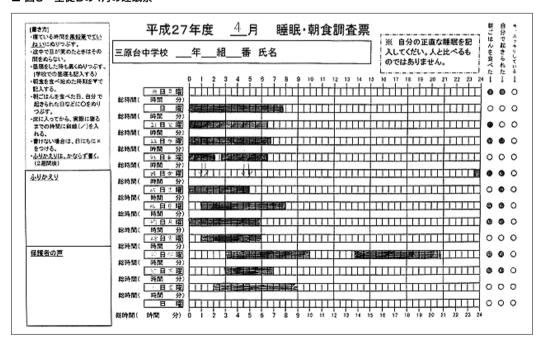
7月中旬、生徒Bと面談する中で、家庭では、 生徒Bが家事全般を受け持っているため、入眠 が2時3時となることが多く「朝の時間と部活動 の時間が特にしんどいと感じる(図8)。また、い つ欠席するか自分でも不安になる」と答えてい る。スクールカウンセラーと共同開発した「安心 感測定シート」によると、やはり「家庭」「体」とい った項目で不安が高かった。仕事で忙しい保護 者とも連携を取りながら、夕食などの時間を調整

し、できるだけ早く寝るよう具体的な生活を一緒 に考えた。

その後、少しずつ睡眠が改善され2学期の調 査では、以前の深夜2~3時だった入眠が、0時 ~1時に改善し、さらに日によってバラバラだっ た入眠時間が安定した。2学期からは欠席が減 り、10月は5日の欠席、11月は1日の欠席もなく 登校している。また、遅刻もほとんど見られず、 これまでの、低エネルギーの様子が見られない。 体育大会などで元気に活躍するなど、周囲の教 員を驚かせる。さらに保健室に来ることがほぼな くなり、発作も出ていない。

冒頭でも述べたように睡眠の乱れは、頭痛や 腹痛、だるいなどの症状を引き起こし、そのよう な子どもたちは保健室へ来室する可能性が高 い。そのため養護教諭が面談を実施する機会が 多く、普段から子どもたちの睡眠をはじめとした 情報を把握することが肝要となる。そこで本校で は「エスワープ眠気尺度」などを組み入れた独自

# ■ 図8 生徒Bの4月の睡眠票



# ■ 図9 保健室来室カード



の「保健室来室カード」を作成し、来室した子ど もたちに自然とみんいく面談ができるよう工夫し ている(図9)。

# 5. 保健委員会での取り組み

子どもたちの取り組みとして保健委員会の取り 組みを紹介する。平成27年度の保健委員会で は、「自分たちの睡眠を見直そう」というテーマを設 定し、全校生徒に睡眠への意識を高めるための 活動に取り組んだ。プリントで周知するとともに、 校舎内に独自に作成した「睡眠クイズパネル」を 掲示した(写真11)。睡眠に関するクイズの答え はひもを引っ張ると現れる仕組みになっている。

# 6. 専門医による特別授業

三池医師から子どもたちへの特別授業が10 月に実施された(写真12)。体育館に全校生徒 が集まり、さらに保護者や地域住民にも参加を 呼びかけ、子どもと大人が一緒に学ぶ機会とな

# ■ 写真11 睡眠クイズパネル



# ■ 写真12 特別授業の様子



### ■ 写真13 保護者も参加



った(写真13)。これまで子どもたちは、本校の みんいくで度々登場する三池医師に関して、名前 や写真でしか知らなかったので、実物に会えるこ とを楽しみにしていた。「ねむるキミに未来がひら く」と題し、規則正しく眠ることが今の生活にどの ような影響があるのかを医学的根拠をもとに丁 寧な説明があった。

講演会終了後、PTAのお母さんから三池医師 に「子どもの命を守るのは親の役目。覚悟して睡 眠について考えていきたい」とお礼が述べられ、 子どもたちは真剣に聞き入っていた。

# 7. 地域でみんいくを推進

平成27年度、これまで続けてきた保幼小中 高連携を母体に、「早寝早起き朝ごはん推進委 員会」が組織された(平成28年度からは「みんい く地域づくり推進委員会」に改名)。乳幼児期の 睡眠は保護者の生活の影響が大きいことや、小 学校からはゲームやスマホ、高学年以上、中学、 高校になるとさらに塾や部活動などにより生活 が乱れる現状を確認した。

子どもたちの睡眠の改善には乳幼児期からの 継続的な各学校園での指導に加え、地域や保護 者とともに活動することが効果的だと考え、青少 年健全育成協議会役員、保健センター保健師、

大学教員、教育委員会指導主事、地域住民、 PTAをメンバーに迎え活動を行った。毎回の会 議では30名程が参加し校区全体へのアンケー ト調査や、つうしんの発行、啓発ポスター作成 (図10)、地域全体での講演会や実践報告会の 実施などを行った(写真14)。

さらにメンバーは各自、自治会の広報誌への 掲載、保健センターで実施される母親への生活 指導、教育センターで教員研修の実施、地域の マンションやコンビニなどでの啓発ポスターの掲 示、健全育成協議会主催の行事での呼びかけ、

# ■ 図10 保幼グループが作成したポスター



# ■ 写真14 会議の様子



保護者どうしでの啓発、などに取り組み、委員会 のメンバーが自主的に行う活動の一つひとつ が、各学校園の子どもたちや保護者、教員の意 識を変えつつある。

# 8. みんいくリーダー研修会

平成27年度の中で、堺市内の保幼こども園 や小学校、中学校の中から「みんいくを教えてほ しい」という要望があり、平成28年度から本校 において「みんいくリーダー研修」を実施すること となった。1回1時間半の研修を年間7~8回の 継続した形で計画し、三池医師、それに福井県 の小学校を中心に眠育を実践してきた前田勉氏 (NPO法人里豊夢わかさ理事長)を講師に実施 している(写真15)。受講者は市内の保幼こども 園、小学校、中学校の教員や地域住民、PTA、 堺市教育委員会などの33名である。

7月末で3回目の研修が終了したが、噂を聞 いた受講者以外の小中学校の養護教諭などが 飛び込み参加するなどして、会を追うごとに人数 が増えている。研修会後のアンケートには、「これ

# ■ 写真15 研修会の様子

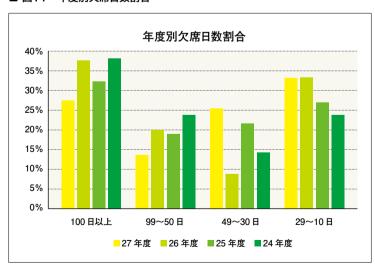


まで睡眠の重要性は感じていたが、理論的なこ とを学んで確信が持てました」などのコメントが 多数あった。

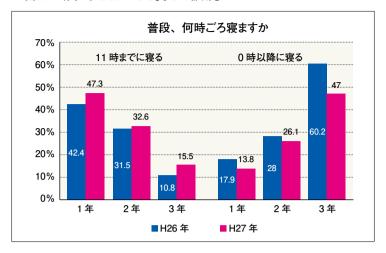
# 実践の成果と課題

ここまで成果として、平成27年度末、不登校 生徒ならびに欠席がちな生徒49名のうち16名 (32.6%) において明確な登校改善がみられた。 以上の49名においては全て「みんいく面談」を 実施した。図11は平成24年度~27年度の本 校における子どもたちの欠席日数の割合をグラフ





■ 図12 堺市「子どもがのびる」学びの診断①



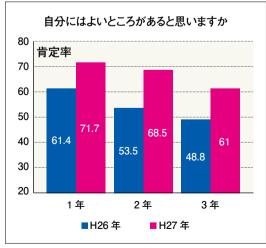
にしたものである。みんいくを始める前の24年度 から26年度においては、いずれも欠席する子ど もたちのうち、100日以上休む子どもが一番多い が、みんいくを行った27年度については29日~ 10日が一番多くなっており、全体として欠席日 数が減っている。

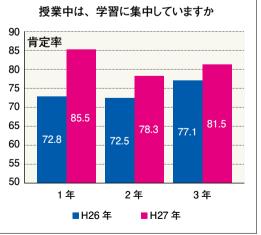
また先述したように、保健室に来室する子どもた ちを中心に頭痛、腹痛、なんかだるいといった症 状が改善していったことも成果としてあげられる。

また、『堺市「子どもがのびる」学びの診断』 によれば、全学年において「11時までに寝る」 子どもが増加し、「0時以降に寝る」子どもが減 り、学校全体で睡眠が改善している(図12)。 さらに同じ調査において「自分にはよいところがあ ると思いますか」という質問に対して、全学年で 10ポイント以上の同復が見られ、「授業に集中し ていますか」という質問に対しても全学年で改善 している (図13、14)。

■ 図13 堺市「子どもがのびる」学びの診断②

■ 図14 堺市「子どもがのびる」学びの診断③





もちろんこれらの成果全てがみんいくによるも のだとは言えないが、27年度は本校でみんいく 以外に新たな取り組みはなかったことを考える と、みんいくによる成果が大きいと考えられる。

今後の課題として、第1に睡眠の改善に向け て、乱れてからの関わりだけでなく、乱れる以前 やできるだけ早い時期に支援することに軸足を移 していきたい。これまでの研究により、教師の関 わりが早ければ早いほど睡眠改善が実現してい る。予防的支援を行うためには、より多くの教員 が子どもたちの睡眠改善に関わることが必要とな

第2に子どもたちの睡眠改善には、保護者や 家庭の協力が重要なことから、継続的に家庭や 地域社会へみんいくの意義や成果を発信するこ とが課題である。

# 終わりに

平成28年4月、三池医師の地元、熊本県で 大地震が発生し甚大な被害があった。多くの方 が被災した中、熊本に住む三池先生への励まし の手紙を書こうと生徒会が企画し新2年生、3年 生のほぼ全員が三池先生へ手紙を書いた (写真 16)。「どうか元気を出してください」「三池先生 が教えてくれた睡眠を守っています」「三池先生 しっかり寝てください」など、子どもたち一人ひと りがみんいくでお世話になっている三池医師へ の感謝の気持ちを持ってくれていることを知り、 教員一同感動した。みんいくを通じて子どもたち を大切に思う気持ちが届いたことが何よりうれし かった。本校でのみんいく研究はまだまだ始まっ たばかりだが、これらの出来事が私たちのこれか らのエネルギーとなったことは言うまでもない。

# ■ 写真16 子どもたちの手紙



# 子ども・若者の地域社会への 参画意識の涵養に関する一考察

ー「とさっ子タウン」の取り組みを通して ー





認定特定非営利活動法人 NPO 高知市民会議 代表 NPO 高知市民会議 プロジェクトマネージャー

おがきあきひと尾崎昭仁

1991年生まれ。2012年高知短期大学社会科学科を卒業。2012年認定特定非営利活動法人NPO高知市民会議勤務。2013年とさっ子タウン事業主担当となり、現在に至る。連絡は、高知県高知市鷹匠町2-1-43高知市たかじょう庁舎2階高知市市民活動サポートセンター内の同法人まで。info@shiminkaigi.org

### 第65回 読売教育賞から

# 【地域社会教育活動】



警察官の職業体験をする子どもたち

地域社会教育活動

もあり、市長選挙も行われる。 起業もできる。納税義務や選挙権 地域通貨で受け取る給与をためて 録し、ハローワークで仕事を選ぶ。 年から中学3年までの子どもだ。 れた。ブースで働くのは、小学4 空のまち「とさっ子タウン」が現 警察署など約40のブースが並ぶ架 ホールに市役所や新聞社、銀行、 子どもたちは「市民」として登 8月20、21の両日、高知市内の

2009年に始まり、毎年2日間、

# NPO高知市民会議

り、当日は様々な業種の大人たち 校生が実行委員として企画を練 開催される。社会人や大学生、高

がボランティアとして支える。

プロジェクトマネジャーを務める

実行委事務局の高知市民会議で

どもたちが成長してスタッフとし ってもらうきっかけになれば」と 取り組みが社会や仕事に関心を持 て活動に戻ってきてくれる。この 尾崎昭仁さん(25)は「参加した子 どもたちがまちの運営に参加し、異佐藤一子・東京大学名誉教授「子 年齢・多様な職種の大人と協力する とっても大きな活力となっている\_ 造を学び、成長することは、まちに ことを通して市民的関係や経済的構 (磯江祐介)

架空の街の「市民」に 所はどこにもない」と話す。 年の清水杏さん(15)は「町づくり た。こんな貴重な体験ができる場 とリーダーシップの難しさを学べ つて「市長」を務めた土佐塾中3

ヘンで開かれたイベントを参考に 「タウン」は、ドイツのミュン

佐藤 一子 東京大学名誉教授

「子どもたちがまちの運営に参加し、 異年齢・多様な職種の大人と協力す ることを通して市民的関係や経済的 構造を学び、成長することは、まちに とっても大きな活力となっている」

# 【最優秀賞選評】

# 問題の所在と目的

本団体は高知県内のNPOやボランティア団体の支援を行うNPO法人であり、1999年に高知市が設置した「高知市市民活動サポートセンター(以下「サポセン」という)」の指定管理者として、施設の管理・運営を中心に行っている。この活動過程において、会員、役員、職員の相互に交わされる会話の中で、高知県の将来を懸念する声が聞かれ、それらの問題は次の3つに集約される。

1つ目は、選挙における投票率の問題である。 例えば、先の参議院選挙でもわかるように、高 知県の選挙における投票率は他県と比べ軒並み に低く、その中でも若年層の投票行動は、中・ 高年層のそれに比べ鈍いことが明らかである。換 言すれば、わが町に対する関心や現状の改善に 向けた意欲の醸成に不十分さが認められる、と いえるだろう。

2つ目は、県外への転出者の多さの問題である。転出者の多さについては、とりわけ若者の就 労の問題が横たわるが、角度を変えれば、自分 たちで働く場や生きがいを創造する機会が持て ていないともいえるだろう。

3つ目は、サポセン利用者のほとんどが退職後にボランティア活動を行う中高年や地域町内会等で活動する社会人であり、そこに若い世代の姿がみられない、という問題である。特に、学生の利用が極めて少なく、サポセン事業対象者の年齢層は、中高年に顕著に偏っていた。つまり、これは、若い世代のNPO・市民活動への参画意識やこれを涵養する場が薄弱であることを意味している。

これらを統括すれば、高知県の将来を担う若

い世代は、地域に対する思いや考えを十分持てていないが、同時に、これを改善するための手立ても不十分である、という問題がみえてくる。そこで、この問題に対応するために、具体的には、「若い世代が参画できる事業」の創設や「若い世代のサポセンの利用」を活性化することが求められる。このため、本研究では、「とさつ子タウン」(詳細は後述)による、子ども・若者の地域社会への参画意識の涵養を目的とする。また、これを契機に若い世代のサポセンの利用を高めることも研究目的の延長として指向する。これらから、「子ども・若者の地域社会への参画意識の涵養に関する一考察~「とさっ子タウン」の取り組みを通して~」という研究主題を設定した。

# ■ 図1 本研究の構造

若い世代のサポートセンターの利用の向上

研究目的

子ども・若者の地域社会への参画意識の涵養

- ・「まち」の仕組みに対する理解
- ・積極的な「まち」への参画姿勢
- 他者との関わり

「とさっ子タウン」の実施

# 2 研究の契機

前述の具現化を思案していた頃、ちょうど、ドイツで行われている「ミニ・ミュンヘン」の存在を知った。ミニ・ミュンヘンとは、ドイツのミュンヘン市で実施される「子どもが主役となる架空の都市をつくる取り組み」であり、子どもたちが市民となり、仕事や遊び、政治、消費活動など、実社会で大人たちが行うことを子どもが疑似体験できるプログラムを有する仮設都市である。これは、

夏休みの3週間毎日開催されており、社会教育の一環として30年近く行われている。これをモデルとして、本団体が中心になって「子どものまち」をつくることで研究主題に接近することを考えた。

# 3 経緯

2009年度にサポセンとNPO高知市民会議 が設立10周年を迎えたことも、本研究を後押し した。記念事業の一環として、「子どものまち」の開催を、2007年7月の理事会に諮り承認を得て、2008年1月、第1回実行委員会を開催した。この時点のメンバーは約40名(このうち大学生12名)であり、実行委員会の名称を、「(仮称)ミニ・ミュンヘン高知版〜伸びろ身の丈プロジェクト〜」とした。この後、大学生のアイデアにより、同年7月、事業の名称を「とさっ子タウン」に正式に決定した。同年11月には、「ミニ・ミュンヘン」や「とさっ子タウン」のこと



を広く市民に知ってもらうために、「ミニ・ミュン ヘン」の主宰者のゲルト・グリュナイスルさんを 招き講演会を開催した。第1回実行委員会の時 点では、メンバーの考えがバラバラだったが、1 年近く話し合い、次のことを確認した。

- ○社会の仕組みに関心を持ってもらうきっかけ にすること
- ○高知ならではの仕事や文化をその道のプロ から学び体験できる場にすること
- ○異年齢間の子どもたちのコミュニケーション が生まれる場にすること
- ○単なるイベントに終わらせないで次につなげ ていくこと

開催場所については検討を重ねた結果、子ど もたちが公共交通・自転車・徒歩で行きやすい こと、駐車場が無料で確保できること、「ミニ・ミ ュンヘン」と同じ自転車競技場であること等から、 高知市教育委員会が所管する「陸上競技場りょ うまスタジアム」を候補場所と定めて、高知市と 折衝を重ね使用許可を得ることができた(現在 は、「高知市文化プラザかるぽーと」を使用)。 2009年6月には、参加者定員を100名として 「おためしとさっ子タウン」を開催し、改善すべき 点等を整理した。また、県内の大学で「とさっ 子タウン」を学生に紹介する時間をいただき、約 70名の学生スタッフの参加を得て、2009年9 月に、1回目となる「とさっ子タウン2009」の 開催を迎えた。

本事業は、2016年8月20日、21日の「と さっ子タウン2016」で8回目を迎える。参加者 は400名を超え、専門家・ボランティア数はあ わせて300名近くになった。なお、今年に至る までの経緯の詳細は「表1とさっ子年表」に示 すとおりである。

# 研究内容

# 1. こどもが運営するまち 「とさっ子タウン」の概要

# ①「とさっ子タウン」での活動

「とさっ子タウン」では、市役所、銀行、警察 署、放送局、飲食関係、娯楽関係など約40業 種にわたる職業を専門家から教わりながら体験 できるうえに、子どもが市民として、貯金をした り、税金を納めたり、起業したり、といった経済 活動ができる。また、子どもによっては、市長や 議員としての政治活動ができる。このように、現 実社会を疑似体験することで、子どもが主体的 に社会の仕組みについて学ぶことが可能になる。

# ■ 写真1 とさっ子タウン参加者集合写真



# ②参加対象

「とさっ子タウン」では、小学4年生から中学 3年生を参加対象としている。1つ、2つ、3つ と「つ」の付く歳の子どもは、慈しみ育てる時期 の「慈育」、「つ」が付かなくなる10歳からは、 自ら育つ時期の「自育」と考えており、「とさっ 子タウン」では、自分で考え、行動してほしいこ とから、「自育」の時期にあたる子どもたちを参 加対象とし、スタッフは、参加対象となる子ども たちを支える役割を担う。

# ③実行委員会

「とさっ子タウン」の運営は、「とさっ子タウン 実行委員会」が中心となり、事務局はNPO高 知市民会議が担当している。この「とさっ子タウ ン実行委員会」は、学生と社会人で構成され、 現在90名近くの実行委員が所属している。学生 は、高知県内の高等学校や大学から自主的に集 まったメンバーで実行委員会の枢要を担っている (写真2)。社会人スタッフは、県内で市民活動、 NPO活動を行うメンバーで、豊かな経験をもと に学生や若者を支えている。こうした様々な立場 や年齢層(16歳~66歳)から実行委員会を構 成することを意識している。また、実行委員会の 特長として、実行委員長・副実行委員長は学生 がその任に就くことがあげられる。「とさっ子タウ ン」は、第一義には、子どもたちが自主的に活 動する場であるが、この運営に関わる学生や若 者の活動の場ともいえる。月1回開催する「とさ っ子タウン実行委員会」では、学生の実行委員 長が会議の進行を務めるが、最初から円滑な進 行ができるわけではなく、場数を踏んで上手にな っていく。社会人の実行委員は、実行委員会に おける若者の態度に注視し、彼らのモチベーショ ンのマネジメントに気を配っている。

# ■ 写真2 実行委員会の様子

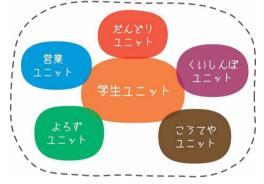


# 4 各ユニットの活動

参加者数が400名を超える取り組みであるた め、細かく検討すべき事項が多い。このため、 実行委員会組織を「ユニット」と呼ぶチームに細 分化し、学生、社会人がともに活動している。 具体的には、全体のプログラムづくり等を担当す る「だんどりユニット」、会場の設営やモノづくり を担当する「よろずユニット」、タウン内での飲食 関係を担当する「くいしんぼユニット」、活動資 金獲得のため企業・団体等に働きかける「営業 ユニット」、自己資金獲得のために商品開発を行 う「こうてや (土佐弁で「買って」の意味) ユ ニット」、当日学生スタッフの確保や実行委員会 全体の学生で連携を行うための「学生ユニット」 の6つのユニットが存在する(図2)。

# ■ 図2 6つのユニット

# とさっ子タウン実行委員会



# 2. 「とさっ子タウン」のねらい

「とさっ子タウン」を開催するねらいは、子ど も・若者の地域社会への参画意識の涵養の前段 階として、子どもたちに社会の仕組みを知っても らい、社会への興味・関心を抱くきっかけをつく ること、そして、高知のことを好きになってもらう ことにある。

# ①「まち」の仕組みに対する理解

近未来の社会を担う子どもたちには、子どもの 頃から社会について興味関心を抱いてほしいと 考えており、前述のとおり、プログラムの中に、 就労や納税、貯金、起業、政治、といった現実 社会を疑似体験できる内容を盛り込んでいる。 子どもたちは、このプログラムを通して、社会の 仕組みを理解する。

# ②積極的な「まち」への参画姿勢

# ∼高知特有の仕事や文化、遊びを楽しく体験~

高知での開催にあたっては、「高知ならでは」 を追求したいという思いがあり、高知特有の仕事 や文化、遊びを盛り込んだプログラムにしてい る。例えば、「路面電車」があげられる(写真 3)。高知県には、高知市を中心に東西に、明治 37年から路面電車が走っている。この日本最古 といわれる路面電車は、現在、市民の生活に根 付いている。これも高知特有の「文化」であり、 仕事であるため、子どもたちに伝えていきたいと いう思いから、「とさっ子タウン」内には路面電 車が走っている。子どもたちが運転手や車掌の 仕事をし、子どもたちがお金を支払い利用してい る。このことは、高知県の文化にふれる機会をつ くるとともに、公共交通へ目を向けさせることにつ

# ■ 写真3 路面電車の様子



ながると考えている。

また、高知と言えば「お酒の文化」がイメー ジされる。このお酒を楽しく飲む場の遊びとして 「お座敷遊び」がある。当然、子どもたちにお酒 を推奨するわけではなく、「お座敷」と伝わる文 化を伝承したいと考えている。そこで、高知市内 の料亭から芸妓さんに来ていただき、「はし拳」 ができるブース (「はし拳道場」) を作り、仕事と して、文化体験として教わっている。

# ③他者との関わり

# ~異年齢間のコミュニケーションの場~

「とさっ子タウン」の参加対象者は、前にも述 べたとおり、高知県内の小学4年生から中学3 年生までの子どもたちである。年齢層や居住地 域が異なる子どもたちが一堂に会し、仕事や遊 びの場面でコミュニケーションを取っている。非 日常の空間に新たなコミュニケーションが生まれ ることに期待を寄せている。また、この「とさっ 子タウン」には、学生スタッフが多く関わってい る。彼らは、子どもたちからみれば、親近感を覚 える、お兄さん、お姉さんのような存在である。 また、仕事を教える専門家は、20代から70代 までの幅広い年齢層である。こうした学生や専門 家とのコミュニケーションによって、社会と間接 的にふれることになると考えている。

これら3つを通して、子どもたちが社会の仕組 みや高知の文化などを知る契機とし、社会への 興味・関心を抱く場にしたいし、高知のことを好 きになってほしいと考えている。

また、実施にあたっては、次の2つを大切に している。1つは、「子どものチカラを信じ、主体 性を大切にする」である。実行委員の合言葉は、 「子どものチカラを信じよう」であり、これは、子 どもの主体性を大切にし、「見守る」スタンスで 臨むことを意味する。さらには、子どもの無限の

パワーを信じることは、将来の地域社会をよりよ い方向に変えていくことにつながるものと考えて いる。また、このまちは、子どもだけのまちであ る。保護者の方は、一切立ち入ることができず、 子どもだけで活動する。これにより、自発的に活 動するようになる。実行委員からこのような話が あった。ハローワークの前で、子どもが求人票を 前にして、じっとしていた。実行委員が、「どうし て求人票を取らないの」と声をかけたところ、「親 から『お堅い仕事』をしなさい、と言われたか ら」と返事があったそうである。「お堅い仕事」 とは、市役所、警察署、税務署での仕事を指し ていると思われるが、子ども自身が望む仕事がで きない状態にあった。実行委員が、子どもが自 分のやりたいと思った仕事ができるサポートが 必要だと改めて感じた場面であった。このことか ら、子どものチカラを信じ、主体性を大切にする ことを重んじることを確認している。

もう1つは、「保護者と子どもをつなぐ工夫」 である。前述のとおり、保護者はまちの中に入れ ないため、子どもの言葉でしか「とさっ子タウン」 を保護者に伝えることができない。そこで、保護 者に「とさっ子タウン」を理解していただくため に、終了1時間前に、控室にて保護者対象に、 「とさっ子タウン」内の子どもの様子を、スライド を用いて実行委員が説明している。また、「とさっ 子タウン」初日に開催するガイダンスを、子ども と離れた位置から保護者が見学できるようにした。

# 3. プログラムの内容

# ①ハローワーク・就労

子どもたちは、現実社会と同様、就労にあた っては「ハローワーク」で職を求める。ここに は、約40業種の仕事が存在し、自分が希望す る仕事の求人票を取り、受付で手続きを行い仕

事に就く。また、それぞれの仕事ブースには、そ の道のプロである「専門家」がいる。専門家の 協力のもと、子どもたちが本物の仕事を体験する ことができる。例えば、病院では、日頃現場で 働いている医師、看護師、薬剤師が仕事のレク チャーを行い、模擬腕を使った採血、縫合、血 圧測定等を体験している。また、消防局では、 「ケガ人が出た」との通報によって、「救急搬送」 を子どもたちが行う場面もある。ぎこちない動き があるが、そこには、懸命に仕事に取り組む姿 がみられる (写真 4)。

# ■ 写真4 緊急搬送の様子



# (2)給料

仕事を終えた子どもたちは、働いた時間に応じ て「給料」をもらうことができる。「とさっ子タウ ン」内では、地域通貨「トス」が流通しており、 30 分あたり 15トスの給料 (「とさっ子タウン 2015 時点) となっており、まちの中にある「銀 行」で受け取ることができる。

# ③納税

「とさっ子タウン」では、現実社会と同様、市 民の義務として、銀行で給料を手にした市民は、 「納税」を「税務署」で行う。1回の仕事で手 にした給料に対して、15%の税金(「とさっ子タ ウン 2015」時点)を支払う。

# 4消費活動

自分たちで稼いだお金は、自分のやりたいことに 使うことが可能となる。まちの中には、様々な店が 並ぶ商店街やノンアルコールバー、食堂などの飲 食ができるブースがある。そこでは、高知県内の 企業より提供された飲食物が販売されている。こ の他、体を使うゲームコーナー(有料)で、遊ぶ ことができる。また、「とさっ子タウン」でしか学ぶ ことができない「アカデミー」と称するユニークな 講座が開設され、子どもたちは受講できる(有料)。

# (5) 起業

「とさっ子タウン」の市民は、一定時間、就労 経験を積むことにより、起業が可能となる。この まちに必要あるいは自分がやりたい仕事に対し、 自分のお金を出資し、新規店舗を出す。収益の 中から税金は徴収される。毎年、10から15の 店舗が新たに出されている。例えば、「荷物預か り屋」という、市民の荷物を預かる店を起業した 子どもがいる。まちの中で荷物を抱え、仕事や買 い物、遊びを楽しむ子どもたちの様子を見て、 「荷物を預かる場所を作ればいい」と考え、起業 したらしく、まちの課題を解決に導いた。しかし、 荷物を取りに来ない子どもがおり、スタッフに相 談する事態になった。とはいえ、出来上がった仕 事ではなく、自ら考え、創った仕事ゆえに失敗を 経験し、そこから学ぶことができる。この子ども は、この経験から、さらに、まちのためになる仕 事を考えているようであった。

# ⑥政治・選挙

架空のまちとはいえ、「とさっ子タウン」には市 民の代表となる「市長」や「議員」が選出され る。市長のマニフェストや議会の決定で、まちの 運営が行われる。

「とさっ子タウン」1日目に、市長選挙や議員選 挙が行われる(いずれも任期は2年。再任は妨 げない)。立候補する市民は、マニフェストを掲 げ、街頭演説を行う。演説の際には、実社会の 選挙と同様、のぼり旗、タスキ、白手袋などを使 用する。過去には、市長の公約と議会の決定によ り、2日目から「給料と税率」が大きく変わった年 がある。また、まちの中を走ると罰金という条例が 制定された年もある。市長や議員は、市民の声に 耳を傾けながら、まちをよくしていこうと考えている。

# 研究方法

本研究は、研究目的と照らし、「子ども・若者 の地域社会への参画意識の涵養」を中心に検証 し、これに伴う、若い世代のサポートセンターの 利用の向上について明らかにする。

# 1. 子ども・若者の地域社会への 参画意識の涵養

「とさっ子タウン」において、子ども・ボランテ ィアがいかに「まち」に参画姿勢を示すようにな ったのかについて、保護者の感想やボランティア が見聞きした「いい話」をもとに検証する。ま た、参加者が「とさっ子タウン」終了後に、「と さっ子タウン」に関わる行動をとっているのかに ついても検証する。

# 2. 若い世代のサポートセンターの 利用の向上

「とさっ子タウン」への参加者は、子どもと若 者である。彼らの「とさっ子タウン」参加後のサ ポートセンター利用状況について検証する。

# 6 結果及び考察

# 1. 子ども・若者の地域社会への参画意識の涵養

日頃、受動的な子ども・若者が、「とさっ子タウン」に参加・参画したことによって、能動的に変わった、という話をよく耳にする。とりわけ、「とさっ子タウン」終了後、事務局のサポセンに寄せられる保護者の感想には、地域社会への参画意識につながる記述が散見される。過去3年分の中から、地域社会への参画意識の涵養にあたると思われる、「まち」の仕組みに対する理解、「まち」への参画姿勢、他者との関わりに関する感想を載せる。

# ①保護者の感想

# ア「まち」の仕組みに対する理解

● とても充実した時間を過ごすことができたよ うで、「楽しかった!!」が第一声でした。他 校のお友達もできて、たくさんの交換した写 真を見せてくれました。税金という概念が4 年牛に理解できるのかと思っていましたが、 仕事をして税金を納めて街(市)や市民(私 たち) の生活が成り立っているということが何 となく理解できたようで、「実際にお父さんや お母さんは仕事してお給料もらって、どうやっ て税金払っているの?」と質問してくれまし た。仕事をしないとお金が入らない、お金が ないと生活ができないし、好きなものを買えな い、といったことや、大人になっても勉強(自 己啓発)への投資をするといったことも理解で きたようです。「だから、お父さんもお母さん も好きな仕事してお給料もらって生活できて 幸せなんだよ」と伝えたことです。選挙での 投票も候補者の意見の違いを伝えてくれ、こういった理由で自分は候補者を選んだけれども、その人は選ばれなかった、とも教えてくれました。

イ 積極的な「まち」への参画姿勢(ボランティ ア希望)

● 小学校の頃から参加し、中3の今年が最後となりました。2日目に迎えに行くと「来年も参加できるかな」と聞いてきました。「今年で最後じゃないの?」と言うと「高校生になってもボランティアで参加できるということを聞いてきた」と話してくれました。コミュニケーションがあまり得意でないわが子がこのようなイベントに1人で参加すること自体がビックリでしたが、参加したことで、駅弁プロジェクトにも参加し、日頃できない経験をたくさんさせてもらいました。自分が楽しく経験できたことを今後はボランティアとしてまた参加し、年下の子どもたちにも楽しんでもらいたいと思うようになったわが子に成長を感じ、とても嬉しい思いで話を聞きました。

# ウ 他者との関わり

● 昨年、長女が参加してから、1 年間待ちに待っての参加で、双子の次女、三女とも大変楽しんだようです。早くも来年の話をしております。何をするにも時間がかかる2人は、特別につけてくださったサポーターのお二人に助けていただきながら、2日間過ごして、まちの仕組みも理解できたようで、「来年はひとりでできる!!」と自信をつけて帰ってきました。計算の苦手な2人ですが、銀行やとさっ子ピックで仕事をしたようです。サポーターの方に計算などを助けていただいたようで、2人とも嫌な思いをせずに、楽しんだようです。帰っ

てきて、紙幣の数え方を祖父母に教えていま した。こういったイベントに、もし私がついて 行っていたら、銀行とか計算をするような仕 事はやめさせていたと思います。でも、サポー ターの方のおかげで、"自分のやりたい仕事" ができました。それなりにできた子どもたちに 驚いています。親の私もこれからはなんでも 「ムリ、ムリ、ダメ、ダメ」と言わず、2人の 意思を尊重して、いろんなことにチャレンジさ せていかなければならないと思いました。これ から1年間2人の成長を見守り、また来年も ぜひ参加させていただきたいと思います。

# ②ボランティアが見聞した「いい話」

● 2日目の朝、N 君という子が、博物館をやり たいと言って化石を持参してきました。まずそ の発想に感心しました。一部は売る用、一部 は展示用でお菓子箱みたいな箱にガムテープ で厳重に梱包されており、その中は三層構造。 さらに解説用に恐竜年表まで作ってきていて、 「この子すごい」と思いました。しかし、N君 の所持金は25トスほどで、出店料とお昼代 を考えると結構ギリギリな出店でした。1 人で やるのは厳しいので、ハローワークに 1 人分 の求人を出そうとしていた時、まちづくり課の 方が、「この子が 1 緒に博物館をやりたいと言 っています。」と1人の男児を連れてきまし た。その子は、N君が出店申請をまちづくり 課でしている時、ちょうど、まちづくり課で働 いていて見ていたそうです。まだ、まちづくり 課の勤務時間が残っていたので、終了を待っ てからその子の分の手続きをして共同オーナ ーとなりました。その子の手続きをして分かっ たのですが、その子の所持金はなんと 140 ト スほどもありました。僕はその時、これってま さに「起業家と資産家の出会いだ!」と思い

ました。その子は引っ越しが決まっており、次 の「とさっ子タウン」には参加できないので、 「一度はお店をやってみたかったから、うれし い」と僕に語ってくれました。その後、とさっ 子タウンが終わる時間まで2人で博物館をや りましたが、結果は若干の赤字でした。しか し閉店の手続きが終わったときに、N 君がそ の子に「これ、友情の証として、あげる!」と 言って、化石を1つプレゼントしました。それ を見た僕は、「なに、この2人、あつすぎだ る!」と感動し、周囲からは「N 君、カッコよ すぎ」という声が上がりました。

このエピソードは、「まち」へ参画姿勢を示す 者とこれを支援する者の関係を表しており、ボラ ンティアは子どもの考えを尊重し、温かく見守っ ている。また、実施期間が短くても、「とさっ子タ ウン」は、子ども同士のつながりを生成する機会 も提供しているといえる。

# ③ブースの特徴

子どもたちは、遊び感覚で「まち」の仕事を 通し、「まち」の一員としての振る舞いを考え、 現実社会に結び付ける。「とさっ子タウン」の各 ブースでの「遊び」は「現実」につながり、子 どもたちは自然にまちづくりに参画している。

3年前から「図形 de 脳トレ!」というブース

# ■ 写真5 子どもが考えた立体図形



が加わった。ここでは、「ポリドロン」という教具 を用い、子どもたちが、立体図形を主体的に製 作することを目的とする。レベルのからレベル4 までは、指定された立体図形からレベルごとに1 つ選択する。レベル5は自分で創意工夫して製 作する (写真5)。ここの特徴として、長時間取 り組むことやリピーターが多いことがあげられ、 算数・数学を強く意識した様子は見られない。 スタッフは、算数・数学に関心を持つ学生、教 員であり、学校数学の「現実」を射程とする。 子どもは、まず、「遊び」感覚で臨み、この延長 に算数・数学の「現実」を捉える。また、レベ ル4までは、「現実」であるが、レベル5は子ど もが考えた"ワニ"等の「遊び」であるため、作 業過程にも「遊び」と「現実」が共存している。

# ④「とさっ子タウン」の発展的活動

# ア「とさっ子駅弁」開発

「とさっ子駅弁」の開発にあたっては、土佐駅 弁学会とともに「とさっ子タウン」の参加者に、 「とさっ子駅弁学会員」の募集を行い、25名が 参加した。まず、食材研究として、高知市の日 曜市に繰り出し、チーム別に予算 1500 円で、 食材を買うことから始めた。また、中土佐町久礼 で魚の買い出しもしている。この後、駅弁コンセ プトデザインについて、「こんな人に食べてほし い」から始め、「駅弁に入れたいもの」、「調理 法」を検討しながら少しずつイメージを膨らまし ていき、食材原価や食材の組み合わせ、容器の 種類によって、販売価格の決定 (駅弁経済学)、 販売戦略を経て、2年間で4種類の駅弁を開発 し、駅内や車内での販売体験を行った。現在も 四国駅弁選手権にて最高位の金賞を受賞した1 種類が駅で販売されている。なお、この駅弁は 寄付つき商品として、1個につき50円が「とさ っ子タウン」実行委員会に寄付されている。

### ■ 写真6 とさっ子駅弁販売の様子



# イ「こうちこどもファンド」への参画

毎年、「とさっ子タウン」に訪れ、常に進化す る「まち」の様子や「とさっ子タウン」市長との 対談から「こどものチカラ」を再認識した高知市 長の肝いりで「こうちこどもファンド」が2012 年度に創設された。これにより、仮想のまち「と さっ子タウン」が現実のまちの取り組みに発展し つつある。なお、「こうちこどもファンド」とは、 次のようなものである。

- ●「自分たちのまちを良くしたい」という子ども たちの思いを支援することを目的に誕生
- ▶ ト限20万円までの範囲で活動に助成を行う
- 高知市在住、通学の18歳までの3人以上の グループであれば応募できる
- 審査員は小、中、高校生で構成。公開審査 会の場で助成が決定する

# ウ「とさっ子タウン」通貨の「トス」を現実のま ちで使える催し

「とさっ子タウン」開催日から約1か月後、写 真展 (写真7) と同時開催で、「とさっ子タウン」 内で使っている通貨「トス」を、現実のまちで使 うことができる催しを1日限定で実施している。 これは、保護者に「とさっ子タウン」やそこでの 子どもの活動を知ってもらうためであり、「とさっ 子タウン」と現実のまちをシンクロさせるためでも ある。「土佐の台所」として親しまれている、大 橋通り商店街の協力を得て、10トス(500円 相当) で、子どもたちは買い物を楽しむことがで きる。これによって、改めて「とさっ子タウン」 のよさを感得することができる。

# 2. 若い世代のサポセンの利用の向上

「とさっ子タウン」には多くの高校生、大学生 が関わっている。「とさっ子タウン」の自主的な 会議が増えたことで、サポセンの若い世代の利 用が高まっている。これは、「とさっ子タウン」の 開始までなかった現象である。学生によると、「以 前は、市役所には入りにくかったが、とさっ子タ ウンでサポセンの方と知り合って、入りやすくな った」とのことである。「とさっ子タウン」に関係 した利用もあるが、若い世代との関係性をよくし ていることも好結果につながっている。また、「と さっ子タウン」以外に、サポセンが開催する様々 な取り組みへの参加も増えている。

# ■ 写真7 「とさっ子タウン」写真展



てきた。今後も「とさっ子タウン」そのものとこれ に関わる人の成長を視座として取り組んでいく。 この取り組みに共感する参加者、ボランティアは 繰り返し関わっているが、県内全域の学校に周 知できているのか確認できない状況がある。今後 も広報活動とともに、可能な限り、学校に「とさ っ子タウン」の趣旨について理解を求めることで 参加を呼び掛けていきたい。また、「とさっ子タ ウン」は企業からの支援がなくては開催できない 実態がある。支援は子どもたちに仕事を教える専 門家としての「人材派遣」、子どもたちが買い物 を楽しむための「物品提供」、事業を支えるため の「資金提供」があげられる。今後も企業に支 援を呼び掛けるとともに、行政機関への協力も呼 び掛けていく。なお、これまでの高知市との協 働・連携による地域社会の実現が評価され、自 治体総合フェア2016特別企画「第8回協働ま ちづくり表彰」のグランプリを受賞した。

一方、仮想のまちである「とさっ子タウン」で の学びや活動をいかに現実のまちにつなげてい くのかが今後の課題として残る。サポセンとして は、「とさっ子タウン」で得た知見をもとに、組 織間、世代間をつなげていく役割をいかに果たし ていくのか、を考えていきたい。さらに、個人の 成長過程についても、小・中学生から青年期、 大人に向けて地域社会に参画する市民性を高 めていくためにできることを検討していきたい。

# 展 望

「とさっ子タウン」は、1年間を通して実行委 員会を開くことによって、常に進化することに努め

# 社会自立を支援する学校設定教科 「キャリア・チャレンジ」の挑戦

- 地域や企業等と連携・協働した教育活動の実践 -





千葉県立特別支援学校流山高等学園 主幹教諭

野尻 浩

1961年生まれ。1984年上智大学理工学部卒業。1984年千葉県流山市立八木中学校勤務。1991年 千葉県野田市立南部中学校勤務。1998年千葉県野田市立岩名中学校勤務。1999年千葉県野田市 立第二中学校勤務。2006年千葉県立特別支援学校流山高等学園赴任。現在に至る。連絡は、千葉 県流山市野々下2-496-1の同校まで。

# 【特別支援教育】



イスや手芸品などを販売する2年生

域と触れ合う機会を増やすことが

ることで、自立心が養われる。地

「働くことへの自信や意欲を育て

重要だ」と強調した。

(佐藤純

の向上を目指す独自授業「キャリ 客に声をかけた。生徒の就労意欲 陶器など約40種類を並べ、買い物 の商業施設で10月、福祉・流通サ になってください」。千葉県柏市 たいので、勉強になる」と語った。 ア・チャレンジ」の一環だ。 会計担当の生并勝太さん(17)は (17)は「卒業後はスーパーで働き 初めてだけど、やりがいがある ビス科2年の6人が、木工品や 売り場に立った見崎智弘さん

千葉県立特別支援学校流山高等学園

と目を輝かせた。

野尻浩主幹教諭 55

り、1年生は「清掃」、2年生は が増えた10年度に遡る。 入学者に めている。導入のきっかけは、定員 との連携」と学年別にテーマを定 「販売」、3年生は「地域や企業

の水準に戻った。野尻主幹教諭は 90%前後から65%に低下した。 を提案。企業での実習希望者は元 感じた野尻主幹教諭は、独自授業 業」を選んだ生徒は、それまでの 実習先の希望を聞いたところ、「企 「就労意欲が低下している」と

価され、そのことが生徒を主体的に 素晴らしい。他の教員の理解や意識 取り組む姿へと大きく変えたことは 改革を促進したことも注目される 日々の学習の成果が地域社会に評 藤田和弘・九州保健福祉大学教授

特別支援教育

#### 【最優秀賞選評】

#### 和弘 九州保健福祉大学教授 藤田

「日々の学習の成果が地域社会に評 価され、そのことが生徒を主体的に取 り組む姿へと大きく変えたことは素晴 らしい。他の教員の理解や意識改革 を促進したことも注目される」

# 一欲を生む実習

生徒が作った商品です。ご覧

この授業は2012年度に始ま

# はじめに

これから述べる実践報告は、平成24年度か ら始めた学校設定教科「キャリア・チャレンジ」 の4年あまりの実践である。

「キャリア・チャレンジ」は、地域や企業など と連携・協働しながら、社会全体で生徒の社会 自立を促そうとする教科であり、「教育のための 社会」に向けての、第一歩になればとの願いを 込めてスタートした。

また、平成22年度に本校は第二キャンパスを 開設したが、私なりの新しい学校づくりの挑戦で もある。



さて、本校は、平成9年に開校し、軽度の知 的障害の生徒を対象とした、職業に関する専門 学科を設置する高等部のみの特別支援学校であ る。また、全員が卒業後の企業就労を目指し、社 会自立・職業自立を学校教育目標に掲げている。

平成22年度より第二キャンパスを開設し、既 存の「農業」「工業」「家政」に関する学科に加 え、「福祉」「流通・サービス」に関する学科を 設置し、4学科8コース体制となった。また、定 員も1学年45名定員から96名定員と大幅に増 員となり、学年12クラス体制である。

学科	コース	
園芸技術科	農業コース	
	園芸コース	
工業技術科	木工コース	
	造形コース	
生活技術科	経製コース	
	手芸コース	
福祉・流通サービス科	福祉サービスコース	
	流通サービスコース	

# キャリア・チャレンジの概要

#### 1 導入の理由

#### ①生徒の実態の変化

平成22年度の第二キャンパス開設で、1学 年定員が、約2倍の増員となった。それに伴い、 障害の程度の多様化や教育的ニーズが進み、 生徒の実態に大きな変化が見られた。

その変化が顕著に見られたのが、2年生で初 めて行う「産業現場等における実習」での「施 設実習」の割合である。

本校は全員が「企業就労」を目指しているた め、第二キャンパス開設前は、「企業実習」がほ とんどで、「施設実習」の割合は10%程度であ った。ところが、第二キャンパス開設時に入学し た学年は、約35%の生徒が「施設実習」という 状況であった。

この変化は、企業実習が難しいのではないか という教員の判断もあるが、生徒自身が「企業 実習は不安である」「行きたくない」という自信や 意欲の低下が大きな要因であった。

そのため、これまで以上に、働くことへの自信 や意欲を育てることが重要だと感じた。そこで、 日常の教育活動と社会との結びつきをより一層 深めて、社会自立・職業自立に向けた体験的・ 実践的な教育活動を通じて、人から感謝された り、必要とされる体験を積み重ねたりすることで、 働くことへの喜びや自己肯定感を実感することが 大切なのではないかと考えた。

また、就労先で必要とされるコミュニケーショ ン能力や仲間と協働する力、清掃に関する知識 や技能などを身に付けることも、就労先への円滑 な移行を図る上で大切な視点であると考えた。

#### ②学校の特色を生かす教育課程の編成

本校は、本校舎・第二キャンパスの2つの校舎を持つ学校である。「本校舎」に3年、「第二キャンパス」に1・2年が在籍している。

これまで本校は、生徒の「先輩・後輩の関係」を生かした特色ある授業作りを進めてきた。専門教科では、3年間同一の専門コースに所属し、上級生が下級生の手本となる体制をとってきた。上級生が作業内容を下級生に伝えながら活動を進め、具体的な技能や態度などを教えるなど、実社会で見られる組織の関係を授業の中に組み込むことで、対人関係の伸長を図り、役割や責任を遂行することで自信へとつなげてきた。

しかし、「本校舎」と「第二キャンパス」に分かれたため、このような取り組みは、第二キャンパスに在籍する1・2年生の活動で引き継がれるものの、3年ではそれができない状況となった。

そこで、3年生は、1・2年生で培ってきた学科・コースでの基礎・基本(ベーシック)を土台に、発展的な活動(チャレンジ)として、地域や企業等と連携・協働した教育活動を推進してはどうかと考えた。生徒が地域や企業へ入っていく授業と、地域や企業の人たちが学校へ入ってくる授業との両方を充実させ、「流山コラボ

キ

ヤ

IJ

ア

発

達

を

促

す

教

育

レーション・システム」を構築しながら、生徒の 自立を促すのである。

そして、第二キャンパスを「基礎・基本」、本校舎を「発展」と位置付けた教育課程を編成することが、本校の特色を生かした学校づくりになるのではないかと考えた。

#### 2. 教育課程上の位置付け

校長の事前了承のもと、平成24年度に向けた教育課程委員会と職員会議に、教務主任として学校設定教科の新設を提案した。

しかし、他の教員たちから猛反発を受けた。 反対意見と質問攻めにあい、次の会議までに再 提案をするという繰り返しが、約4か月続いた。 その間、各主任層との対話をもち続けたが、そ の中で見えたものは、新しい教育活動に対する 不安が大きいということであった。

そのため、できうる限り他の教員に負担をかけずに、授業運営の全てを私が担うことで納得してもらうことにした。私自身の不安も大きかったが、楽観主義と粘り強さで、年度末、ようやく学校設定教科「キャリア・チャレンジ」の設定が決定した。

日課表の位置付けは、下図のように、2学科 ごとに、週7単位時間で、年間約

140 単位時間を設定した。

1·2年 基礎·基本 3年 発展 就 労 キャリア・ベーシック キャリア・チャレンジ 1年 清掃講座·検定·校外清掃 2年 校外販売·接客講座 〇地域や企業等と連携・協働 き る 〇各コースの特色を生かした 地域貢献活動 力 流山コラボレーション・システム 働 働く基礎基本を学ぶ専門教科 き 農業コース・園芸コース・木エコース・造形コース 続 手芸コース・縫製コース・福祉サービスコース・流通サービスコース け

る

力

流山高等学園の3年間

授業(教科·自立活動·ST学習·道德·HR·部活動·委員会)

学校行事(宿泊学習·修学旅行·体育祭·KOYO祭·予餞会)

	月	火	水	木	金
1	専門			学校設定教科「キャリア・チャレンジ	総合
2		去明	-t:00		自立
3		専門	専門		家庭
4					
5	道徳	理科	HR	ア・チ	美術
6	国語	音楽情報と	英語/ 社会		
7	数学	保体	保体	<u>"</u>	委員会 /部活

また、1・2年生は、キャリア・チャレンジで必 要となる基礎・基本を身に付けるため、「キャリア・ ベーシック」と呼んで、専門教科の中で、地域や 企業等と連携した教育活動も併せて設定した。

#### 3. 校内体制

平成24年度の開設時は、私1人が「キャリ ア・チャレンジ」「キャリア・ベーシック」担当と して校務分掌に位置付けられ、授業運営の中心 を担っていたが、現在は、私を含め3名の教員 が担当している。主な職務としては、年間指導 計画の作成、教育活動を円滑に実施するための 地域等との連絡・調整、教員体制の整備、生徒 の学習評価、教育活動の改善などがあげられる。

特に、地域や企業等と連携するためには、学 校の教育計画と調整する必要があるため、教務 主任との職務を兼務しながら行っている。

#### 4. キャリア・チャレンジの目標

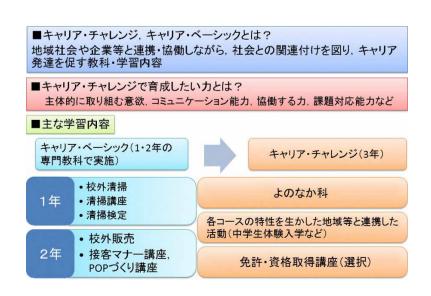
キャリア・チャレンジの目標は、以下のように 設定した。

- ○地域社会の中で、社会自立・職業自立に向 けたキャリア発達を図り、社会人として主体 的に生きるために必要・有用な知識・技能・ 態度を高めるとともに、地域社会の活性化に 資する。
- ○地域社会と連携・協働した体験活動や社会人 を活用した授業により、青年期に向けたキャ リア発達を図る。
- ○体験的・実践的な活動の中で、就労先への 円滑な移行に向けた知識・技能・態度を高 める。
- ○社会自立・職業自立に必要なコミュニケーシ ョン能力やソーシャルスキルを養う。

特に「地域社会の活性化に資する」という文 言には、地域とともに歩む学校づくりの方向性 と、社会全体で生徒の自立を促していくという意 味合いが込められている。

# 3 学習内容

「キャリア・チャレンジ」「キャリア・ベーシッ



ク」の学習内容は、各コース単位を基本に、以 下の4つの学習内容を設定している。平成24年 度の実践開始から年度ごとに学習内容を見直し ているが、昨年度と今年度の実践をもとに述べ る。(図参照)

#### 1. 清掃に関する学習

#### 【目的・ねらい】

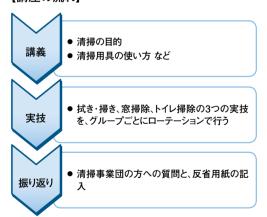
清掃に関する知識・技能・態度の育成は、職 業人・社会人としての基礎・基本ともいえる学習 内容である。

しかし、毎日の清掃時間や、各専門コースの 後片付けの中で教員が指導するものの、指導方 法が教員によってばらばらであった。また、就労 した職場からは、「清掃ができない」という情報 もたびたび入ってきた。

そこで、清掃に関する基礎・基本を学びなが ら、地域貢献することによって、働くことへの意欲 や自己肯定感を育みたいと考えた。

# ①清掃講座(外部講師による)

#### 【講座の流れ】



流通サービスコースの委嘱講師でもある清掃 事業団の方を講師として、清掃講座を年2回実 施している。





#### 【授業の工夫】

就労先を意識し、開設当時は3年生で実施し ていたが、「学習した内容を、毎日の清掃等の時 間で継続的に指導することが大切である」との教 員の声から、現在は、清掃検定と併せ、1年生 で実施している。

講座では、テキストを作成して知識の定着とと もに、専門家による実技指導を行うことで技能の 習得を図っている。

#### ②清掃検定

#### 【検定の流れ】

● 流通サービスコース教師が、動画と生徒の 検定の 実演により、清掃方法を確認する 確認 ● グループごとに分かれ、検定の練習を行う 練習· ● 教師が検定員となり、1人1人に検定を実施 検定 1 ● 終了後、すぐに生徒に検定結果を知らせ、具 体的なアドバイスを行う 練習· 検定 2 ● 2つめの検定を実施する 振り返り ● 反省用紙をもとに、自己の振り返りを行う

清掃に関する技能をより確かなものとするた め、3年前より清掃検定を年3回実施している。

検定項目は、「テーブル拭き」「スクイジーによ る窓清掃」「自在ぼうきによる掃き掃除」の3つで ある。そして、それぞれ1~10級の段階を付け、 生徒自身がどの程度の清掃技能を身に付けてい るかを、見える化したものである。





#### 【授業の工夫】

検定をする上で教員の指導力は不可欠であ る。そこで、清掃に関する専門性のある流涌サー ビスコースのクリーン担当教員と連携し、教員向 けの清掃検定講習会を実施している。

また、清掃検定当日は、普段の専門教科で清 掃の学習をしている流通サービスコースの3年 生に補助してもらいながら、実施している。流通 サービスコースの生徒は、人から頼られていると のやりがいを持ち、準備・後片付け・教員の補 助・生徒へのアドバイスなど、自主的な取り組み が見られている。

さらに、点検項目については、毎年度見直しを 行っている。生徒・教員にとって分かりやすく、 検定しやすいものとなっているかを検討し、清掃 の基本的な技能が身に付けられるようにしている。

#### ③校外清掃

#### 【授業の流れ】

清掃の 準備

- 各コースで、清掃場所の特徴を踏まえ、清掃 用具を準備する
- 清掃分担を確認する

校外清掃

- 施設の方に挨拶をする
- 決められた分担を清掃する
- お礼の挨拶をする

振り返り

各コースごとに、反省と次回に向けての改善 点を話し合う

清掃検定で学習した技能を生かして、地域貢 献活動として、校外清掃を実施している。

各コースに、地域の保育園、コミュニティーホ ーム、自治会館、消防署などの地域施設を割り 振り、年間を通して4回以上の校外清掃を実施 している。





#### 【授業の工夫】

この活動も、新設時は3年で実施していたが、 今年度より、1年で実施するようにして、地域で の活動を明確に位置付けた。

また、昨年度までは、学科ごとに一斉の活動 日を設定していたが、今年度より、コースごとの 実施日で、コースのより主体的な活動を促した。 また、年間通して同じ清掃場所で実施すること で、生徒自らが工夫して清掃できるよう、指導・ 支援している。

#### 2. 販売に関する学習

#### 【目的・ねらい】

これまで本校の校外販売は、学校行事に位置 付けた年1回の販売会を除いては、コースの生 徒有志による休日の販売会のみで、教育課程上 に位置付けられた活動ではなかった。

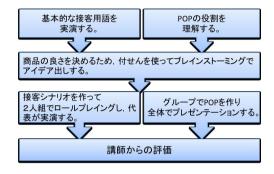
また、流通サービスコースが新設され、本校製 品の商品管理を担うこととなったため、校外販売 を教育課程に位置付け、流通サービスコースと連 携した校外販売を実施する必要性を感じていた。

さらに、販売に関する指導では、基本的な接 客用語の指導は各コースで行われていたが、よ り専門的な販売の指導は十分ではなかった。

そこで、校外販売と専門家による販売の指導 を連携させ、生徒の自己肯定感やコミュニケーション力を高めることを目指した。

# ①企業と連携した「接客マナー講座」「POP づくり講座」

#### 【講座の流れ】



校外販売の事前指導として、専門分野である 企業の方を講師として招き、年2回の講座を実 施している。

どちらの講座も、商品の良さを生徒同士で出し合い、それを口頭で表現すると「接客」、言葉で表現すると「POP」という学習になっており、一貫性のある講座となっている。





#### 【授業の工夫】

企業のもつ専門性を生かしながら、ブレインストーミング、ロールプレイング、プレゼンテーションなどのアクティブ・ラーニングの手法を取り入れた協働的な授業を展開している。

また、生徒の理解を進めるためのテキストを作成している。

#### ②校外販売

#### 【販売の流れ】



- 流通サービスコースが入庫作業を行い、販売商品を準備する
- 各コースで販売商品を確認し、販売グッズを 準備する

校外販売

- ショッピングモール等の約束を守り、搬入作業を行う
- 講座の学習を踏まえ、販売活動を行う
- 販売終了後、搬出作業を行う

振り返り

- 学校に戻り、会計作業を行う
- 反省と次回に向けての改善点を話し合う

地域のショッピングモールなどで、コースごと に年3回・延べ18回実施している。

学校で行う販売とは違い、企業が求めるマナーや約束などを意識した販売となっている。





#### 【授業の工夫】

流通サービスコースの商品管理グループと連携し、200種類以上の本校製品の入庫・出庫作業を行って、販売製品を準備している。そして、流通サービスコースが開発したバーコードによるレジシステムを採用しながら、会計処理も行っている。

また、講座を生かした接客方法やPOPを使用 し、よりレベルの高い校外販売を実施している。

## 3. 各コースの地域等と連携した学習

#### 【目的・ねらい】

1・2年生の専門教科で身に付けた力を生かし、3年では、各コースの特徴を生かした地域

や企業等と連携した学習活動を創造し、課題解 決能力やコミュニケーション能力の育成を目指 している。

#### 【各コースの活動】

具体的には、これまで下記のような活動を実 施している。

学科	活動内容
園芸技術科	・駅前などの花の植栽 ・保育園児や近隣中学生との野菜の植え付け・収穫体験 ・農業検定試験
工業技術科	・保育園児や地域住民を招いた陶芸教室 ・地域住民宅のコンクリート施工 ・地域名所の階段作り
生活技術科	・地域住民を招いた機織り教室
福祉・流通サービス科	・福祉施設での高齢者交流 ・地域住民を招いた介護サービス ・地域施設や名所の清掃活動及び交流
全ての学科	・中学3年生を対象とした体験入学 ・近隣小学校との体験交流

#### 【授業の工夫】

ここでは、年2回、すべての学科で実施してい る中学生体験入学の工夫を紹介する。

本校の体験入学は、3年生が中学生に教える ということが特徴となっている。中学生1人に本 校生徒が1人つき、これまでに身に付けてきた知 識や技能を発揮する場となっている。

さらに、同様な活動として、小学生専門交流 や、部活動体験入学を実施している。





# 4. 企業等と連携した、これからの社会を 生き抜くための学習

#### 【目的・ねらい】

「子供たちの65%は、大学卒業後、今は存在 していない職業に就く」\*1「10~20年程度で、 約47%の仕事が自動化される可能性が高い」\*2 など、研究者が述べているように、未来予測が難 しい状況になってきている。

そこで、昨年度より「正解のない課題に対し て、協働して取り組む授業」を開始し、〈自ら価 値を創造できる力〉や〈他者と協働して解決で きる力〉の育成を目指した。

#### ①企業探究コース

#### 【プログラムの流れ】

活動の準 備をする

- オリエンテーションを受け、自分の仕事意識 を知る
- インターンの募集を見て、企業にエントリーす
- 新人研修に取り組み、課題を報告する

会社の仕 事をする

- 初仕事として、「アンケート調査」に取り組み、 「調査レポート」を書く
- 調査結果を報告する
- 各企業からのミッションを受け取る

ミッションに 取り組む

- 企画会議を開き、企画案を考え、完成する
- 中間報告をする
- 企画を見直す

プレゼンテ -ションを する

- ●「プレゼンテーション研修」を受け、準備をする
- プレゼンテーションを行う
- すべての活動を振り返る

この実践は、株式会社教育と探求社が開発し たクエストエデュケーションという教育プログラ ムで、〈実在する企業からミッション(課題)を もらい、チームでその課題解決に向けた企画案 をまとめ、企業に向けてプレゼンテーションする〉 という教育活動である。

「キャリア・チャレンジ」の学習内容の一つで ある「免許・資格取得講座」の中で、企業の社 員証の仮取得を目指した「企業探究コース」と いう講座を設定し、選択希望した生徒がチーム を作って、年間を通して授業を行っている。

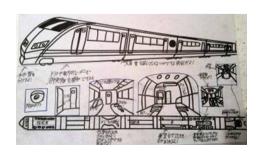
#### 【授業の工夫】

#### ○思考の見える化(視覚的明確化)

「ブレインストーミング」による企画会議で は、模造紙に付箋を貼り、グルーピング化し て、意見を視覚化するようにした。



また、抽象的な言葉の理解や、口頭でのコ ミュニケーション理解に差があるため、自分の



考えを、ミニホワイトボードや画用紙に絵で表 すように工夫した。

#### ○発表の場の確保(共有化)

「ブレインストーミング」を実施する際、人 の批判をしないなどのルールを守りながら、生 徒一人ひとりの発表の場を確保した。また、よ り多様な意見を引き出すために、「しりとり」の 言葉から連想する言葉を付箋に貼り出してい く手法を用いた。

さらに、授業の最後に、各チームの進捗状 況を発表し合うようにし、教員からコメントし た。そして、プレゼンテーションの中間発表や 最終発表では、企業の方から直接コメントを もらえるようにした。





#### ○ ICT の活用

教育と探求社が提供している「エデュカネッ ト」を活用し、生徒がスマートフォンやタブレ ットから「今日のひとこと」を投稿し、校内や 他校の生徒の意見を閲覧するようにして、情 報を交換している。

今後、企業への質問や、チーム内の意見交 換の活用を図っていく予定である。

## ○教員のファシリテーターとしての役割

「正解のない課題」に取り組むため、教員の 役割として、「教える」から「生徒とともに考 える仲間」という姿勢で取り組むようにした。 そして、教員も生徒と同じ一社員として、各チ ームに1名配置して、ミッション(課題)に取 り組んだ。

		テーマ	授業のねらい	アクティブ・ラーニングの手法	ゲスト
経済編	第1回	ハンバーガー屋さんの 店長になってみよう!	ハンバーガー店の出店計画を考える活動を 通して、集客力を決める量的な側面から、経 済価値の差異について理解する	シミュレーション(地図から情報 を読み取る、1日の売り上げを 予測)	
	第2回	流行る店、流行らない 店	集客力を決める質的な側面から、経済価値の 差異について理解する	グルーピング(多様な要因を分 類して名前を付ける)	コンビニ 店長
	第3回	TPPに参加したらどん なことが起きる?	TPPに参加するメリット・デメリットを考える中で、日本経済の未来を考える	ディベート(視点を変えることで、 自分とは異なる価値観を知る)	
	第4回	校則は、誰のためにあ るの?	校則を通して、自由と責任との関係に気づく	ディベート(視点を変えることで、 自分とは異なる価値観を知る)	校長
政治編	第5回	若者の意見を政治に 届けるには?	選挙で自分たちの声をどう世の中に伝える か、考える	ディスカッション	選挙 管理委員
/PR113	第6回	大きな政府・小さな政府	政治の在り方によって税金の徴収額や使い 道が異なることを知り、「米国流」と「欧米流」 の違いを理解する	ディベート	市会議員
いのち編	第7回	自分の「体」は、誰のもの?	カラダをいじる技術と倫理の問題について自 分の意見を持つ	ディベート	
	第8回	もしも友達が自殺しよ うとしていたら?	自殺抑止ロールプレイングを行うことで、自分 なりに自殺についての考えを持ち、自分や相 手の関係を見直すきっかけとする	ロールプレイング	精神科医
	第9回	あなたがもし、母親にな ったら?	「赤ちゃんポスト」と「出生前診断」について、 仲間の意見を聞いて、多様な考え方を理解す る	ディベート	
未来編	第10回	日本はいい国?いやな国?	日本の良いところ・良くないところの両方の面 を考える中で、これからの日本について考える	ディベート(視点を変えることで、 自分とは異なる価値観を知る)	
	第11回	東京オリンピック、どん な大会にしたい?	クラスで協力して東京オリンピックの開会式 の企画書を作成し、プレゼンテーションを行う	プレゼンテーション	
	第12回	人生のエネルギーカー ブを描いてみよう	過去の「失敗・挫折・病気」が、未来の資産になることを理解する	ディスカッション	保護者

#### ②よのなか科

#### 【授業のテーマ】

藤原和博氏が提唱している「よのなか科」\*3 を実践している。テーマは1時間ごとに設定し、 「正解のない課題」に対して、アクティブ・ラー ニングの手法を使って、2 学科 48 名を8名1グ ループに分けて、取り組んでいる。





#### 【授業の工夫】

#### ○教員の役割分担

MT(私)は、指導案の作成・配布資料の 準備と、授業の全体指導を行う。

TT(担当教員)は、各グループに1名配置 し、グループごとのアクティブ・ラーニングの 活動にあたるようにしている。生徒とともに考 え、意見を発表し、司会を行うなど、ファシリ テーター役として活動している。

#### ○外部人材の活用

テーマに応じて、外部人材を活用し、専門 的な立場から、生徒の発言内容や、社会の動 向などについてコメントをもらっている。

昨年度は、校長、コンビニ店長、選挙管理 委員、市会議員、精神科医、保護者がゲスト として授業に参画した。

#### ○ ICT の活用

各グループに1台のタブレット端末と、教員 のタブレット端末とを双方向につなぎ、授業に 活用している。

たとえば、教員から配布した資料に、グル ープで書き出した案を提出させ、全体でプレ ゼンテーションするなど、協働的な学習活動 に生かしている。

# 学習評価

#### 1. 清掃・販売に関する生徒の評価

清掃・販売に関する学習評価の観点は、育成 したい能力や態度を踏まえ、次の4観点とした。

- (1) 仲間と協力し合って活動できたか。
- (2) 自分の役割を理解し、積極的に活動に 取り組めたか。
- (3) 課題が分かり、自分なりに工夫できた
- (4) 活動を通して、働く意味が理解できた か。

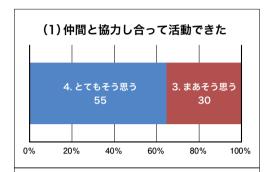
そして、一連の教育活動の終了後、生徒に授 業評価と感想文を記入してもらい、その評価等 に基づき、成果と課題を検証することにしている。

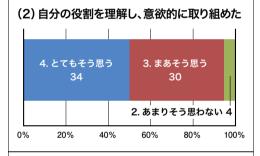
#### ①授業評価

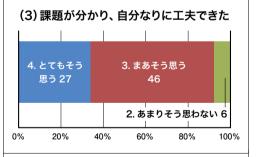
年度末、生徒に1年間の清掃・販売に関する 授業評価を実施した。

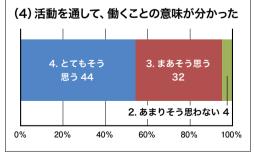
評価項目は、上記の(1)~(4)の4項目で、 それぞれ4段階評価(4…とてもそう思う 3… まあそう思う 2…あまりそう思わない 1…ま ったくそう思わない)で記入してもらった。

昨年度の評価結果は、下記のようである。(1) ~(4) のどの評価項目も、肯定的な評価が9割 以上であり、生徒自身は、能力や態度が身に付 いてきたと感じていることが分かった。









#### ②授業の感想

授業評価とともに、授業の感想を記入してもらっている。授業評価の理由、この1年間で進歩したと思う点、授業の中で感じたことなどについて、自由に記入してもらった。

#### 勉強になったことはコミュニケーション

この1年間で勉強になったことは、仲間の 大切さや地域の方々とのコミュニケーションです。清掃実習では、掃除の楽しさを学び、施設の方に喜んでもらえるように清掃を 頑張りました。販売実習では、地域の方々に製品を売る作業をしました。地域の方々とのコミュニケーションが勉強になりました。

#### • できなかったことができるように

クリーニング・チャレンジの清掃検定で自在ぼうき、スクイジーの使い方がどこまでできているのか知ることができ、できなかったことができるようになることができました。販売会で接客の仕方を知ることができ、回数を重ねていくうちにうまくできるようになりました。

#### • 仲間と協力する大切さ

キャリア・チャレンジでは、普通の授業と 違って、クラス全員で協力してやっていた授 業なので、仲間と協力する大切さが、この 授業を通じて知ることができました。特に大 変だったのが、販売実習でした。他のコー スの商品をどのようにしたら売れるか、どの ようにお客様に説明するか、などが大変で した。自分の就職先で、必要な能力を勉強 できたので、自分のためになりました。

#### 2.「企業探究コース」「よのなか科」の評価

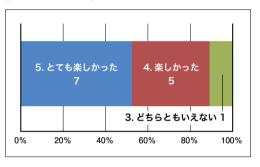
正解のない課題解決型学習は、生徒たちにとって難しすぎるのではないかという不安を私は抱いていた。

そこで、生徒たちには、授業の満足度評価と 感想を実施した。

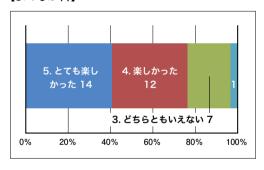
評価は5段階評価(5…とても楽しかった 4 …楽しかった 3…どちらともいえない 2…つまらなかった 1…とてもつまらなかった)で、「過半数以上の生徒が5、4の積極的な満足度を示し、1、2が例外的にいない状況」であれば、授業は成功であると判断することにした。

#### ①授業の満足度評価

#### 【企業探究コース】



#### 【よのなか科】



どちらの満足度評価も、**5**、**4**が8割前後あり、生徒の興味・関心を喚起できたことが分かった。テーマが難しいのではないかという教員の不安とは裏腹に、生徒はこのような授業を望んでいることが分かった。

#### ②授業の感想

#### 【企業探究コース】

### 最後まで話し合うことができた。

毎回、皆の意見を聞いて、こういう考え 方もするんだとか思ったり、他のグループの 発表を聞いてすごいなぁと思いました。発 表も自分のためにもなったし、とても勉強に なりました。どんな発表内容にするか話し合 うのに時間がかかってしまったけど最後ま で話し合うことができたので良かったです。

#### 企業の人が認めてくれている

企画会議の中で話し合った案を、企業の 人たちの前で発表しました。企業の人たち の前で話すのは緊張しましたが、自分たち が考えた案を聞いてもらいたいという気持 ちで、一生懸命プレゼンをしました。企業 の人の感想は忘れてしまいましたが、とても ほめられたことを覚えています。アドバイス をもらった時は、企業の人が認めてくれてる んだと感じました。

#### 楽しかったです

自分は、「企業探究コース」をやって良か ったと思います。「自分たちが世界を変え る」という目標に向かって案を出し合ったり する楽しさ、その案を他の人に聞いてもらっ てアドバイスをもらい、その次につなげる気 持ち。] 年間、楽しかったです。

#### 【よのなか科】

### 独創的な考えが浮かんで

毎週、いろんなテーマがあり、どれも内 容が濃くて、知らなかったことも多々あった けど、それが意味合いにつながって、とて も楽しかったです。グループ内での話し合 いや、個人での独創的な考えがいろいろ浮 かんできて、面白かったです。この1年間、 やっていてとても良くて、できることならま たやりたいと思いました。

#### 反対の立場になって考えること

授業を通して、社会に出ていくためにとて も役に立つ勉強になり、すごく参考になりま した。自分の立場だけでなく、反対の立場 になって考えることが難しかったですが、こ れは大切なことだと思いました。

#### クラスの人と協力して

経済的なことが知れて良かったです。プ レゼンでは、クラスの人と協力してできたの で良かったと思います。分かりやすい授業だ ったので、いろいろと学べることができまし た。1年間ありがとうございました。

#### 3 地域や企業等からの評価

#### ①中学生の評価

すべてのコースで実施している体験入学で の、中学生の感想を紹介する。

#### とてもいい学校だと思いました

私は、とてもいい学校だと思いました。 なぜなら、流山高等学園の生徒の皆さん が、笑顔で迎えてくれているところがとても いい人たちだと思いました。私も、みんなを 笑顔で迎えてあげられる人間になりたいと 思いました。3年生の皆さんに教えてもらっ たことを中学校生活に生かしたいです。

#### びっくりしています

3年牛の先輩がすごくほめてくれたので 楽しんでできました。難しいところも分かり やすく教えてくださったので、ゆっくりだけ ど完成したときにほめられて、自分でも上手 に作れたことにびっくりしています。

参加している中学生の、ほぼ全員が満足してお り、この感想を本校の生徒たちが読むことで、自信 を深め、他に貢献することの喜びを実感している。

#### ②外部講師の評価

校外販売の事前学習講座の外部講師からの 評価である。

#### ○準備段階

社会人を対象としたセミナーと異なり、ど のような内容が適性かが、判断が難しい 状況。野尻先生との事前打ち合わせでお およその方向が確認できたのが良かった。

#### ○実際の授業

生徒さんのグルーピング、個人差を留意 しながら進行したが、サポートに先生方 が入っていただく必要があり、内容と進 行方法について検討が必要。

#### ○成果

POP 作品、随分見やすくレイアウトされ ています。イラストもかわいく描けていま す。実際の売り場での展開が楽しみです。

- ○留意、お願い事項 他のサポート先生方との事前のお打ち合 わせ
- ○社会貢献(CSR)活動されている企業 への積極的アプローチ

特に大手メーカーは様々な活動をされて いるので、広報部、社会環境室等に製品 の紹介(教育活動)についてリーフレッ トなど送付されてはいかがでしょうか。

- グループメンバーへの助言、レスポンスや 代表発表者への声援があり、他者への反 応の良さを確認できた。
- 3年間継続されていることもあり、ノウハ ウの蓄積があり、それを体現することがで きています。

- 生徒の皆さんの新たな可能性を見いだす お伝いができたのではないかと考えます。
- 研修のノウハウの持続。フォローアップ研 修により、格差の是正や体得向上を目指 されると良いと考えます。
- お客様の声を収集し、それを商品製作に 生かしていくなど、次に向けたカリキュラ ムの導入を考えていくことも必要だと思い ます。

講師からの評価は、企業ならではの視点で学 習活動をとらえており、今後の教育活動に参考 になる点が発見できた。

#### ③地域の評価

福祉サービスコースでは、「n CAFE BAKE RY」という地域に開かれた校内喫茶サービスの 活動が、平成26年度千葉日報社主催の「千葉 教育大賞」に輝いた。また、園芸コースの駅前 植栽活動は、市のガーデニングコンテストにおい て2年連続で「市民特別賞」に表彰された。こ のように、地域からも大きな称替と期待を寄せら れる学校になり、「地域の活性化に貢献してい る」との地域住民からの声が多く聞かれるように なった。そして、地域から信頼される学校に変わ ってきている。

# 成果

生徒の授業評価や感想文から、「キャリア・チ ャレンジ」の授業実践は、一定の成果を得るこ とができたと判断している。また、生徒の授業感 想や校内研修会から、次のような点が成果とし て考えられる。

#### ①自己肯定感の醸成

校外販売や校外清掃などにおいて、地域の 方々から感謝の言葉や、お褒めの言葉をいただ くことによって、生徒たちは喜びを実感し、次の 活動をより良いものにしていこうとする意欲や態 度の向上に結び付いた。地域の方から必要とさ れることにより、生徒の自己肯定感がより一層育 まれたといえる。

#### ②仲間と協働する力の向ト

アクティブ・ラーニングの視点から、他者と協働する場を設定することで、チームで協働することの大切さやコミュニケーション力が向上したと自覚する生徒が多く見られた。

#### ③達成感の実感

学校の学習内容と社会とを関連付け、実社会に関心を持てるように、題材に深く関わる企業等の授業参画を積極的に行ってきた。その結果、できなかったことができるようになるなど、生徒自身が達成感を実感できることが多くなった。

#### ④価値を創造する能力の発見

「企業探究コース」や「よのなか科」の授業 実践で、生徒が主体的に新しい企画立案やプレゼンテーションなどができるようになり、生徒の 大いなる可能性に気づくことができた。また、こ の実践を通して、教員の役割も変わっていくこと を感じた。

#### ⑤教員の意識改革

学校設定教科を開設してから約3年間は、「忙しすぎる」、「ねらいが分からない」、「やめた方がいい」等々の教員からの批判がとても多かった。私にとって、教員の意識改革が一番の課題であった。

その間、教員との対話を継続しながら、研究 授業や全国公開研究会で実践発表を行ってき た。また、毎年度、学習内容の改善に取り組み、 昨年度からは、清掃・販売に関する教育活動を すべて1・2年に移行して、すべての教員が授業 に関わるようにしてきた。

その結果、教員の意識に徐々に変化がみられ、 今年度行われた校内研修会では、授業を高く評価する意見や、前向きな改善案が多く出された。 学校全体で地域等と連携・協働する教育活動を 推進していこうという意識改革が進んできたこと を感じた。

# 6 おわりに

この実践報告は、地域や企業等の方々、そして校長先生をはじめとする様々な教員たちの協力と支援がなければ、まとめられなかったものである。改めて感謝申し上げたい。

そして何より、この授業実践に勇気を持って取り組むことができたのは、生徒の授業評価と感想 文のおかげである。生徒の声や姿に感動したり、 励まされたりしたことが、実践を進める上での一番の支えであった。

今後も、生徒が社会の中で自らの価値を創造 しながら、幸せな人生を送ってくれることを願い、 社会全体で生徒を支援していく授業を実践して いきたい。

#### 注釈

- \*1 キャッシー・デビットソン氏(ニューヨーク市 立大学大学院センター教授)
- \*2 マイケル・A・オズボーン氏(オックスフォード大学准教授)
- \*3 よのなか net http://www.yononaka.net

# 講 評

#### 【国語教育】 斎藤 孝 (明治大学教授)

今年度は21件と例年に増して多数の応募があった。新学習指導要領で重視されるアクティブ・ラーニング、協働的な学習、情報通信技術の活用を意識した実践的かつ意欲的なものが目立った。選考では、授業の目的や方法にオリジナリティーなどがあるか審査した。現場の先生方が様々な工夫を凝らしていることが伝わり、好印象であった。

#### 【算数・数学教育】 秋山 仁 (東京理科大学教授)

応募の内訳は、アクティブ・ラーニングに関するものが3件、魅力ある教材開発が1件、授業改善の工夫や方法が6件、能動的な学びに結びつけるプロジェクト学習が3件の全13件。汎用性や有効性、創意などを選考基準にした。多忙な学校現場で、志を持って数学教育に取り組む先生方に敬意を表したい。

#### 【理科教育】 滝川 洋二 (東海大学特任教授)

応募は17点あり、全体としてレベルが高くなった。授業の改善の成果を紹介するものが多かった。テーマは「女子生徒の理系進学を進める」、「理科室の廊下に『ミニ科学館』を作る」、「ホタルの生息条件を調べる」など視点も幅広かった。他の研究との比較や特徴が明確でないものもあり、今後の課題にしてほしい。

#### 【社会科教育】 谷川 彰英 (筑波大学名誉教授)

今回は応募が15件に伸び、力作が多かった。8件あった「主権者教育」の実践報告は模擬選挙関連が大半だった。公民(市民)的資質を育成する深い考察は少なく、今後の発展に期待するところが大きい。気がかりなのは、歴史的分野の報告がなく、地理も1件だったこと。これらの分野で、さらに充実した成果が期待される。

#### 【生活科・総合学習】 市川 博 (横浜国立大学名誉教授)

報告数が17に増加し、教科の枠を超えた多様な課題・視点の優れた実践が多く寄せられた。今年の特色として、地域の歴史の継承と新たな創生に取り組んだ実践が多く、子どもたちが主体的に活動・成長する姿や指導の手立てが丁寧に書かれていた。そうした熱意ある取り組みの成果を今後も期待したい。

#### 【健康・体力づくり】 田中 喜代次 (筑波大学教授)

応募は2件で、例年になく少数だった。いずれの報告も、健康づくりに関する優れたもので、それぞれの小学校が誇れる成果をあげている。優秀賞の「家庭・地域と連携した健康づくり」は、児童に健康生活の基本行動を徹底させている点に感銘を受けた。スポーツ活動や体力づくりに特化したユニークな報告を今後期待したい。

#### 【外国語・異文化理解】 田近 裕子 (津田塾大学教授)

応募は6件と例年より少なかった。英語指導の優れた工夫が盛り込まれた報告も複数あったが、まとまった取り組みとして、整合性のあるものは少なかった。「あれをしました」「これをしました」というだけでなく、それぞれの工夫がどう関わり合って、全体の取り組みを形成するのかが整理できていると良い。

#### 【児童生徒指導】 河野 義章 (東京学芸大学名誉教授)

今回から「教育カウンセリング」部門と一緒になって、11件の応募があった。不登校の子どものカウンセリングを扱った2件の報告は、いずれも学校に派遣されている教育相談員によるものだった。学校ぐるみの児童生徒指導の取り組みでは、学校長や教頭といった管理職のリーダーシップが目立っていた。

# 講 評

## 【カリキュラム・学校づくり】 佐藤 学 (学習院大学教授)

本年度は秀逸な実践報告が多かった。研究テーマは、アクティブ・ラーニング、地域文化の継承、情報技術の活用など 多岐にわたり、いずれも授業とカリキュラムの革新を追求していた。新しい傾向として、特別支援を必要とする生徒の社会 的自立、学校図書館の活用によるカリキュラム開発が見られたのは喜ばしい。

#### 【地域社会教育活動】 佐藤 一子 (東京大学名誉教授)

17件の応募があった。報告者は、学校と連携する「放課後子ども教室」、漁業協同組合、NPO法人、公民館、博物館、社会福祉法人、個人など多彩である。地域の自然と文化の価値を発見する体験学習と異世代交流が重視されている。実践報告を通じて、各地で活発な努力が行われている様子がうかがわれる。

#### 【特別支援教育】 藤田 和弘 (九州保健福祉大学教授)

応募数は例年の倍近い20件あった。実践報告の対象年齢は幼児、児童、生徒のみならず、学齢超過者まで及んだ。テーマは指導法、障害理解、キャリア教育、インクルージョン(社会的な包み込み)のほか、主権者教育、地域や企業との連携など新たな取り組みが見られた。優れた報告が多く、選考が難しかった。

#### 【音楽教育】 山下 薫子 (東京芸術大学教授)

中学校教諭による2件の応募にとどまった。どちらも、音楽科教育の課題を真正面から受け止めて、学習内容と社会や文化との関連づけを図る意欲的な提案だったが、入賞には至らなかった。今後は、独自の視点をもち、学校内外の人々や場との関係を強化し、音楽や芸術、文化のもつ根源的な力を問い直すような実践の報告を期待したい。

#### ■ 第65回読売教育賞部門別応募件数の内訳(カッコ内は前年度)

大	00 (11 4)
※前年度は教育カウンセリング(6)も	
①音楽教育2 (前年度は美術教育=	=6)
①特別支援教育······20 (前年度は幼児教育·	·保育=9)
⑩地域社会教育活動17(13)	
⑨カリキュラム・学校づくり19 (前年度は学校づくり)	)=13)
⑧児童生徒指導	
⑦外国語・異文化理解 6 (前年度は外国語教育	育=7)
⑥健康・体力づくり・・・・・・・・・・・・2(前年度は保健・体育	
⑤生活科·総合学習 ·····17(9)	
④社会科教育15(11)	
③理科教育17 (9)	
②算数·数学教育 ······13(9)	
①国語教育21(12)	

# 第65回読売教育賞 優秀賞受賞者

【国語教育】

福島県郡山市立郡山第五中学校教諭

柳沼 智恵

茨城県立水戸工業高校教諭

金沢 容子

【算数・数学教育】

德島市立城東中学校教頭

斎藤 大輔

【社会科教育】

渋谷教育学園渋谷中学校(東京都渋谷区)

藤田憲宏(代表)

【生活科・総合学習】

埼玉県所沢市立宮前小学校教諭

木下 智実

【健康・体力づくり】

東京都品川区立第四日野小学校主幹養護教諭

足助 麻理

【外国語•異文化理解】

東京都立白鷗高校主任教諭

小林 翔

【カリキュラム・学校づくり】

山梨県南アルプス市立若草小学校長

沢登 一浩

群馬県高崎市立乗附小学校

野村 裕子 (代表)

【地域社会教育活動】

兵庫県立姫路特別支援学校分教室教諭

田中 博之

【特別支援教育】

宮城県立角田支援学校主幹教諭

大坂 聡

# 読売教育賞 最優秀賞一覧 受賞者名簿

─第1回 昭和27年(1952) ~第64回 平成27年(2015) ─

#### ■ 第1回 1952年(昭和27年)

\_ 〈小学校〉

千葉県館山市立北条小学校・校長 和泉 久雄 香川県仲多度郡筆岡小学校・校長 杉岡 茂 山口県下関市立本村小学校・校長 村田 幸一 〈中学校〉

三治 秋田市立久保田中学校・教諭 小西 孝義 福岡県築上郡椎田中学校・教諭 加来 〈高等学校〉

北海道立倶知安高等学校・教諭 桑原 義晴 島根県立松江産業高等学校・校長 鎌田 武 〈盲ろう学校〉

宮城県立盲学校長兼ろう学校・校長 赤木 将為

#### 第2回 1953年(昭和28年) 〈道徳教育〉

山梨県甲府市立穴切小学校·校長 米山 圭蔵 〈社会科〉

大分県大分市立春日町小学校・校長 倉成 英敏 香川県香川大学附属坂出小学校・教諭 佐柳 正 神奈川県足柄上郡福沢小学校・校長 井上喜一郎 〈基礎能力〉

新潟県北魚沼郡広瀬村立中条小学校・校長 文松 品田 山口県美祢郡大嶺町立麦川小学校・校長 豊島 誠 秋 田 市 立 中 通 小 学 校・ 教 諭 浅野 ヒナ 〈特殊教育〉

新 潟 市 立 舟 栄 中 学 校・教 諭 与吉 中村 京都市立生祥小学校・教諭熊谷 君子 愛知県立名古屋ろう学校・校長 今井 柳三 〈学校新聞〉

新潟県南蒲原郡鹿峠村立中浦小学校·教諭 磯野 修二

#### ■ 第3回 1954 年 (昭和 29 年) 〈作文教育〉

長野県上水内郡栄村栄小学校・教諭 大日方千秋 〈職業教育〉

愛知県碧南市立新川中学校・校長 神谷 義雄 〈へき地教育〉

新潟県仙田村立十日町高校定時制課程仙田分校・主任 保坂安太郎 〈理科教育〉

秋田県天王町立天王中学校・教諭 片岡太刀三 〈勤労青少年教育〉

島根県大原郡日登村立日登中学校・校長 加藤歓一郎 〈新聞教育〉

大阪府堺市立英彰小学校・教諭 岡本 園子 〈幼稚園教育〉

兵庫県明石市立播陽幼稚園·園長 内匠 ちゑ 〈特殊教育〉

東京都世田谷区立青島中学校・教諭 小杉 長平 山口県立ろう学校・校長泉 吉美 長崎県北松浦郡佐々町立口石小学校·教諭 近藤 益雄

#### ■ 第4回 1955 年 (昭和 30 年)

山口県美祢郡秋芳町立嘉万小学校・代表 原川 馨 〈算数・数学教育〉

静岡県浜名郡庄内村立村櫛小学校・校長 山下百十二 完二 滋賀県近江八幡市立八幡小学校・校長 坂口 〈幼児教育〉

麗和幼稚園(埼玉県浦和市)・園長 中島 修 〈普通学級の遅進児指導〉

山梨県北都留郡上野原町立島田小学校・校長 塩野 隆洋 〈定時制教育〉

北海道立前田高等学校・教諭 行本

〈PTA活動〉

三重県飯南郡大河内第二小学校PTA・代表 三 崎 邦次 〈健康教育〉

香川県小豆郡内海町立安田小学校・校長 久留島武保

〈教具の自作・改作・利用 (授業研究)〉 新潟県三条市三条高等学校・教諭 有本 兵庫県伊丹市教育委員会·指導主事 田辺 綱雄

#### 1956年(昭和31年) ■ 第5回

〈家庭科教育〉

新潟県南蒲原郡大面村立大面中学校・教諭 田中 〈学校と地域社会の共同活動〉

山口県徳山市立今宿小学校育英会・会長 清水 勇 〈遠足・修学旅行〉

埼玉県浦和市立大原中学校·教諭 荒幡 義輔 〈理科教育〉

新潟県南魚沼郡大和村立大崎中学校·校長 桑 原 理肋 埼玉県川越市立大東東小学校·教諭 相原 健. 〈視覚教育〉

秋田県大曲市立大曲小学校・校長 東海林和美 〈クラブ活動〉

新潟県柏崎市立第二中学校・校長 村山 〈定時制と技能者の養成〉

兵庫県立北兵庫高校定時制·主事 林 博夫

#### ■ 第6回 1957 年 (昭和 32 年) 〈学校図書館経営〉

玄 千葉県香取郡栗源町立栗源小学校・校長 松本 〈算数・数学教育〉

新潟県新潟市立万代小学校·校長 竹山洋一郎 〈美術教育〉

大阪府堺市立榎小学校・教諭 藤岡 静子 〈国語教育〉

徳島大学学芸学部附属中学校・教諭 福岡 八郎 〈外国語教育〉

秋田県雄勝郡羽後町立西馬音内中学校・教諭 岩佐 利克 〈学級経営〉

福島県信夫郡吾妻村立野田小学校・代表 内池 幸吉 〈進路指導〉

山梨県立甲府工業高校・校長 古屋 一推 〈勤労青少年教育〉

広島県立神辺高校大津野分校・主任 木村 国夫

#### 第7回 1958 年(昭和 33 年)

〈小学校の算数・理科教育〉

宮城県栗原郡尾松小学校・代表 大宰 陸郎 〈ローマ字教育〉

秋田大学学芸学部附属小学校·教諭 斎藤千弥男 〈音楽教育〉

石川県七尾市立西湊小学校・代表 山崎 常雄 〈映画教育〉

福岡県久留米市立西国分小学校・教諭 市村 一夫 〈高校のクラブ活動〉

新 潟 県 立 中 央 高 校・校 長 島津 政雄 〈特殊教育〉

奈良県奈良市立鼓阪小学校·教諭 西村 幸治 福島市立福島第四中学校・教諭 良彦 〈定時制通信教育・技能者養成教育〉

兵庫県立佐用高校平福分校・主任 春名 一明 〈成人教育活動〉

埼玉県北埼玉郡騎西町立種足中学校·教諭 岡 田 正明 大分県南海郡上野婦人学級・運営委員長 工藤 炒

#### 第8回 1959 年 (昭和 34 年)

〈学校経営〉

· 千葉県香取郡笹川中学校・校長 柳沢 徹夫 〈道徳教育・生活指導〉

大阪市東成区玉津中学校·校長 直原 兵平 〈科学教育〉

愛媛県八幡浜市立大島中学校·教諭 乗松 尚 北海道立函館中部高校·教諭 渡辺 英郎 〈作文教育〉

新潟県佐渡郡金井小学校・教諭 吉原 清 〈作文教育〉

山口県大島郡久賀高校・教諭 岡田 貞義 〈工作教育〉

青森県中津軽郡相馬小学校藍内分校·教諭 小島 良蔵 〈体育教育〉

埼玉県秩父郡間明平中学校・校長 近藤八十夫 〈テレビ教育〉

新潟県東頸城郡松之山小学校·校長 関谷藤四郎 〈勤労青少年教育〉

香川県立琴平高校定時制・主事 三好 和夫 〈PTA活動〉

福島県信夫郡湯野小学校・校長 今井 豊蔵

# 第 9 回 1960 年 (昭和 35 年)

〈学校経営〉

青森県佐井小学校川目分校・教諭 沢田半右衛門 〈道徳教育・生活指導〉

大分県大分市立滝尾小学校・教諭 二宮 重幸 〈科学技術教育〉

岡山県井原市立井原中学校・教諭 塩田 啓二 山口県長門市水産高校・教諭 黒子 三良 〈歴史教育〉

山梨県山梨市立加納岩中学校・教諭 石原 国光 〈読書指導〉

大阪府大阪市立滝川小学校・教頭 浜中 重信 〈複式教育〉

〈候式教育〉 徳島県鳴門市立島田小学校室分校・教諭 西条 益夫 〈養護教育〉

(基限が日/ 兵庫県豊岡市立豊岡北中学校・教諭 藤本 晴雄 〈勤労青少年教育〉

新潟県両津市立東中学校·教諭 小野 良泰

#### ■ 第 10 回 1961 年(昭和 36 年) 〈学校行事〉

佐賀県佐賀郡春日小学校·代表(校長) 鶴田 辰次 新潟県東頸城郡下保倉小学校·校長 坂井 勝司 〈外国語教育〉

京都府京都市立九条中学校·教論 山田 芳夫 〈校外生活指導〉

・ 千葉県銚子市立明神小学校・代表(校長) 堀 竜之助 〈中・高校の理科教育〉

岐阜大学附属中学校・教諭 近藤 芳彦 福岡県立糸島高等学校・教諭 若宮 義次 〈クラブ活動〉

宮城県柴田郡村田町立沼辺中学校・教諭 庄司 正明 〈盲・ろう教育〉

福岡県立福岡ろう学校・教諭 今任 統夫 〈スポーツ指導〉

佐賀県立佐賀高等学校・教諭 野口 七郎 〈就職後の補導〉

宮城県栗原郡一迫中学校・教諭 菊地 義彦 〈高校の産学協同〉

北海道立岩見沢農業高校・教諭 清水 小十

■ 第 11 回 1962 年(昭和 37 年) 〈職員会議〉

新潟県新潟市立沼垂小学校・校長 松浦 雅公 〈小学校の社会科(とくに地理教育)〉

徳島県鳴門市立撫養小学校・教諭 河野 睦也 〈国語教育(とくに文法・表記の指導)〉

静岡県浜名郡北浜中学校·教諭 鈴木 波男 〈技術科教育〉

埼玉県熊谷市立大原中学校・教諭 佐藤 一司 福岡県八幡市立中央中学校・代表(校長)豊田 喜祐 〈中学生の生活指導(とくに進学・非行児指導)〉

徳島県名東郡佐那河内中学校・校長 速水 清一 埼玉県浦和市立岸中学校・教諭 野村 英一 〈盲教育〉

東京教育大学附属盲学校・教諭 河合 久治福井県立盲学校・教頭 今川 勇 〈農業高校の再編成〉

富山県立富山産業高校・校長 久世 幸治

#### ■ 第 12 回 1963 年(昭和 38 年) 〈学校経営〉

長野県大町市立大町小学校・代表(校長) 松田 吉辰〈社会科(とくに政治・経済・社会)〉

宮城県仙台市立東華中学校・教諭 白石 和巳 〈話しことばの指導〉

徳島県徳島市立富田小学校・教諭 宮崎記代江 〈科学教育〉

神奈川県足柄下郡理科教育研究会・代表 神保 憲朗 福岡県北九州市立荻ヶ丘小学校・教諭 生野 ヒサ 〈道徳教育〉

埼玉県熊谷市立荒川中学校・教頭 中村 邦夫 宮城県仙台市立北六番丁小学校・教諭 渡辺 健二 〈ホームルーム〉

徳島県立徳島商業高校·代表(校長) 森 孝三郎 〈進学指導〉

新潟県刈羽村立刈羽中学校·代表(校長) 小林 睦治 〈特殊教育〉

千葉県千葉市立蘇我中学校・教諭 大石 三郎 大分県大分市立新生養護学校・校長 髙橋 矩夫 〈定時制・通信教育〉

千葉県立千葉東高等学校·代表(校長) 石毛 貞雄 〈教育委員会〉

長野県教育委員会教学指導課·代表(課長) 太田 美明 島根県出雲市教育委員会·代表(教育長) 長岡 豊盛 〈成人教育活動〉

高知県室戸市立羽根中学校・教諭 吉 本 珖

#### ■ 第 13 回 1964 年(昭和 39 年) 〈小中学校の国語教育〉

- 千葉県山田町立八都小学校・代表(校長) 小林 邦治 〈高校の数学・理科教育〉

- 千葉県習志野市立習志野高校・代表(校長) 山口 久太 〈小中学校の道徳〉

新潟県出雲崎町立西越中学校·代表(校長)安達 孝司 〈特別教育活動〉

山口県立柳井商工高校·代表(職業指導主事) 守政 輝雄 〈幼稚園教育〉

福岡県北九州市立小倉幼稚園·代表(園長) 黒木 道子 〈辺地教育〉

山形県東根市立東郷小学校入分校・教諭 柏 倉 博 奈良県奈良市立田原小学校杣ノ川分校・教諭 大東 幸雄 〈教育委員会の活動〉

奈良県教育委員会指導課・代表 (課長) 今西 宗一

〈教育研究所の活動〉

信濃教育会教育研究所:代表(所長) 上田 新潟県立教育研究所・代表(所長) 小林 正直

■ 第 14 回 1965年(昭和40年) \_\_ 〈小中学校の作文教育〉

埼玉県川越市立大東西小学校・教諭 大橋 清一 〈小中学校の社会科教育〉

兵庫県小中学校郷土学習研究グループ・代表

(兵庫県三原郡緑町立広田中学校・校長) 野上 安郎 〈小中学校の理科教育〉

佐賀県佐賀市立鍋島小学校·代表(校長) 古賀 清次 奈良県五条市立阿太小学校・教頭 山口 裕文 〈小中学校の音楽教育〉

熊本県熊本市立白川小学校・教諭 松村きみ子 〈進路指導〉

徳島県立池田高等学校·代表(校長) 岩橋 昌 〈辺地教育〉

岐阜県馬瀬村立中切小学校川上分校・教諭 昭雄 岩倉 〈辺地教育〉

岐阜県馬瀬村立中切小学校川上分校・教諭 岩倉 縫子 秋田県矢島町立矢島小学校金ヶ沢分校・教諭 遠藤 昌夫 〈特殊教育〉

千葉市立院内小学校 言語治療教室・主任 大熊 喜代松 〈定時制高校における学習指導〉

福岡県立門司高等学校・教諭 相川

#### 1966年(昭和41年) 第 15 回

〈学級経営における能力別指導〉

富山県滑川市立北加積小学校・代表(校長) 井原 正則 〈小中学校の国語教育〉

静岡県新居町立新居小学校・代表(校長) 山下百十二 〈理科教育〉

岐阜県大垣市立宇留生小学校·代表(校長) 正一 鳥取県米子市立弓ケ浜中学校・教諭 岸 岡 務 〈中高校の外国語教育〉

山梨県立甲府南高校・代表(校長) 日向 誉夫 馨

奈良県北葛城郡新庄町立新庄小学校・教諭 前 田 〈体育〉

愛知県丹羽郡大口町立大口北小学校·代表 (校長) 奥 村 久男 〈辺地教育〉

山形県朝日町立立木小学校木川分校·教諭 鈴木 基介 〈成人教育〉

愛媛県立松山工業高校定時制・主事 田井能喜三郎 〈教育研究所の活動〉

群馬県教育研究所・代表 (所長) 佐野 金作 〈教育委員会の活動〉

大分市教育委員会・代表(教育長)池見 喬

#### 第 16 回 1967年(昭和42年) 〈学校経営〉

千葉県佐原市立佐原中学校・校長 本宮 源一 〈幼児教育〉

奈良県大和郡山市立郡山幼稚園・園長 花木 イソ 〈小中学校の算数・数学教育〉

鹿児島県立養護学校・教諭 高浜正海郎 〈中学校の歴史教育〉

静岡県田方郡韮山町立韮山中学校・教諭 斎藤 宏 〈小中学校の道徳教育〉

奈良県奈良市立鼓阪小学校・校長 奥西 徳義 〈学校給食の指導〉

神奈川県鎌倉市立御成小学校・校長 林 邦雄 〈安全教育〉

三重県伊勢市立修道小学校・校長 野呂 敏 〈辺地教育〉

鹿児島県大島郡十島村立中之島小日之出分校・教諭 芝 貞夫 鹿児島県大島郡十島村立中之島小日之出分校・教諭 芝 礼子 〈特殊教育 (精薄児の指導)〕

北海道旭川市特殊学級担当者会・代表 橋本 勝朗 〈教育研究所の活動〉

新潟県新潟県市立教育研究所・所長 阿部 守衛 〈公民館の活動〉

北九州市教育委員会戸畑支所社会教育課(福岡県) 林 栄代

#### 第 17 回 1968 年 (昭和 43 年) 〈学校経営〉

山梨県甲府市立南西中学校·校長 井上 英信 新潟県新発田市立第一中学校・校長 菅井 豊吉 〈中学高校の国語教育〉

香川県立観音寺第一高等学校・教諭 佐藤 寛志 〈小学校中学年の社会科教育〉

岐阜県洞戸村立洞戸小学校・教諭 角竹 弘 〈小中学校の理科教育〉

熊本県八代市立第一中学校・教諭 蓑田啓一郎 高知県高知市立初月小学校・教諭 中山 湧水 〈中学高校の外国語教育〉

福井県福井市立明道中学校・校長 林 繁樹 〈小中学校の道徳教育〉

茨城県日立市立大久保中学校・教諭 沢畑 〈安全教育〉

広島県賀茂郡西条町立西条中学校・校長 下 崎 実 〈辺地教育〉

長崎県小値賀町立小値賀小学校六島分校・教諭 田中 竜美 〈身体障害児の教育〉

山梨県立盲学校・校長飯島 五郎 〈進路指導〉

千葉県立千葉商業高等学校・校長 吉井 正男 〈PTA活動〉

名古屋市立有松小学校 P T A · 会長 水谷 善彦 〈教育委員会の活動〉

岐阜県加茂郡東白川村教育委員会・教育長 安江又右ヱ門

#### 第 18 回 1969 年(昭和 44 年) 〈小学校の算数教育〉

香川県観音寺市立南小学校・校長 長尾 茂 〈小中学校の理科教育〉

青森県八戸市立吹上小学校・校長 佐藤政五郎 〈中学高校の国語教育(特に読解指導)〉

兵庫県立福崎高等学校・教諭 福島 浩之 〈小中高校の芸術教育〉

秋田県大曲市立大川西根小学校・校長 鎌田 开.郎 新潟県岩船郡山北町立下海府中学校・教諭 青木 〈小中高校の保健体育〉

千葉県野田市立宮崎小学校・校長 平野 壴 — 〈小中高校の道徳教育〉

大分県日田市立三芳小学校・校長 佐藤誠一郎 〈小中高校の特別教育活動〉

群馬県沼田市立蓮根中学校・校長 大川 善夫 〈辺地教育〉

香川県塩江町立塩江小学校樺川分校・主任 岡 田 弘治 〈成人教育〉

黄十字学園(東京都台東区)・責任者 松永 健哉 福岡県山門郡大和町栄皿垣大津 勇 〈教育研究所の活動〉

富山県福光町教育センター・所長 渡辺 諭吉

#### 第 19 回 1970年(昭和45年)

〈小中学校のカリキュラム編成〉

・ 千葉市立本町小学校・代表(校長) 山本 喜治 〈教育機器の利用(教育工学)〉

北海道亀田郡大野町立萩野中学校・校長 岡村 達 〈小学校の国語教育(特に読解または作文)〉

青森県八戸市立八戸小学校・校長 川村 義一 島根県松江市立乃木小学校・教諭 渡辺 郁子 〈中学高校の数学教育〉

宮城県仙台市立東華中学校・教諭 南 明子 〈高校の理科教育〉

埼玉県立秩父農工高等学校・教諭 福島 義一 〈小中高校の芸術教育〉

千葉県柏市立柏第一小学校·代表(校長) 富沢 定一 広島県東部図工美術教育連盟・代表 来山 武雄 〈中学高校の進路指導〉

島根県松江市立第四中学校・代表(校長) 田中 邦男 〈小中高校の国際理解の教育〉

埼玉県立戸田高等学校・教諭 小川 隆通 〈教育委員会の活動〉

· 青森県三戸郡三戸町教育委員会·教育長 松尾 禎吉 〈幼児教育〉

福岡県北九州市立中島幼稚園・園長 原田 寛子

#### ■ 第 20 回 1971 年(昭和 46 年) 〈小中学校の国語教育〉

茨城県石岡市立府中小学校根当分校・教諭 田崎 しづえ 〈算数・数学教育〉

熊本県山鹿市立山鹿小学校・教諭 瀬口 忠一 〈理科教育〉

東京都文京区立第九中学校·教諭 刈込 実 福岡県北九州市立米町小学校·代表(校長) 山本 桂一 〈社会科教育〉

香川大学教育学部附属坂出中学校・教諭 作花 典男 〈小中高校の芸術教育〉

千葉県長生郡一宮町立一宮小学校・代表(校長) 森 芳男 宮城県仙台市立西多賀小中学校療養所分校・代表(教頭) 半沢 健 〈小中高校の体育〉

秋田県南秋田郡昭和町立豊川小学校·代表(校長) 若松 研一 〈道徳教育〉

徳島県美馬郡半田町立半田小学校・教諭 佐藤 周子 〈公民館の活動〉

| 岡山県真庭郡新庄村公民館・館長 畔高 義正 | 〈高校の定時制通信制教育〉

新潟県立小出高校定時制·主事 後藤 三夫

#### ■ 第 21 回 1972 年(昭和 47 年)

〈小中学校の文学教育〉

広島県世羅町立大田小学校·代表(校長) 山口 博人 〈小学校の算数教育〉

山形県西川町立入間小学校·代表(校長) 槇 清 哉 〈理科教育〉

《生社教育》 長野県松本市立旭町中学校・教諭 倉田 稔 兵庫県姫路市立城北小学校・教諭 城谷 義子 〈小中高校の社会科教育〉

青森県立弘前中央高校定時制・教諭 川口 光勇 〈小中高校の芸術教育〉

秋田県平鹿郡雄物川町立里見小学校・校長 能登谷 清 〈教育機器の導入と利用〉

愛媛県立今治工業高校・教諭 大内 信俊 〈辺地教育〉

石川県石川郡河内村立河内小学校・教諭 福岡 克美 〈成人教育活動〉

岐阜県郡上郡明方村立明方中学校・校長 金子 貞二 千葉県銚子市立若宮小学校PTA・代表(会長)常盤 豊司 〈盲ろう教育〉

東京都渋谷区立大向小学校·代表(教諭) 北原 貞治 〈幼児教育〉

島根県八東郡穴道町立穴道幼稚園·代表(教諭) 新田 旭子

# ■ 第 22 回 1973 年(昭和 48 年)

〈小中学校の国語教育〉

島根県簸川郡多伎町立岐久小学校・教諭 岸田千代子 徳島県小松島市立千代小学校・教諭 杉本 恒子 〈理科教育〉

岐阜県加茂郡七宗町立神淵小学校·教諭 渡辺 住夫 徳島県立池田高等学校・教諭 梅本 利広 〈情操教育〉

千葉県館山市立第二中学校·代表(校長) 星谷 悌二 〈過疎地教育〉

宮崎県西郷村立山瀬小学校長崎分校·代表(校長) 佐藤九州男香川県丸亀市立手島小学校·代表(教諭) 福浜 一雄〈特殊教育〉

宮城県仙台市立立町小学校·代表(校長) 伊藤 竜夫山 形 県 立 山 形 聾 学 校・教 諭 鏡隆左エ門 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉

大分県臼杵市立市浜幼稚園·園長 篠田美佐子

# ■ 第 23 回 1974 年 (昭和 49 年)

〈小学校の国語〉

高知県吾川郡伊野町立伊野小学校・教諭 山脇 映子 〈小中高校の算数・数学教育〉

兵庫県姫路市立城陽小学校・教諭 高田クミ子 〈小中高校の理科教育〉

徳島県徳島市立高校・教諭 佐々木靖典 〈小中高校の社会科教育〉

広島県瀬戸田町立瀬戸田小学校・代表(校長) 伊藤 準蔵 〈小中高校の音楽教育〉

山形県立山形西高校·代表(校長) 笠原 二郎 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉

しらかば保育園(神奈川県横須賀市)・園長 浜田 幸生 ルーテル愛児幼稚園(秋田市)・代表(園長) 片桐 格 〈肢体不自由児教育〉

千葉県立桜が丘養護学校・教諭 斎藤 皓子 佐賀県立金立養護学校・教諭 米光 光子 〈成人教育活動〉

奈良県榛原町教育委員会・代表(社会教育課長) 梶野 雄介 〈教育委員会の活動〉

德島県那賀郡木頭村教育委員会·代表(教育長) 走川 輝一 奈良県教育委員会·代表(教育放送課係長) 大西 照雄

# ■ 第 24 回 1975 年(昭和 50 年)

〈小中学校の国語教育〉

福島県いわき市立錦小学校・教諭 佐々木義勝 〈小中高校の算数・数学教育〉

宮崎県東日杵郡西郷村立山瀬小学校長崎分校・教諭 斎藤 敬亮 〈小中学校の理科教育〉

長野県伊那市立伊那中学校·教諭 征矢 哲雄 〈道徳教育〉

千葉県旭市立第一中学校・代表(校長) 江ヶ崎 貞雄 〈美術教育〉

岩手県釜石市立八雲小学校·代表(校長) 畠山 理助 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉

山形県立山形盲学校·代表(校長) 鈴木 栄助 〈肢体不自由児教育〉

千葉県千葉市立松ヶ丘小学校・教諭 山本 朋江 〈成人教育活動〉

京のおんな大学・主宰富士谷あつ子

■ 第 25 回 1976 年 (昭和 51 年)

千葉県銚子市立興野小学校・代表(校長) 堀 竜之助 徳島県徳島市立加茂名小学校・教諭 以西 久代 〈小中高校の算数・数学教育〉

群馬県渋川市立西小学校・教諭 小林巳喜夫

〈小中学校の理科教育〉

栃木県宇都宮市立清原中学校・教諭 小筆恵美子 千葉県夷隅郡大多喜町立上瀑小学校・代表(校長) 大岩富士雄 〈小中高校の社会科教育〉

神奈川県平塚市立港小学校·代表(教諭) 小室 修二 〈小中高校の保健室活動〉

福井県大野市立下庄小学校・養護教諭 金森 恭子 埼玉県大宮市立東大成小学校・養護教諭 桜井すぐ代 〈進学問題にどう対処したか〉

栃木県立鹿沼高等学校・教諭 小谷野力勇 青森県八戸市立第一中学校・校長 松村 剛 〈在学青少年の学校外教育活動〉

佐賀県佐賀郡東与賀町立東与賀中学校·代表(前校長) 納富 兼次 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉

誠信幼稚園(広島県福山市)・代表(教諭) 檀上 順子

■ 第 26 回 1977 年(昭和 52 年) 〈小中高校の国語教育〉

山口県光市立室積小学校・代表(校長) 藤山 敏見 岩 手 県 立 杜 陵 高 校・教 諭 松 浦 好 〈小中高校の算数・数学教育〉

滋賀県甲賀郡甲西町立岩根小学校・教諭 佐川 愛子〈中高校の理科教育〉

大分県立中津北高校・教諭 安倍 慎 〈小中高校の保健室活動〉

長崎県立長崎東高校・養護教諭 高原 二三 〈小中高校の情操教育〉

熊本県熊本市立西原小学校·教諭 武藤 哲雄 〈障害児教育〉

茨城県日立市立大久保小学校

「ことばの教室」・代表(教諭) 丸山 勝雄 〈過疎地教育〉

新潟県中魚沼郡津南町立中津峡小学校・代表(校長) 庭 野 忠 男 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉

鳥取県倉吉市立上井第一保育園・代表(主任保母) 石賀サチ子 〈教育研究所の活動〉

北海道教育研究所連盟·代表(委員長) 斎藤 実

■ 第 27 回 1978 年(昭和 53 年)

〈小中高校の国語教育〉

滋賀大学教育学部附属小学校・教諭 吉永 幸司 〈小中高校の算数・数学教育〉

大分県別府市立鶴見小学校・教諭 松島桂太郎 〈小中高校の理科教育〉

栃木県立宇都宮高校・教諭 篠原 尚文 〈小中高校の社会科教育〉

北九州市教育委員会たしろ少年自

然の家(福岡県)・指導主事 池田 正光 〈道徳教育〉

福島県いわき市小学校教育研究会

道徳教育研究部・代表(部長)根本 宮城県亘理町立亘理中学校・教諭 斎藤 公隆 〈小中高校の生活指導〉

篠/井旭高等学校(長野県長野市)・代表(校長) 若林 繁太 〈障害児教育〉

徳島県立聾学校幼稚部·代表(主事) 安川 神戸市小学校教育研究会

心身障害児教育研究部・代表 (部長) 溝下 宏

〈幼児教育〉

奈良県田原本町立南幼稚園・代表(園長) 片岡 良一

■ 第 28 回 1979 年(昭和 54 年) 〈国語教育〉

徳島県立城北高校・教諭佐野 泰臣 〈算数・数学教育〉

山口県光市立室積小学校・教諭 原田 慶子 〈理科教育〉

・ 埼玉県株父郡大滝村立上中尾小学校・代表(校長) 新井 肇司 青森県立青森高等学校・教諭 石戸 励 〈社会科教育〉

千葉県東金市立城西小学校·代表(校長) 加瀬 国雄 〈情操教育〉

栃木県真岡市立中村中学校·代表(校長) 榎戸 隆夫 東京都足立区立寺地小学校・教諭 江藤 勝久 〈障害児教育〉

京都府立与謝の海養護学校・校長 青木 嗣夫 〈幼児教育〉

秋田県南秋田郡飯田川町立若竹幼児

教育センター・飯田川保育園長 石川 郁子 〈社会教育活動〉

群馬県邑楽郡明和村立明和西小学校・PTA前会長 渡 辺 茂 〈教育研究所の活動〉

新潟県地区理科教育センター研究協議会・会長 風巻 友重

第 29 回 1980 年 (昭和 55 年)

〈小中学校の国語教育〉

福井県坂井郡丸岡町立平章小学校·教諭 松本千代子 〈算数·数学教育〉

静岡県浜松市立北小学校・教諭 高橋 莞爾 〈理科教育〉

新潟県立新潟盲学校・教諭 金安 健一 〈情操教育〉

茨城県新治郡桜村立桜中学校・教諭 飯野五十吉 〈障害児教育〉

佐賀県立金立養護学校養訓部・代表(教諭) 重松 康雄 ⟨幼児教育⟩

岐阜県瑞浪市立瑞浪幼稚園・代表(園長) 尾石 安正 学校法人高千穂学園高千穂幼稚園 (東京都)・園長 久野登久子 〈学校の指導・運営〉

鳥取県鳥取市立美保小学校·代表(校長) 木下 政雄 〈社会教育活動〉

千葉市婦人大学セミナー・代表 国吉 君子

■ 第30回 1981年(昭和56年)

〈国語教育〉

宏

東京都立足立西高等学校・教諭 清水 和夫 〈算数・数学教育〉

福島県立二本松工業高校数学科・代表(教論) 本間 正幸 〈理科教育〉

千葉市立北貝塚小学校·代表(校長) 小山 天祐〈社会科教育〉

千葉市立千城台南中学校·教諭 安藤 一郎 千葉市立千城台南中学校·教諭 本保 弘文 〈言語教育〉

大分県立別府養護学校・教諭 宇都宮鏡子 〈児童生徒指導・情操教育〉

広島県尾道市立長江中学校・教諭 八ッ塚 実 〈学校の指導・運営〉

東京都文京区立湯島小学校·代表(前校長) 小沢恒三郎 〈社会教育活動〉 広島市立安西小学校 P T A 会長 沖 繁 〈教育活動・教育政策の研究・実践〉

静岡県清水市教育委員会·代表(教育長)油井 猛治 栃木県宇都宮市立雀宮中学校·教諭 長岡 孝之 栃木県宇都宮市立姿川中学校·教諭 綱川 浄

#### ■ 第 31 回 1982 年(昭和 57 年) 〈国語教育〉

清心女子高校(岡山県倉敷市)・教諭 光元 聡江 〈算数・数学教育〉

宮城県仙台市立南小泉中学校・教諭 久道 登 〈理科教育〉

関の自然を調べる会・代表

(岐阜県関市立下有知小学校校長) 山口常二郎 〈社会科教育〉

長野県北佐久郡軽井沢町立軽井沢東部小学校·教諭 小林 秀夫 〈障害児教育〉

長崎県立長崎養護学校·代表(校長) 内堀 勝見 〈児童生徒指導〉

千葉県夷隅郡岬町立岬中学校·代表(校長) 菰田潤七郎 〈幼児教育〉

兵庫県姫路市立めぐみ保育所・所長 森川 紅 〈学校の指導・運営〉

愛知県西尾市立室場小学校·代表(校長) 高須音次郎 〈教育活動・教育施策の研究・実践〉

千葉県立千葉商業高校·代表(校長) 久保田一麿

# 第 32 回 1983 年 (昭和 58 年)

〈国語教育〉

千葉県富津市立吉野小学校·代表(教諭) 渡辺 さわ 〈算数・数学教育〉

東京都世田谷区立松原小学校·代表(教諭) 坪田 耕三 〈理科教育〉

長崎県北松浦郡小値賀町立小値賀中学校・教頭 真鍋 信義 〈社会科教育〉

〈障害児教育〉 社会福祉法人「しいのみ学園」(福岡市)・園長 曻 地 三 郎 〈児童生徒指導〉

山口県美祢市立伊佐中学校·代表(校長) 原田 卓雄 〈幼児の教育〉

横浜市教育センター 幼児教育センター・所長 白石 伸子 神奈川県横浜市立小菅ヶ谷小学校・教諭 堀井 巳恵子 〈学校の指導・運営〉

新潟県新発田市立外ヶ輪小学校・代表(校長) 大滝 末次 〈社会教育活動〉

福岡県子供会研修隊連絡協議会・会長 宗村 道生

#### ■ 第 33 回 1984 年(昭和 59 年) 〈国語教育〉

福岡県八女郡黒木町立枝折小学校・代表(校長) 栗山シヅカ 宮城県栗原郡若柳町立畑岡小学校・教諭 吉田よし子 〈理科教育〉

富山県富山市立八人町小学校·代表(校長) 水野 平 〈社会科教育〉

千葉県船橋市立高郷小学校・教諭 斎藤 武也 〈障害児教育〉

千葉市立検見川小学校まきのこ学級·代表(教諭) 金沢 義広 千葉市立検見川小学校まきのこ学級·代表(教諭) 奥村 兼弘 〈児童生徒指導〉

新潟県南魚沼郡六日町立六日町 中学校58年度第三学年部·代表(教諭) 田村 賢一

中学校38年度第二学年前·代表(教嗣) 田村 賃一 千葉市立更科小学校・教諭 福田 節子 〈社会教育活動〉 大阪市立こども文化センター 「こども詩の会」・代表(神戸女子大教授) 足立 巻一 〈学校の指導・運営〉

東京都荒川区立日暮里中学校·代表(教諭) 桐山 京子 〈教育活動・教育施策の研究・実施〉

広島県工業教育検討グループ・代表

(広島県立広島工業高校校長) 松前 実

#### ■ 第 34 回 1985 年(昭和 60 年) 〈小中学校の国語教育〉

福島県郡山市立大島小学校・代表(元校長) 星 幸雄 千葉県茂原市立茂原中学校・元教諭 渡辺 昇子 〈算数・数学教育〉

長崎県平戸市立獅子小学校·代表(校長) 真辺 静男 〈理科教育〉

東京都大田区立嶺町小学校・教諭 中馬 民子 〈社会科教育〉

- 島根県松江市立白潟小学校・教諭 森泰 泰 〈障害児教育〉

東京都立足立養護学校中学部·代表(教諭) 脇 坂 順 雄 〈児童生徒指導〉

奈良県王寺町立王寺小学校・教諭 池島 徳大 〈情操教育〉

埼玉県大宮市立指扇小学校·教諭 高橋 昭子 〈社会教育活動〉

大月市社会教育委員(山梨県)・元委員長 山口 英夫 〈教育活動・教育施策の研究・実践〉

静岡県立静岡工業高校(定時制)・教諭 小堀 一郎

#### ■ 第 35 回 1986 年(昭和 61 年) 〈国語教育〉

、 愛知県名古屋市立南光中学校・教諭 吉村 勇善 〈算数・数学教育〉

長崎県郷ノ浦町立初山小学校

算数科学習指導研究会·代表(校長) 末永 正幸 〈理科教育〉

東京都大田区立入新井第一小学校·教諭 三石 光子 埼玉県都幾川村立都幾川中学校·教諭 酒井 克 〈社会科教育〉

福岡県北九州市立永犬丸西小学校·教諭 青柳 睦 〈学校体育〉

千葉県大多喜町立西畑小学校·代表(校長) 渡 辺 五郎 〈障害 児教育〉

東京都立石神井ろう学校·代表(元教諭) 小川美佐子 〈児童生徒指導〉

千葉工商高校(千葉市)・教諭 林 芳隆 〈学校の指導・運営〉

神奈川県川崎市立高津中学校·代表(教諭(応募時)) 馬場 英顕 〈社会教育活動〉

川崎市菅生こども文化センター企画会議委員 十文字美恵

# ■ 第 36 回 1987 年(昭和 62 年)

〈国語教育〉

青森県八戸市立根城中学校・教諭 橋本 ヤス 〈算数・数学の教育〉

山口県立南陽工業高等学校・教諭 竹本 芳朗 〈社会科教育〉

新潟県長岡市立南中学校・教諭 小森ケン子〈学校体育〉

、成年。 岐阜県岐南町立東小学校·代表(校長) 吉田 豊一 〈障害児教育〉

福岡県北九州市立八幡西養護学校・教諭 原 敏夫 〈学校の指導・運営〉

新潟県立新発田南高等学校·教諭 田中 洋-

昭和女子大学附属昭和小学校(東京都)·代表(教頭) 已波 瑠美 〈教育委員会・教育研究所の調査研究活動〉

群馬県松井田町教育委員会・代表(教育長) 小板橋文夫

1988年(昭和63年) 第 37 回 〈国語教育〉

東京学芸大学附属世田谷中学校・教諭 高橋 俊三 〈理科教育〉

岡山県立玉野高等学校・教諭 宮崎 武史 福島県立福島女子高等学校・教諭 幸雄 菅野 〈児童・生徒指導〉

栃木県大田原市立大田原小学校・教諭 治朗 加藤 〈幼児の保育〉

東京都千代田区立錦華幼椎園・教諭 原田 爱子 〈障害児教育〉

秋田県立秋田養護学校・養護教諭 中村 幸子 〈学校の指導・運営〉

群馬県上野村立上野中学校・代表(教務主任) 大島 道男 山形学院高等学校「小さな親切の会」

(山形県)・代表(顧問) 幹夫 〈社会教育活動〉

若人の集い実行委員会(北海道八雲町)・代表(委員長) 高木 一哉 〈教育委員会・教育研究所の調査研究活動〉

千葉県柏市教育委員会·代表(教育長) 古谷 武雄

■ 第38回 1989年(昭和64年/平成元年) 〈国語教育〉

島根県桜江町立川越小学校・教諭 山田 澄子 〈算数・数学教育〉

岩手県一戸町立小鳥谷中学校・代表(校長) 野 里 広 〈理科教育〉

広島県世羅町立西大田小学校・代表(校長) 井上 右三 〈社会科教育〉

神奈川県川崎市立向丘中学校・教諭 永島 正雄 〈障害児教育〉

東京都練馬区立旭丘中学校・教諭 永野 佑子 〈学校の指導・運営〉

福岡県北九州市立山の口小学校・校長 和田 啓子 徳島県那賀川町立那賀川中学校・代表(校長) 稲飯 章 〈社会教育活動〉

山梨県ボランティア協会・代表(事務局次長) 尚志 東京都世田谷区「自然の教室」・主宰 秋山 元冶 〈教育委員会・教育研究所の調査研究活動〉

栃木県足利市教育委員会·前教育長 中村 斊

#### 第 39 回 1990年 (平成2年)

〈国語教育〉 静岡県立藤枝北高等学校・教諭 田中

宏和 〈理科教育〉 光孝 愛知県名古屋市立猪子石小学校・教諭 中野

工学院大学高等学校 (東京都八王子市)・教諭 後藤 道夫 〈社会科教育〉

重県伊勢市立東大淀小学校·代表(教頭) 塩 崎 勝彦 〈幼児の教育〉

長野県保育専門指導員宮崎 清 〈障害児教育〉

直方に小規模通園施設をつくる会」

(福岡県直方市)・代表(会長) 康男 中島 〈学校の指導・運営〉

福岡県北九州市立曾根中学校・校長 品川 洋子 宮城県栗原郡築館町立築館中学校・代表(教諭) 鈴木 信勇 〈社会教育活動〉

東京都多摩市立北豊ケ丘小学校

ゆりの木会課外活動委員会・代表 早川たか子

少年少女文化財教室(大阪府箕面市)・代表(主宰) 辻尾 栄市

第 40 回 1991年 (平成3年) 〈国語教育〉

茨城県阿見町立竹来中学校・教諭 中根 瑛子 〈算数・数学教育〉

山口県岩国市立通津小学校・代表(校長) 藤田 梅二 〈社会科教育〉

東京都荒川区立第二日暮里小学校・教頭 望月 公子 〈外国語教育〉

東京都豊島区立朝日中学校・校長 石川 英子 〈児童・生徒指導〉

盈進高等学校(広島県)・代表(教頭) 杉原 耕治 〈幼児の教育〉

東京都中央区立京橋朝海幼稚園・教諭 宇井 靖子 〈障害児教育〉

鳥取県立白兎養護学校·代表(校長) 徳永 好三 〈学校の指導・運営〉

静岡県静岡市立安東小学校・代表(校長) 山本 良苗 〈社会教育活動〉

広島県広島市中央公民館・代表(館長) 松原 明二 〈教育委員会・教育研究所等の調査研究活動〉

新潟県中学校教育研究会・代表(会長) 梅山

#### 第 41 回 1992年(平成4年) 〈国語教育〉

青森県立五戸高等学校・教諭 川上 信子 〈算数・数学教育〉

愛知県知立市立知立中学校・教諭 三浦 祥志 〈理科教育〉

山口県防府市立牟礼小学校・校長 城 成治 福島理科の会・代表(会長) 大室 幹男 〈社会科教育〉

岐阜県美濃加茂市立山手小学校・代表(校長) 渡 辺 均 〈外国語教育〉

福井県立武生東高等学校国際科・代表(教諭) 内田 勝夫 〈体育の教育〉

山口県阿武町教育委員会・派遣社会教育主事 新川 美水 〈障害児教育〉

ダウン症児の早期療育を進める会「ひまわりの会 |・代表 伊子 岡部 〈児童・生徒指導〉

長野県中野市立高社中学校・元校長 竹内 隆夫 〈学校の指導・運営〉

茨城県石岡市立関川小学校・代表(校長) 入 澤 董 〈社会教育活動〉

淳 岩手県三陸町立甫嶺小学校・代表(校長) 高 橋

#### 第 42 回 1993年(平成5年) 〈国語教育〉

神奈川県藤沢市立滝の沢小学校・教諭 阿部 直久 群馬県桐生市立東中学校・教諭 四分一 〈算数・数学教育〉

山形算数·数学評価研究会·代表(会長) 山本 正明 〈社会科教育〉

東京都立秋留台高等学校・教諭 村野 光則 〈体育の教育〉

神奈川県藤沢市立小学校体育研究会 南 英 毅 〈幼児の教育〉

静岡県磐田市立東部小学校附属

南御厨幼稚園・代表(副主任)角皆 恵子 〈障害児教育〉

愛知県名古屋市立平田小学校・非常勤講師 堀田喜久男 〈学校の指導・運営〉

山口県美祢市立重安小学校・教諭 井上

東京都北区立北中学校内不登校児童

生徒 訪 問 指 導 室・嘱 託 員 島田 葉子 〈社会教育活動〉

群馬県生涯学習センター・代表(館長) 千吉良 覺

#### ■ 第43回 1994年(平成6年)

〈国語教育〉

奈良県立添上高等学校・教諭 矢尾 米ー 〈算数・数学教育〉

千葉県立船橋豊富高等学校数学科·代表 滝 沢 洋 〈理科教育〉

栃木県宇都宮市立若松原中学校·教諭 南木 義男 〈社会科教育〉

千葉県市川市立第八中学校・教諭 竹澤 伸一 〈生活科の指導〉

東京都江戸川区立大杉東小学校・教諭 宮原千香子 〈体育の教育〉

静岡県浜北市立新原小学校·代表(校長) 大石 修司 〈外国語教育〉

財団法人津田塾会 津田英語会·講師 股野 儷子 〈児童生徒指導〉

神奈川県大磯町立大磯中学校·代表 吉田 文彰 〈障害児教育〉

東京都立墨東養護学校・教諭 渡辺美佐子 〈社会教育活動〉

川崎市ふれあい館(神奈川県)・代表(館長) 裵 重度 岐 阜 県 高 山 市 農 業 委 員 谷口いわお 〈学校の指導・運営〉

佐久島の教育を育てる会・代表 安井 克彦

# 第 44 回 1995 年 (平成 7 年)

〈国語教育〉

兵庫県神戸市立湊小学校・教諭 鹿島 和夫 大阪教育大学附属平野中学校・教諭 辻井 義彦 〈算数・数学教育〉

東京都大田区立道塚小学校・教諭 横山美登里 〈理科教育〉

千葉県立船橋高等学校

リニアモーターカー同好会・代表(教諭) 大山 光晴 〈社会科教育〉

埼玉県飯能市立飯能第一中学校・教諭 福田 英樹 〈生活科の教育〉

三重県四日市市立常磐西小学校・教諭 宮沢知可子 〈体育の教育〉

福島県大信村立信夫第一小学校·代表(校長) 鈴 木 神 一 〈児童生徒指導〉

長野県佐久市立中込小学校・前校長 木内 保敬 〈学校の指導・運営〉

広島県深安郡神辺町立神辺小学校·教諭 妹尾 敬士 〈障害児教育〉

東京都立小金井養護学校・前教頭 前迫美知子

#### ■ 第 45 回 1996 年(平成 8 年)

〈国語教育〉

盈進中学校(広島県)·代表(校長) 杉原 耕治 〈算数·数学教育〉

広島県福山市算数教育研究会·代表 紺谷 光男 〈理科教育〉

富山県立大門高等学校 理科部·代表(教諭) 藤 井 修二〈社会科教育〉

東京都目黒区立田道小学校・教諭 望月みどり 〈外国語教育〉

茨城県十三町立十王中学校・教諭 大内 富夫〈学校の指導・運営〉

神奈川県川崎市立南菅中学校・校長 芳野 菊子 千葉県八千代市立米本南小学校・代表(校長)田中 強 〈地域社会教育活動〉

茨城県総和町立西牛谷小学校・元PTA会長 長浜 音一 〈教育カウンセリング〉

大阪府立松原高等学校・教諭 佐谷 力 東京都八王子市立第一中学校・委嘱スクールカウンセラー 黒沢 幸子

## ■ 第 46 回 1997 年(平成 9 年)

\_\_\_\_〈算数・数学教育〉

川崎市立中学校数学科図形教育研究チーム・代表(校長) 馬場 英顕 〈理科教育〉

福岡県北九州市立鴨生田小学校·代表(校長) 小山田鈴子 〈社会科教育〉

愛知県下山村立下山中学校・教諭 川合 英彦 〈生活科・総合学習〉

兵庫県教育委員会阪神教育事務所・指導主事 松田 智子 〈体育の教育〉

· 神奈川県横浜市立南小学校·代表(校長) 安武 寿雄 〈外国語教育〉

一白百合学園中学高等学校(東京都)・教諭 桑原 雅乃 〈児童生徒指導〉

高知市立高知商業高等学校・教諭 岡崎 伸二 埼玉県川越市立寺尾中学校・教諭 山崎 祐一 〈学校の指導・運営〉

千葉県立君津農林高等学校・教諭 宗政 恒興 〈地域社会教育活動〉

千葉県習志野市立秋津小学校·代表(校長) 宮 崎 稔〈障害 児教育〉

京都市立新道小学校弱視教室・代表(教諭) 中東 朋子

#### ■ 第 47 回 1998 年(平成 10 年) 〈国語教育〉

、 大阪府立清水谷高等学校・教諭 清水 直樹 〈理科教育〉

、全日3人日7/ 福島県伊達町立伊達中学校・講師 菅野 サチ 〈社会科教育〉

愛知県豊田市立梅坪小学校·教諭 外山記代子 〈生活科·総合学習〉

愛知県蒲郡市立形原中学校・教諭 島内三都子〈体育の教育〉

山口県防府市立新田小学校・教諭 水野 昭 〈外国語教育〉

愛知県西尾市立花ノ木小学校·代表(教諭) 高橋 正治 〈児童生徒指導〉

岡山県笠岡市立新吉中学校・教諭 池本 文子 〈幼児教育・保育〉

東京都千代田区立和泉幼稚園・園長 佐瀬スミ子 〈学校の指導・運営〉

「兵庫県立鈴蘭台高等学校・教諭 青島 成夫 〈地域社会教育活動〉

千葉県松戸自主夜間中学·代表 藤田 恭平 愛知県立港養護学校·教諭 高村 豊

# 第 48 回 1999 年(平成 11 年)

〈国語教育〉

京北中学校(東京都)・教頭 川合 正 共立女子第二中学・高校(東京都)・教諭 渡辺久仁子 秋田県立能代北高校・教諭 貝田 桃子 〈算数・数学教育〉

お茶の水女子大学附属高校(東京都) 室岡 和彦 〈理科教育〉

滋賀県安土町立老蘇小学校・教諭 西川 伸一 〈生活科・総合学習〉 愛知県碧南市立中央中学校・教諭 金子てる子 〈体育の教育〉

奈良県大和高田市立高田小学校・教諭 西川 潔 〈外国語教育〉

常葉学園高校(静岡県)·教諭 永倉 由里 〈児童生徒指導〉

大阪府立門真西高校・教諭 佐藤 功 〈教育カウンセリング〉

よりよい子供の育ちを考える会・代表 市川 紀史〈学校の指導・運営〉

愛知県名古屋市立西陵商業高校・教諭 影戸 誠 新潟県十日町市立飛渡第一小学校・代表(校長) 根津敬一郎 〈地域社会教育活動〉

庄内地域づくりと子育で・文化協同の会・代表 塩野 俊治 〈障害児教育〉

障害児基礎教育研究会・代表 水口 浚

#### ■ 第 49 回 2000 年 (平成 12 年) 〈国語教育〉

・ 東京都品川区立立会小学校·代表(校長) 長谷川清之 〈理科教育〉

上越教育大学附属中学校(新潟県)·教諭 熊 木 徹 〈社会科教育〉

三重県四日市市立日永小学校・教諭 伊藤 浄二 〈生活科・総合学習〉

横浜市教育センター (神奈川県)・専任研究員 鷲山龍太郎 愛知県岡崎市立六ツ美北部小学校・教諭 都築真美子 〈体育の教育〉

、保事・3、記事・ 徳島県阿南市立橘小学校・教諭 小笠 明寛 〈児童生徒指導〉

福島県立石川高等学校・教諭 庄司 一幸 〈学校の指導・運営〉

宮城県北上町立相川小学校・校長 菅原 義一 長野県塩尻市立片丘小学校・校長 手塚 恒人 〈地域社会教育活動〉

爱知県岡崎市立秦梨小学校父母教師会·代表 鈴木 好彦 〈幼児教育·保育〉

東京都新宿区立戸塚第三幼稚園・教諭 三本 敦子

#### ■ 第 50 回 2001 年(平成 13 年) 〈国語教育〉

滋賀県立甲西高等学校・教諭 猪飼由利子 〈算数・数学教育〉

宮城県立ろう学校・教諭 中村 好則 〈理科教育〉

、 和洋国府台女子高等学校(千葉県)・教諭 栗谷川 晃 〈社会科教育〉

東京都立町田高等学校·教諭 本杉 宏志 〈生活科·総合学習〉

福島県福島市立清水中学校・教諭 柳沼 宏寿 徳島県上勝町立上勝小学校・教諭 藤本 勇二 〈外国語教育〉

、女子聖学院中学校高等学校(東京都)・教諭 山下ルミ子 〈児童生徒指導〉

和歌山県和歌山市立貴志中学校・教諭 小笠原登志美 〈学校の指導・運営〉

愛知県額田町立大雨河小学校·教諭 荻野 嘉美 〈地域社会教育活動〉

栃木県立栃木工業高等学校国際

ボランティアネットワーク・代表(生徒会長) 門澤 美治 愛 知 学 泉 短 期 大 学 神谷 良夫 愛 知 市 民 教 育 ネ ッ ト 毛受 芳高 〈障害児教育〉

マジカルトイボックス・代表 吉澤 千恵

〈音楽教育〉

立教小学校(東京都)·教諭 志村 尚美

第 51 回 2002 年(平成 14 年)

静岡県浜松市立高等学校・教諭 堀江マサ子〈算数・数学教育〉

東京学芸大学教育学部附属世田谷中学校·教諭 羽住 邦男 〈理科教育〉

埼玉県立越谷北高等学校・教諭 清水 龍郎 〈社会科教育〉

山口県大島郡久賀町立椋野小学校・教諭 桑原 真洋〈生活科・総合学習〉

新潟県新潟市立真砂小学校・教諭 藤橋 一葉 東京都大田区立矢口小学校・教諭 中村 泰之 〈体育の教育〉

岐阜県下呂町立下呂小学校·代表(校長) 今村 豊 〈外国語教育〉

・昭和女子大学附属昭和小学校(東京都)・代表 小泉 清裕 〈児童生徒指導〉

埼玉県羽生市立東中学校・教諭 加藤 昭 〈教育カウンセリング〉

大阪府立松原高等学校・教諭 佐谷 力 〈学校の指導・運営〉

東京都板橋区立金沢小学校·校長 高山 厚子 〈地域社会教育活動〉

東京都立市ケ谷商業高等学校・教諭 千葉 勝吾 〈幼児教育・保育〉

大阪府立芥川高等学校・教諭 高橋 眞子 〈美術教育〉

東京都品川区立第三日野小学校・代表(教諭) 内野 務

#### ■ 第 52 回 2003 年(平成 15 年) 〈国語教育〉

愛知県北設楽郡設楽町立田口小学校·代表(校長) 藤 本 好 男 〈 算 数 · 数 学 教 育 〉

田園調布雙葉中学高校(東京都)·教諭 足立久美子 〈理科教育〉

福井県福井市立明倫中学校・教諭 宇野 秀夫 〈社会科教育〉

《任玄行教育》 埼玉県立所沢北高校・教諭 水村 裕 〈生活科・総合学習〉

長野県小県郡丸子町立丸子北中学校・教頭 小室 邦夫 大阪府立城山高等学校・教諭 中村 和幸 〈学校の指導・運営〉

青森県立柏木農業高等学校・教諭 佐藤 晋也 〈地域社会教育活動〉

千葉県立四街道養護学校教諭

NPO 法人あかとんぼ福祉会理事長 松浦 俊弥 〈障害児教育〉

神奈川県立平塚ろう学校・教諭 佐渡 雅人 〈音楽教育〉

千葉大学教育学部附属小・中学校・講師 桐原 礼

#### ■ 第 53 回 2004 年(平成 16 年) 〈国語教育〉

東京都羽村市立羽村第二中学校·教諭 水野 美鈴〈算数·数学教育〉

新潟県魚沼市学習指導センター・指導主事 松沢 要一 〈理科教育〉

神奈川県三浦市教育委員会学校教育課·指導主事 益田 孝彦 〈社会科教育〉

東京都杉並区立和田中学校·教諭 杉浦 元一 〈生活科·総合学習〉

福岡教育大学附属福岡小学校・教諭 光延正次郎 〈保健・体育の教育〉

茨城県つくば市立竹園西小学校・教諭 新井 清司 〈外国語教育〉

兵庫県伊丹市立伊丹高等学校·教諭 久保 裕視 〈児童生徒指導〉

沖縄県立北部工業高校・教諭 比嘉 靖 〈学校の指導・運営〉

宮城県七ヶ浜町小・中学校校長会・代表(町教育長) 中津川伸二 〈地域社会教育活動〉

長野俊英高等学校郷土研究班(長野県)・代表(顧問) 土 屋 光男 神奈川県川崎市臨港中学校区地域教育会議・事務局長 '宮 越 隆夫 〈幼児教育・保育〉

学校法人大泉菁莪学園ほうや幼稚園 (東京都)・副園長 鈴木 朋子 〈美術教育〉

福岡県福岡市立愛宕小学校・教諭 馬場 真弓

#### ■ 第 54 回 2005年(平成17年)

〈国語教育〉

文部科学省海外子女教育指導員(欧州統括) 富 澤 敏彦 〈算数・数学教育〉

東京都中野区立桃丘小学校・教諭 吉田 映子 〈理科教育〉

長崎県立長崎西高等学校・教諭 田中 清 〈生活科・総合学習〉

香川県木田郡庵治町立庵治第二小学校・教諭 佐々木広子 今治明徳高等学校矢田分校(愛媛県)・教諭 藤本 文昭 〈保健・体育の教育〉

岩手県種市町立宿戸中学校・校長 渡邉不二夫 〈外国語教育〉

滋賀県立草津東高等学校・教頭 山岡 憲史 〈児童生徒指導〉

東京都多摩市立多摩中学校・校長 山本 修司 〈教育カウンセリング〉

香川県警察本部生活安全部少年課・課長補佐 香川 雅之 〈学校づくり〉

山形県羽黒町立 (現鶴岡市立羽黒) 第三小学校・前校長 佐々木勝夫 香川県高松市立仏生山小学校・校長 古沢 博美 〈地域社会教育活動〉

山口県立下関商業高等学校・養護教諭 石田 法子 大阪府立農芸高等学校・教諭 石田 真一 〈障害児教育〉

東京都立城南養護学校·代表(研究部主任) 川上 康則

#### 第 55 回 2006年(平成18年)

〈国語教育〉

光子 茨城県下妻市立豊加美小学校·代表(校長) 堤 〈算数・数学教育〉

岩手県花巻市立八重畑小学校・代表(校長) 三田村幸治 〈理科教育〉

香川県立丸亀高等学校・教諭 川村 教一 〈社会科教育〉

岡山県倉敷市立多津美中学校・教諭 野崎 洋子 〈生活科・総合学習〉

愛知県名古屋市立東築地小学校・教諭 酒井喜八郎 〈児童生徒指導〉

三重県いなべ市立員弁中学校・教諭 出口 省吾 〈教育カウンセリング〉

埼玉県教育局·南部教育事務所·指導主事 児 玉 裕子 〈学校づくり〉

長野県豊科高等学校・教諭 穂苅 稔 〈地域社会教育活動〉

NPO 法人霧島食育研究会(鹿児島県) 千葉 しのぶ 〈美術教育〉

埼玉県立浦和高等学校·教諭 波田野公一

第 56 回 2007年 (平成19年) 〈国語教育〉

宮城県仙台市立北仙台中学校・教諭 中村 大輔 〈算数・数学教育〉

山梨大学教育人間科学部附属中学校·教諭 清水 宏幸 〈理科教育〉

山口県立厚狭高等学校・教諭 児玉伊智郎 〈社会科教育〉

慶應義塾湘南藤沢中・高等部(神奈川県)・講師 金杉 〈生活科・総合学習〉

千葉県千葉市立高洲第二小学校・教諭 山嵜 早苗 〈保健・体育の教育〉

奈良県生駒市立あすか野小学校・教諭 前田 香織 〈外国語教育〉

福岡県大野城市立大野南小学校・教諭 上原 明子 〈児童生徒指導〉

高 知 市 立 横 浜 小 学 校・教 諭 汲田喜代子 〈学校づくり〉

東京都港区立港陽小学校・校長 角田美枝子 〈地域社会教育活動〉

阿波木偶人形会館(徳島県)・館長 多田 健二 〈障害児教育〉

鳥取県鳥取市立浜坂小学校・教諭 鈴木 伝男 〈音楽教育〉

埼玉県さいたま市立本太中学校・教諭 森角由希子

#### 第 57 回 2008年 (平成 20年)

〈国語教育〉

兵庫県三田市立けやき台小学校・教諭 伊崎 一夫 〈算数・数学教育〉

東京学芸大世田谷中学校・教諭 山崎 浩二 〈社会科教育〉

青 山 学 院 高 等 部・教 諭 松本 通孝 成蹊中学・高等学校・教諭日高 智彦 〈生活科・総合学習〉

愛知県西尾市立寺津小学校・校長 高 橋 正 治 〈保健・体育の教育〉

埼玉県越谷市立鷺後小学校·教諭 岩本 利夫 〈外国語教育〉

岩手県一関市立一関中学校英語科代表 教頭・千田幸範 及川 千佳

佐藤 久美 小野寺明子 彩 富山

〈児童生徒指導〉

滋賀県長浜市立西中学校・教諭 澤 豊治 〈学校づくり〉

東京都練馬区立豊玉南小学校代表(研究主任担当) 遠 田 公博 〈地域社会教育活動〉

青森県立八戸第二養護学校・教諭 西里 俊文 〈美術教育〉

川崎市立はるひ野小中学校教諭 川合 克彦

#### 第 58 回 2009年 (平成 21 年) 〈国語教育〉

千葉大学教育学部付属小学校教諭 大木 圭 〈算数・数学教育〉

山口県立岩国高等学校教諭 西元 教善 〈理科教育〉

青 山 学 院 高 等 部 教 諭 池田 敏 〈社会科教育〉

本郷学園本郷中学高等学校教諭 横山

〈生活科・総合学習〉

兵庫県篠山市立大山小学校教諭 酒井 達哉 〈教育カウンセリング〉

徳島市立上八万小学校カウンセリング 研究会代表徳島市立上八万小学校教諭 辻 映 子 〈学校づくり〉

→ 静岡県立磐田農業高等学校代表 塚本行博校長
〈地域社会教育活動〉

大森学園高等学校 生徒会ボランティア教諭 安 達 〈地域社会教育活動〉

NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 辻英之代表理事 梶さち子会長

〈特別支援教育〉

吹田市立教育センター主幹 森田 安徳 吹田市立吹田第三小学校指導教諭 辻本 裕子 〈音楽教育〉

川崎市立藤崎小学校総括教諭 志村 恵子

■ 第59回 2010年(平成22年) 〈国語教育〉

。 岡山県赤磐市立吉井中学校・教諭 北川久美子 〈算数・数学教育〉

高知県土佐教育研究会久保 博行 松下 泰三 室戸市立吉良川小学校·教諭矢田 敦之

〈理科教育〉 石川県立翠星高等学校・教諭 宮 下 正 司

〈社会科教育〉 - 大阪府高槻中学・高等学校・教諭 楊田 龍明 〈生活科・総合学習〉

新潟県長岡市立上組小学校·教諭 水谷 徹平 〈外国語教育〉

ノートルダム学院小学校(京都市)・教頭 行田 隆一 〈児童生徒指導〉

東京都府中市立府中第三中学校・元教諭 高橋 芳宏 〈教育カウンセリング〉 東京女学館中学高等学校・教育相談室長 渡邉 正雄

□ 東京女子郎中子尚寺子校・教育相談全女 没 選 正 歴 〈学校づくり〉

 ○ 学 校 法 人 明 晴 学 園 ・ 教 頭 榧 陽 子

学校法人明晴学園·教頭榧陽子 〈地域社会教育活動〉

鹿児島市立清水小学校・前校長 池田 昭夫 清水小学校水泳同好会・前会長 有薗 良一 〈幼児教育・保育〉

社会福祉法人高原福祉会・理事長 高橋 保子 〈美術教育〉 東京都多摩市立北豊ケト小学校・主任教諭 柴 崎 裕

■ 第 60 回 2011 年 (平成 23 年) 〈国語教育〉

- 埼玉県立浦和第一女子高校・講師 長島 猛人 〈算数・数学教育〉

大阪教育大学付属池田中学校教学科代表· (副校長) 上原 昭三 (教諭) 山戸 正啓

〈社会科教育〉

興南学園興南中学校 (那覇市)・教諭 門林 良和 〈生活科・総合学習〉

茨城県水戸市立稲荷第一小学校·教諭 池田 裕子 〈外国語教育〉

愛知県豊橋市立青陵中学校・教諭 桃野己恵子 〈学校づくり〉

宇都宮市立旭中学校・教諭 田崎 透

〈特別支援教育〉

福岡県久留米市立小森野小学校·教頭 山田 俊之 〈幼児教育·保育〉

福井県教育庁地域サイエンス博士 山田 儀一〈音楽教育〉

千葉市立院内小学校・教諭 桶田 加代 〈美術教育〉

新潟県阿賀野市立笹岡小学校·教頭 青木 善治

■ 第 61 回 2012 年(平成 24 年) 〈国語教育〉

- 栃木県日光市立落合西小学校・教諭 見目 宗弘 〈算数・数学教育〉

志の算数教育研究会(東京都)・代表 盛山 隆雄 加固希支男 山本 大貴 松瀬 仁

〈理科教育〉

出雲科学館(島根県)·名誉館長 曽我部國久 〈生活科·総合学習〉

鹿児島県奄美市立伊津部小学校・教諭 中島賢太郎 〈外国語教育〉

大阪女学院中学·高等学校(大阪市)·教諭 中藤 優子 〈児童生徒指導〉

福井県鯖江市・立待小学校・教諭 岩堀 美雪〈学校づくり〉

大阪府立東百舌鳥高等学校・教諭 稲川 孝司 〈地域社会教育活動〉

ウーマンズフォーラム魚(東京都)・代表 白石ユリ子 〈特別支援教育〉

神奈川県立金沢養護学校·副校長 渡邉 昭宏 〈音楽教育〉

リトミック・ピアノ教室 (名古屋市)・主宰 浦浜 麗名

■ 第62回 2013年(平成25年)

〈国語教育〉 神奈川県大和市立西鶴間小学校・教諭 山根 幸一 〈算数・数学教育〉

福井県越前市立吉野小学校・教諭 宮脇 真一 〈理科教育〉

| 岡山県倉敷市立多津美中学校・教諭 難波 治彦 〈社会科教育〉

千葉市立有吉小学校・教諭 江崎 広章 〈保健・体育の教育〉

石川県加賀市立錦城小学校・代表(教諭) 釜親美和子 〈外国語教育〉\_\_\_\_\_\_

鳥取県立鳥取西高校・教諭 辻中 孝彦 〈教育カウンセリング〉

愛知県碧南市立大浜小学校・教諭 長田 洋一 〈学校づくり〉

神奈川県立綾瀬西高校・総括教諭 竹 本 弥 生 〈地域社会教育活動〉

神奈川県立中央農業高校・草花部顧問 高橋 晋太郎 〈幼児教育・保育〉

愛知県豊田市立平山ことも園園内研究会・代表(保育士) 渡 辺 紫 乃 〈美術教育〉

佛教大学教育学部特任教授 橋本 忠和

■ 第 63 回 2014 年(平成 26 年) 〈国語教育〉

岐阜県加茂郡白川町立白川小学校·代表(校長) 宮内智鶴子 〈算数・数学教育〉

長野県屋代高等学校・附属中学校・教諭 横澤 克彦 〈理科教育〉 福島県福島市立渡利中学校・教諭 菅野 俊幸〈生活科・総合学習〉

教育研究グループ Shinka (兵庫県)

代表 兵庫県三田市立武庫小学校・教諭 荒井 隆一 教諭 縄手 良孝 教諭 谷口 雅子

〈外国語教育〉

徳島県美馬市立江原中学校・教諭 福田 恵 〈児童生徒指導〉

群馬県高崎市教育委員会・教育長 飯野 真幸 〈教育カウンセリング〉

新潟県燕市立燕中学校・教諭 吉澤 孝子 〈学校づくり〉 横浜市立白幡小学校平成23・24・25年度PTA会長藤川 優

横浜市立白幡小学校平成23·24·25年度PTA会長 藤川 〈地域社会教育活動〉

公益社団法人群馬県助産師会

代表 同会会長 助産師 鈴木助産院院長 鈴木せい子 〈特別支援教育〉

福井県立嶺南東特別支援学校・教諭 伊藤ゆかり〈音楽教育〉

千葉県鎌ケ谷市立西部小学校・教諭 鈴木 智恵

■ 第 64 回 2015 年(平成 27 年) 〈国語教育〉

| 茨城県結城市立江川北小学校·代表(研究主任) 小倉 康雄 〈算数・数学教育〉

東京大学教育学部付属中等教育学校·教諭 小張 朝子 〈社会科教育〉

北海道函館市立亀田中学校・教諭 川端 裕介 〈生活科・総合学習〉

広島県福山市立常金中学校·代表(校長) 和田 啓介 〈保健・体育の教育〉

岐阜県大垣市立綾里小学校·代表(校長) 前田 和典 〈地域社会教育活動〉

千葉県立成田西陵高等学校・教諭 清水 敏夫 認定特定非営利活動法人ふじみの 国際交流センター・代表(理事長) 石井ナナエ 〈幼児教育・保育〉

学校法人あけぼの学院認定こども園 武庫愛の園幼稚園・代表(園長) 〈美術教育〉

福井県観光営業部文化振興課・主任 牧井 正人

読売教育賞に関するお問い合わせ、募集要項のご請求は、読売新聞東京 本社編集局「読売教育賞」係 (TEL03-6739-6713) にお願いします。

また、ヨミウリ・オンライン(https://info.yomiuri.co.jp/contest/edu/kyoiku.html)にも募集期間中には要項を掲載しています。